

# 悠遊

第二十三号



企業OBペンクラブ

## ペン・フォト句（前編）

こんな所に  
たまげたな **モジリアニ**



安藤 晃二

梅雨湿り  
すぐに**剥がれる**  
絆創膏



中村 晃也

**マンタの群れや**  
美ら海の **戦闘機**



松田 昌康

**お触り**が 極楽浄土の  
パスポート



大月 和彦

情報化 いつも誰かに **見られてる**



大越 浩平

# 悠遊

第二十三号

企業OBペンクラブ

## 表紙の絵「思い出のパッチワーク」

福本 多佳子

渋谷のデュフィ展で“Panoramic View of Paris”というタイトルの絵を見た。その時、私は10年住んだシリコンバレーのPanoramic Viewを描こうと思った。Golden Gate Bridgeから始まり、Redwood Shoreにあるオラクルの本社、通称“Emerald City”、太平洋岸のHalf Moon Bay、南に下りてStanford大学、Mountain Viewの水鳥や小動物、さらに南には風光明媚で名高い海辺の町、Monterey、Carmelへと続くまさに地中海性気候のゴールデンルート。描き始めたら思い出多いAnnapolisの光景も描いていた。これを見た友人がパッチワークみたいと言った。ゝ題名が決まった！、

## 目次

|           |         |
|-----------|---------|
| ▽巻頭言…………… | 大越 浩平 4 |
|-----------|---------|

### Ⅱ特集Ⅱ 日本 これから

|                          |          |
|--------------------------|----------|
| ▽神輿をかつぐ……………             | 大平 忠 6   |
| ▽「模倣から創造へ」―不思議な日本人―…………… | 細谷 博 8   |
| ▽選挙権年齢引き下げに思う……………       | 鳥海 博 10  |
| ▽これからの祭り……………            | 八木 信男 12 |
| ▽千載一遇の好機……………            | 池田 隆 14  |
| ▽グローバル情報社会の言葉……………       | 市川 忠夫 16 |
| ▽絶対と相対……………              | 稲宮 健一 18 |
| ▽中近東の紛争……………             | 杉浦 右藏 20 |
| ▽日本が失ったもの、取り戻すすべ……………    | 野上 浩三 22 |
| ▽「過剰反応社会」からの脱却……………      | 横内 則之 24 |
| ▽日本のこれから ―老人の願い……………     | 山縣 正靖 26 |
| ▽子どもたちの未来のために……………       | 田宮 實 28  |
| ▽深刻化する世界情勢に想う……………       | 安藤 晃二 30 |
| ▽COL JAPAN?……………         | 西川 武彦 32 |
| ▽今も昔もみんな大変……………          | 児玉 寛嗣 34 |
| ▽清き国、日本……………             | 森田 晃司 36 |
| ▽日本の未来に必要なこと……………        | 上田 信隆 38 |
| ▽したたかな北朝鮮……………           | 平尾 富男 40 |

### Ⅱ特集Ⅱ 旅の流儀

|                           |          |
|---------------------------|----------|
| ▽旅は遙かに……………               | 富岡喜久雄 44 |
| ▽今日は大山が見えるか?……………         | 浜田 道雄 46 |
| ▽佐渡の旅……………                | 保坂 令華 48 |
| ▽脱重入欧の旅……………              | 大野 晃 50  |
| ▽同行二人と二期二会……………           | 内田 満夫 52 |
| ▽菅江真澄の旅日記を読む……………         | 大月 和彦 54 |
| ▽旧交の旅……………                | 岩崎洋一郎 56 |
| ▽ウズベキスタン共和国への旅……………       | 田原 敬 58  |
| ▽船と山……………                 | 阿部 典文 60 |
| ▽アルプス二万尺を走る……………          | 志村 良知 62 |
| ▽旅の杖……………                 | 猪股 重子 64 |
| ▽心身癒やしの旅―梅の木「葉」の杖……………    | 羽田 壽夫 66 |
| ▽外遊をした犬……………              | 都甲 昌利 68 |
| ▽オレの旅の流儀……………             | 松谷 隆 70  |
| ▽『旧街道歩き』と『北海道温泉巡り』……………   | 清水 勝 72  |
| ▽中国やきものツアーに誘われて……………      | 原田 信 74  |
| ▽実記を片手に「久米邦武・追っかけの旅」…………… | 鶴飼 直哉 76 |
| ▽センチメンタル・ジャーニー……………       | 福本多佳子 78 |
| ▽旅の終わり……………               | 斉藤 征雄 80 |

### Ⅱ自由テーマⅡ

|                    |          |
|--------------------|----------|
| ▽どこが一番好きですか……………   | 塚田 實 84  |
| ▽北日本文学賞……………       | 廣澤 重穂 86 |
| ▽睡眠時無呼吸症(SAS)…………… | 中村 晃也 88 |

|                         |       |    |     |
|-------------------------|-------|----|-----|
| ▽にぎり寿司……………             | 松浦    | 武弘 | 90  |
| ▽研究支援……………              | 吉寄    | 清己 | 92  |
| ▽手作り山小屋奮闘記……………         | 木村    | 敏美 | 94  |
| ▽学ばなくてよいのか……………         | 野瀬    | 隆平 | 96  |
| ▽崖の下の家で……………            | 濱田    | 優  | 98  |
| ▽『あさが来た』 広岡浅子と大同生命…………… | 上原    | 利夫 | 100 |
| ▽桜への思い入れ……………           | 藤原    | 道夫 | 102 |
| ▽ランチョン・ミーティング……………      | 金京    | 法一 | 104 |
| ▽南チロルは「未回収のイタリヤ」……………   | 松浦    | 俊博 | 106 |
| ▽大国はマッチ・ポンプ介入をやめよ……………  | 新山章一郎 |    | 108 |
| ▽澤田美喜、戦後の始まり……………       | 大越    | 浩平 | 110 |
| ▽日生劇場の『ドン・ジョヴァンニ』……………  | 川口ひろ子 |    | 112 |
| ▽失敗……………                | 下山    | 健夫 | 114 |
| ▽過去からの贈り物……………          | 川村    | 邦生 | 116 |
| ▽病院にて……………              | 新田由紀子 |    | 118 |
| ▽母の面影……………              | 矢澤    | 正二 | 120 |
| ▽秦始皇帝と習近平……………          | 大泉    | 潤  | 122 |
| ▽すべてが共に働いて益となる……………     | 新井    | 良侑 | 124 |
| ▽みかん雑感……………             | 橋本    | 政彦 | 126 |
| ▽案内嬢は見届けた！……………         | 浜口須美子 |    | 128 |
| ▽古代史は面白い……………           | 首藤    | 静夫 | 130 |
| <b>Ⅱ 創作短編Ⅱ</b>          |       |    |     |
| ▽恋のキャンフル……………           | 中江    | 賢三 | 134 |
| ▽佗助を抱きしめて……………          | 三     | 春  | 137 |

|               |       |     |
|---------------|-------|-----|
| ▽妖怪・ケセラ婆…………… | 内藤真理子 | 140 |
| ▽空を見上げて……………  | 馬場真寿美 | 143 |

## Ⅱ 近況報告Ⅱ

|                  |    |    |     |
|------------------|----|----|-----|
| ▽次の目標は決めている…………… | 高橋 | 孝蔵 | 146 |
|------------------|----|----|-----|

## Ⅱ 活動報告Ⅱ

|                         |     |
|-------------------------|-----|
| ▽何でも書こう会……………           | 42  |
| ▽サロン21……………             | 82  |
| ▽掌編小説勉強会……………           | 132 |
| ▽企業OBペンクラブ本年の歩み……………    | 148 |
| ▽ホームページ関連……………          | 152 |
| ▽ペン俳句のこの一年 佳句鑑賞……………    | 153 |
| ▽二〇一五年「ペン川柳」勉強会の成果…………… | 157 |
| ▽ペン・フォト句会……………          | 162 |
| ▽英語を読もう会 再開……………        | 163 |
| ▽「800字文学館賞」……………        | 164 |
| ▽会員名簿……………              | 166 |
| ▽編集後記……………              | 168 |

## 表紙制作 表紙の絵 カット

|       |        |
|-------|--------|
| 福本多佳子 |        |
| 安藤 晃二 | 首藤 静夫  |
| 平尾 富男 | 福本多佳子  |
| 山縣 正靖 | 松浦 武弘  |
|       | (五十音順) |

## 巻頭言

### 大きな分かれ道

会長 大越 浩平

戦後七十一年、私の年代が戦争の実体験を知る最後の世代となってきた。昭和十四年、父の仕事の都合で上海に移住した。戦局が激しくなり、天津に避難し、そこで敗戦の玉音放送を聴いた。引揚船に乗るべく天津から揚子江の港まで、無蓋貨車や有蓋貨車を乗り継ぐ。走行中は幾度も毛沢東の八路军に襲われる。蒋介石の国民党軍が応戦し、引揚げ者たちを守った。

平成六年、「悠遊」第一号が発刊された。刊行の言葉で、当時の鳴澤会長は、「会員はビジネス活動を通じて得た知識、経験等の、業的な知恵を生かし、チームプレイによる知的生産活動を推進することが当クラブの本領」(要旨)と述べている。会員各位は、戦前戦後の辛酸をなめ、戦後は日本の経済成長や文化の牽引者として活躍し、日本の発展と平和の維持に貢献された。その経験を糧にして数冊のヒット本を出版し、社会に貢献し、P・E・

N活動を通じて文化力を向上させ、余生を楽しんでいる。今日、日本が大きな分かれ道に来ている。戦争を避け続けてきた日本を、戦争が出来る国にしようとする風が吹き始めた。この風がどこに向かうのか。当会会員も戦争を知る世代と、知らない世代が拮抗してきた。この二つの世代がP・E・Nを通じて作品を発表し、多いに議論、発信する事でP・E・Nの力が試される。

七十一年前、昭和二十年、大本営は米軍の本土上陸作戦を想定していた。六月には義務兵役法が公布され、十五歳以上、六十歳までの男性、十六歳以上四十歳までの女性、国民義勇戦闘隊に編入され、義勇兵として戦闘に参加するとされた。上陸が予想された九十九里浜や相模湾では特攻兵器船に乗り、入港する米艦に体当たりする、陸上では道路に穴を掘って待機し、戦車が上陸すれば爆弾を背負い体当たりする戦術が考えられていた。大本営はそれらを「一億総特攻」と呼号し、世の中は「進め一億総火の玉」だった。

今、日本は「一億総活躍社会」という。

# 特集 日本 これから



撮影 福本 多佳子

## 神輿をかつぐ

大平 忠

中国哲学者で論語学者の加地伸行は、「日本人は政府に一億総ぶら下がり感覚である」と言っている。胸に響いて痛い。考えさせられることの多い言葉である。

四十年ほど前のこと。近所の神社の夏祭りで神輿のかつぎ手が足りないというので名乗りをあげた。下町出身の後輩にかつぎ方を教えて貰った。私の身体を眺めて「お神輿の真ん中辺でぶら下がっていなさい」と言われた。確かに、いざ本番となると肩が痛くなりほとんどぶら下がっていたように思う。私のぶら下がりの分まで担いだ若者たちには申し訳なかった。

私のこれまでの一生を振り返ると、あのときの神輿かつぎと同じ過ごし方をしたときか思えてならない。小学校から大学まで、すべて公立の学校でお世話になった。税金で勉強させて貰ったのである。卒業後、民間の会社

に就職して一生懸命働いた積りだが、自分のため会社のためになったと思っても、それがどれだけ社会に貢献したのかよく分からない。使った税金の何倍かの税金を払ったのは間違いない。しかし、世のため人のために働いたという意識は乏しく、神輿を果たしてかついだのだろうか。

曾野綾子さんの文章の一節に、「他人を殺さず自分も殺さず他人に迷惑をかけないで生きた人生は、それだけで価値がある人生である」と、ほっとする言葉がある。しかし、私のかついだ神輿は軽かったとは思えない。会社生活が終わって、ボランティアらしきものも少しした。近所の日本語が十分でない外国人の子どもたちに勉強を教えた。住んでいるマンションの防災委員でもある。そうこうするうちに、身の回りでもかなりの人たちがボランティア活動をしていることに気がついた。お年寄りや障害のある人たちに対して時間を割いて寄り添っている。新聞紙上でも、災害が起こる都度、馳せ参ずるボランティアの人たちの姿が報じられている。こういう人々は明らかに重い神輿をかついでいる。頭が下がる。



現在そして将来の日本を考えると、少子化・高齢化が進み、社会保障は到底実情に追いついていけない。財政がもたない。日本経済はいま薄明かりだからといっても、世界の先進国の成長は終わりを遂げた。国をはじめ市区町村のサービスでは不足し地域住民の協力がますます必要となっている。介護施設を新設しても介護する人がいない。地域のボランティアの力が不可欠である。子どもたちも六人に一人は貧しい家の子で勉強が十分できないという。先日ニュースでは、江東区のどこかでボランティアの人たちが一生懸命に教えていた。公務員も人口減少や財源不足で減員せざるを得ないところも出てきた。市役所・区役所の業務でもボランティアが求められるようになった。市町村も厳しい現実を前にして、首長の成り手がいないところも現れてきた。

アメリカのコミュニティは、首長などは兼職で薄給である。議会の議員も日本のように専任ばかりで高給を食むところはない。次第と日本の地方政治も、アメリカ型自治の形態に移行せざるをえないと思う。

国にまづぶらさがり、順繰りにぶらさがってばかりで

は、地方公共団体はやっていけなくなった。国全体の仕組みが成り立たなくなってきたのである。人口減・低成長（マイナスもあり得る）の時代は、みんなで神輿をかつぐ、いやかつがねばならない時代と言い換えてよい。昔のイングランドのある自治村では、村の危機に際して村民は老若男女総出で闘った。また闘う義務があったという。これがイギリスの民主主義の原点である。

国の政治も、野党は自らのビジョンと政策を示さずただ政府に反対では、ぶら下がりの変形でしかない。

ケネディ大統領の有名な就任演説の一節を私たちも肝に銘じたい。「アメリカ市民の皆さん、国があなたに何をできるかではなく、あなたが国に何をできるかを考えるようではありませんか」

自分のことは自分で守り、地域のことは地域で対処し、さらに国のために何をできるかまで踏み込みたい。国は国で、一国平和主義ではなく、国際テロ、難民問題、貧困問題、地球温暖化に対し敢然と取り組む責務がある。民主主義の原点に戻り、個人も国も、神輿はぶら下がりずかついでいかねばならない時がきたのだ。

## 「模倣から創造へ」——不思議な日本人——

細谷 博

「ざんぎり頭を叩いてみれば、文明開化の音がする」

との戯れ歌が流行るほど、明治維新の日本人は二世紀を超える長期間の鎖国を解いて以来「脱亜入欧」に励み、髪型、服装から教育、娯楽まで西洋文明を競って取り入れ、欧米から主要な分野の専門家、技師、教師等を高給を以って日本に招き、彼らから欧米での高度に発達した社会を、インフラの構築の仕方などを含めて徹底的に学び、それらの模倣を軸に急速な日本国の改造に邁進した。その過程では「鹿鳴館」で代表される、今から見れば戯画としか言えないような懸命かつ滑稽な西洋人のライフスタイルの導入の努力があった。

しかし、このような今で言えば先進国である外国の文明文化を積極的に取り入れる作業は、明治維新が最初ではない。明確に判っているものだけでも七世紀から九世紀の終わりまで続いた遣唐使、江戸時代十二回も派遣を

受け入れた朝鮮通信使、等々で代表される舶来文化の尊重は、中世から近代日本構築の中核構成に多大の貢献を成しており、絶海の孤島とまでは行かぬが、大陸とは海で隔てられ、行き来は命懸けだった先人たちの先行文化への憧憬の強さを感じずには居られない。

日本が国家としての体裁を整える必要と、七世紀当時の大和朝廷の勢力定着への大きな転機となった大化の改新と、次いで起った壬申の乱の結果としての律令国家の形成も、行政権の中央集中と戸籍作成や税制改革など、当時の唐の制度を範として日本の国土に置き換えたものであり、形としては唐の律令制度の模倣であるが、施行に当たっては地方の実情に合わせて幾多の改善があった。

このような日本民族独自の柔軟な改善は、宗教と文字の導入の過程にも存分に発揮される。インドに端を発する仏教も隋、唐の時代までに日本に伝えられ、それ以前に入って来ていた漢字も主として經典の形で上層階級に普及していたが、これが万葉集や日本書紀の編纂を通じて、日本独特の用法、発音表記などが発明され、中でも片仮名、平仮名の発明は大陸文化の導入から日本文化の

誕生、発展につながった。現在日常に使用されている漢字の読みが、中国語では一つ、あるいはせいぜい二つなのに日本語では幾つもあるのは、その単語がいつの時代にどの地方から何の目的で伝えられたかによって分かれたらしい。

それが鎖国の解けた明治維新前後から日本人は西欧文明に急速に傾き、特に医学から科学、哲学、経済学などを導入するに当たり、それまでの大陸由来の語彙では間に合わなくなつたため、専門用語として漢字を利用した新語を必要に応じて次から次へと生み出し、それが大陸、半島など先輩国に逆輸入され、彼らも日本人の創意工夫に驚くと共に全面的に採用した。現在の東アジア文明はこれが基盤となっている。

一方で、英国などから輸入した戦艦で大国ロシアに勝つて世界の一流国に肩を並べた日本は造船技術を自分のものとして、第二次世界大戦までには世界最大の戦艦武蔵、大和を建造し、さらに飛行機では長距離飛行の世界記録を作った航研機や、米国パイロットを震撼させたゼロ戦を生み出した。

敗戦後は武器としての開発は禁じられたが、トランジスターを發展させたダイオードなどの電子技術の生活への普及に加え、米国で販売実績を上げ始めた日本車を締め出す筈のマスクー法による排ガス規制を逆利用して、日本車が米国市場を席巻するなど、日本人による模倣は今や創造の域に達している。

「彼の国のセールスマンは各家庭をくまなく廻り、我が国のメーカーの製品に対する家庭の不満個所を探り出し、すぐさま次の製品に生かしている。我が国のメーカーも彼らのやり方を踏襲すべきである」

これは何処の国のいつの話かお判りか？ 実は、真珠湾攻撃の4年前の米国の新聞記事に出て来たマケーティング論議である。「彼の国」とは日本の事である。それから八十年。東洋の「黄色い猿」と欧米人からは蔑まれ、「猿まね」とは日本人の行動を表すものとされている時代から、日本は既に脱却している。ノーベル賞日本人受賞者は二十四人に達し、日本の科学者の命名による新元素が周期律表に載る。「模倣から創造へ」の大道を大手を振って歩こうではないか。

## 選挙権年齢引き下げに思う

鳥海 博

昨年6月に改正された公職選挙法により、選挙人の年齢が18歳に引き下げられました。今年の7月に行われる参議院議員選挙が、この適用の最初の事例となりますが、この制度変更により18歳と19歳の約240万人が新しく選挙権を与えられます。いい機会ですから、選挙とはなにか、どうあるべきかを原点に返って考えてみたいと思います。

【新選挙成人に対し】今度の参院選で誰に投票しようか、悩むに違いありません。高校では三年生に、国政選挙について「基本的な事」を教えるそうです。選挙制度の仕組みとか、日曜日に投票所に行って投票する等々のほかに、選挙公報があるとか政見放送があるなど、候補者を知る機会も教えられることでしょう。

でも、こういうもので誰に入れるかが全面的に分かる

訳がありません。人を知るのは、言うまでもなく「日頃の接触」です。日頃接していない人が、何を考えているか、どういう人物であるか、いい政治を行ってくれるかどうか……。

自分の経験——と言っても60年も昔のことですが——で言えば相当にいい加減でした。もしかすると「棄権」の連続だったかも知れません。自分の子供たちの時の事は、今でもハッキリ覚えています。社会科の授業の時に先生が、誰と相談してもいけないし誰に入れるか漏らしてはいけないって言っていたそうで、「大人になったら独立独立。何でも自分で考えなさい」。

そういうスタンスは大事な事ですが、それも事と次第による訳でして、例えば当今の話題で言えば、「原発はか非か」、「沖縄はどうあるべきか」、或いは「改憲論議」、こういう問題は自分で勉強すれば知識、情報が得られますが、コト立候補者に関して言えば、情報は極めて限定的です。それだからこそ、家族が集まって選挙公報を読み合わせるとか、持てる人的情報を提供、交換するとか、その必要性が高いことになります。選挙をする（＝自分

の代わりに政治を行う人を選ぶ」とは、そういうことです。家族や親しい友人、知人或いは近隣の人と大いに話し合いをすべきでしょう。

**【高校の先生に対し】**選挙権年齢引下げを受け、高校で国勢選挙に関して教えるそうですが、教えるという事に2種類のモノがあります。一つは科学的知識に代表される確たる知識、情報（事実）の獲得です。間違いなく正しく教える必要があります。もう一つは、今話題にしている「選挙で誰を選ぶべきか」のような判断力の涵養です。明治時代の「西欧に学べ」では、前者のみが強調され、子供たちに「教え込む」のが教育の最大目的でした。これは戦後の教育でも踏襲され、最後は〇×テストに至りました。「材料を与えて考える」とか「論述試験」が蔑ろにされたのは、皆さんご存知の通りです。ここへ来てこれは少しは是正されましたが、現実には明治150年の伝統は抜き難いものがあります。上からの目線ではなく「政治とは何か」の原点志向で対処願いたいものです。

**【行政当局者に対し】**「民ハ抛ラシムベシ、知ラシムベカラズ」という江戸時代の政治思想が、今に至るも根強く残っているように思います。戦前で言えば為政者は天皇で、その意を体した官僚が国民を支配する。戦後の「与えられた民主主義」でも、パブリックサーバントは何処に行ったやら。依然として「官は民より偉い（強い）」状態です。そして政治は政治家に任せるもの、政治は政治家の行うもので、国民はただ選挙権を行使していればいい。原点に返って考えると、これが如何に違うものか一目瞭然です。民主主義は、将に国民一人ひとりが主体になって、社会を動かす制度です。

**【最後に一つの提案】**政党は、日頃から地元の方々と親しく接して下さい。選挙の時に看板を出すだけではダメです。その一方、地域住民は折に触れ政党の事務所に顔を出し、近時の問題の解決のヒントを得て来るといいでしょう。選挙権者を2歳若返らせるのを、政治の原点を見直す好機と考える次第です。

## これからの祭り

八木 信男

私は大阪の北部郊外に住んでいる。マンシヨンの管理組合の役員をやっている関係で、地元の秋祭りにかかわることになった。といっても、神輿巡行のお供だ。子供たちのワッショイという声と、交通整理の怒号の中、二時間ほど歩いた。この祭りは地元でも由緒のある神社から出発している。だが、子供たちの歓声で気になったことがあった。

「天狗のおじちゃん！」と子供たちから呼ばれている人物。それこそ、猿田彦なのに天狗と呼ばれている。まさか、その面の下にいる人物も「俺は天狗だ」とは思っていないだろうか。周りの大人たちも天狗扱いしているのには驚いた。そして、その道彦であるべき天狗、いや猿田彦は行列の真ん中で、はしゃいでいるのにもあきれた。あんたは、先導しなければならないのに何をやっているのだ。

そして、何かが足りないと思ったのはBGMだ。祭りといえば、笛、太鼓がつきものなのだが、太鼓はあるが笛がない。この祭りの歴史を調べたわけではないので、もともと笛がなかったかどうか知らないが、太鼓だけでは祭りという雰囲気がないのだ。

神輿は私の住む地区を過ぎ私は無罪放免、自宅へもとどり、ご褒美の缶ビールを飲みながら考えてみた。

大阪の北部郊外は、全国からやってきたいろいろな文化が一同に会する。そのハイブリッドな文化の街で、一時は衰退した地元の祭りを住民が復興し、盛り上げてきたことには感心する。しかし、そこにはやはりハイブリッドならではの我流の「伝承」と内容の省略が行われてしまっているのではないかという結論に至った。

一方、伝統は残しながらも形態が変わった祭りもあることも思い出した。大阪市内南部にある神社では、神輿の担ぎ手がいらないのか、すべてを車に乗せて市内をドライブ巡行して夏祭りを実施している神社がある。朝から夕刻まで市内の公園を御旅所とし、そこでは神輿を回す儀式は行われる。雅楽の演奏者はトラックの荷台で演奏

し、猿田彦は先頭の軽自動車の上に鎮座しているが、本来の形は残しているのだ。

少子化を極めつくした未来の日本では、お祭りはどうなるかを想像してみたとき、神輿巡行は、この神社のようにドライブ巡行を行うようになっていくのかもしれない。そして何よりも神輿の担ぎ手が若者でなくとも、装着型ロボットアームを用いればたやすく担ぐことができるかもしれない。

文化、とくに祭りや式典には本来見落としてはならない記号がその儀式にも含まれている。これからの日本、いやこれからも日本は、いろいろな先人の知恵を伝承するためにも形だけではなく、正しく文化を伝承していかなければならない。しかし、人口が減っていくときに、いづれ機械に頼っていかなくてはならない時代が来るのではないかと思った。部屋の掃除をロボットにやらせ、自動車の運転も機械が行うようになり、次々と科学的な発見、発明がなされている日本で、文化の伝承は、科学と伝統が融合して行われていくのだろうかと思った。

缶ビール片手にソファーに寝ころんで少し酔いが廻り

妄想にふけた秋の日であった。



## 千載一遇の好機

池田 隆

喜寿を記念して学生時代の仲間と熊野古道へ出掛けた。牛馬童子口でバスを降りると、ガイド役の語り部さんが待っている。地元の元気な六十歳代の方である。

童子像の説明を聞き、近露王子への長い急坂を下り始めた。左右の鬱蒼とした雑木林のなかに、毀れかけた低い石積みの列を見かける。以前は棚田であったとのこと。

近露王子から次の継桜王子までは爪先上りの生活道が続く。まばらに並ぶ民家はいずれも空き家である。数年前まで誰々さんが住んでいたのにと語り部さんが嘆く。

辺り一帯は一九五〇年代から六〇年代にかけ村人が植樹した山林である。彼も親を手伝い苗木を熱心に植えたと言。ところが木材の自由化で林業が一気に斜陽となり、今では人出不足から間伐などの手入れも儘ならない。そのうえに保水力に劣るスギやヒノキを一齐に植えたので、土砂災害が心配だという。

遠目には美しく見える熊野の山々も森の中から観察すると、枝落しや下草刈りが行き届いていない。熊野古道の写真でよく見る光の差しこむ爽やかなスギ林は所どころのビューポイントだけのようだ。

都会生活が長かったが、自然好きの私は退職後に趣味として古道歩きや山荘暮しを始めた。チェンソーを使つての作業や杣道作りを自ら行い、山林を身近に感じている。熊野古道での見聞に刺激され、帰宅後に林業や森林問題についての解説書を紐解いてみた。

まず日本における森林面積率の時代変遷を示すグラフに注目する。世界の諸国に比べ緑豊かなことは知っていたが、森林は今なお減り続けていると思っていた。たしかに太古より一九六五年頃までは、人口の増加や文明の発達につれて森林は減少の一途を辿り、国土の五〇%近くまで落ち込んでいる。それがこの五〇年間で六七%まで回復しているではないか。有史以来の特異現象である。回復の内訳を調べると、市街化による減少より山野の荒廢地や草地の森林化が圧倒的に大きい事が分る。その傾向は人工林の多い里山でとくに顕著である。



自分自身の少年期を思い起こすと、草山でよく風揚げをしていた。明治期の風景写真や江戸期の浮世絵を見ても、町や街道筋の背景にある里山は松などが数本立つだけの禿山や段々畑である。現在ではそれらの山に樹木が茂り、頂上に登っても展望が効かないことが多い。

里山の樹木は建築資材としての用途だけでなく、生活用や製塩・製鉄・窯業用のエネルギー資源として利用され、時代と共に森林伐採が加速度的に進んできた。

その趨勢が石油社会の到来と外国産木材の自由化で一気に逆転する。戦後の住宅復興需要で拡大してきた林業が瞬く間に衰退し、林業従事者は山村を去り、植林された森は放棄された。その結末が熊野古道で見たあの光景である。

人から見捨てられ自然は蘇える。国土は緑豊かになった。だが利用価値の高い里山を放置するのは人間社会として如何にも勿体ない。化石燃料依存の文明が行き詰っている今日、この純国産で循環型の貴重な国産資源を上手に活用したい。それも戦後に植えた人工林の寿命が近づいており、このままでは直ぐに手に負えなくなる。

「里山資本主義」(藻谷浩介著、角川新書)がこの課題に對し素晴らしい提案をしている。マネー一辺倒の価値観とグローバルな経済体制が地域格差や国民の種々の不安感を生む要因である。地域ごとに里山を活用した多様な価値観の経済サブシステムを構築すれば、エネルギー源や食糧の自給率を高め、多くの難題を解決できるという。木屑を利用したペレット燃料や森林マイスター制度など、中国地方やオーストリアの成果を多数紹介し、技術基盤や模範的制度の事例が既に整っていると説明する。手前味噌だが、「悠遊」(第二十号)に書いたアクティブエアが果樹園作業や介護労働の支援に使われ始めている。これも里山での作業に役立つ技術だろう。

現政権が唱える「地方創生」は、憲法改正の意気込みに押され影が薄い。経済成長や貿易立国、補助金ばらまきといった旧来の観念に囚われず、柔軟な思考で国の基盤を固める政策や我々の意識改革に取り組みたいものだ。里山を活かし直す千載一遇の好機を逃してはならない。嗚呼、私もあと十五年若ければ、この活動に飛び込むのだがと、喜寿が恨めしい。

## グローバル情報社会の言葉

市川 忠夫

二一世紀に入ってから情報技術の進歩には目を見張る。かつては数億円以上したコンピュータが自宅の机にある。手元を見ると、電話がスマートフォンに、手帳がタブレットに変わっている。

今や「グローバル情報社会」になった。世界中のどこにいる人とも、目や耳を使って自在に通信できるのだ。

情報技術の急速な進歩や社会への深甚な影響は、感覚的には分かる。しかし、私には、「グローバル情報社会の真つただ中にいる」という実感があまりない。

その訳は、私には映像や音楽は理解できても、文字や音声、即ち言葉がよく分からないからだ。

インターネットで行き交っている言葉は、英語が圧倒的に多い。また国際連合でのコミュニケーションも英語が大部分と聞く。私は、コンピュータの誕生と同じ頃に

生まれ、それから一〇年ほど経ってから英語を習い始めた。その後、人並みに勉強したつもりだが、日本語と英語では、理解力が一桁くらい違うと感じる。英語が母語でない国々の人々と比べても、かなり英語理解力が劣るように感じている。その原因は、日本の英語教育がよくないからだ。自らの英語不勉強を棚に上げてしまい不遜ではあるが、これが偽らざる実感だ。

二〇一一年から日本でも小学校から英語を教えるようになった。しかし、日本人の多くがグローバルに活躍するためには、これでは遅すぎる。〇歳から、否、生まれる前から、英語教育を始めるべきである。言葉は知識でも知恵でもなく、体感的なものであるからだ。

では、どういう風に英語を教えればよいか。最初に思い付くのは、英語の子守歌だ。お母さんが、日本語の子守歌と英語の子守歌を交互に赤ちゃんに歌うのだ。三、四歳になったら、英語の諺を教えるのだ。江戸時代や明治時代の子供は、意味は分からなくとも「子曰く……」と口ずさんでいた。中国語ではないが、母語でもない。子供の脳細胞の数は昔も今も変わらないのだから、今の

子供にできないはずはない。無謀な提案かもしれないが、相当発想を変えて英語教育の改革に取り組まないと、日本は「グローバル情報社会」に伍していけない。

英語が事実上の国際語であることは、多くの人が認める。しかし、国際語として認められるためには、英語自身にもしつかりしてもらわないと困る。英語の学習を始めて以来ずっと、その発音、綴り、意味、文法には悩まされてきた。世界中の人々が英語を学びやすいように、英語の規則性や普遍性を確保しなければならない。そのためには、世界各国が認める英語国際語化委員会のような機構が必要だ。

言葉は地域文化や専門分野との関係でいろいろな方言が生まれる。既に、英国、米国、豪州では、違いが生じているようだ。古代ローマ帝国のラテン語は、イタリア語、フランス語、スペイン語等々に派生していったようだが、そのようなことになっては困る。

専門用語や略号は、分野によって言葉の意味が異なっている。分野ごとに意味が異なるのはやむをえないが、

それなりのルールが必要だ。

それでは、英語国際語化を誰が推進すべきか。英語を母語にする国の人々が中心では、全くだめだ。日本人が中心になるのが最善、と私は信じる。

世界の二大言語は英語と中国語だ。母語話者数が最も多いのは中国語、次が英語だ。公用語話者数が最も多いのは英語、次が中国語だ。日本人は、古代から長いこと中国語理解に取り組み、明治からは迅速に英語理解に努めてきた。この実績は世界の人々も認めるだろう。

「グローバル情報社会」で日本が力を発揮するためには、言葉の文化への強力な取り組みが必須である。

情報技術は、今なお加速度的に進歩している。一部の人は、「その内、機械翻訳技術が言葉の問題を解決してくれる」と思っているようだ。しかし、言葉の文化に関心を持っている方々の見識や自らの体験に照らし合わせると、これは間違っている。

「日本の英語教育の改革」と「英語国際語化への日本のリーダーシップ」を願っている。

## 絶対と相対

稲宮 健一

宇宙に果てはあるか。一三八億年前にビッグバンで光の塊が爆発し、エネルギーが四方八方に拡散した。その先端が宇宙の果てと考えられている。今でも名残として、果てから発した光が電磁波になり、天空の全方向から微弱ながら均一の強さで受信できる。

人間の意志で動かすことができない限界が世の中に存在すると思えることができ、思考の原点が設定できる。西欧は中世以降に絶対的な限界に對峙し現代文明を築いた。

ローマ時代にキリスト教が国教になると、中世に至るまで、聖書の創世記の宇宙が神聖な唯一の真理であった。この聖書の世界観を破ったのは天文学である。十六、七世紀に、コペルニクス、ガリレオ、ケプラーによる天文観測と正確な惑星の軌道計算により、地球が宇宙の中心でないことを明らかにした。教会は神の秩序を破るもの

と激しく弾圧したが、聖職者と天文学者の間の論争を通じて、教会は聖書に基づく真理以外に別の真理が存在することを否定できなかった。この議論を通じて、客観的事実に基づき真理を探究する科学の基礎が構築された。

人間界では十六世紀まで教会、王権、その下の民衆と直列な支配関係が、天与の仕組みと疑いを持たれなかった。しかし、市民社会が力を持つてくると、この支配に疑問が投げかけられ、神と個人という並列な関係が自然な形態で、神の下、人は平等であるという発想が投げかけられた。ルソー等の啓蒙思想が興り、フランス革命の原動力となった。この活動の延長上で聖俗分離が達成された。この時点で、西欧の社会は科学の基礎と、神を原点にしながらも、既存の階級に捉われない自然権としての人間の権利の主張を持つ近代が始まった。

一方、日本ではどうだろうか。八百万の神の国で、大きな自然全体を神として祀る素朴な信仰であった。飛鳥時代に仏教が入り、西方浄土の来世が説かれ、鎌倉時代には貴族階級に限られていた仏による心の救済が広く凡

夫に及ぶ浄土教が興き、深く民衆の心を捉えた。西欧の  
ような厳格な現世、来世の境界の定義ではないが、漠然  
とした中でも広い境界を示した。国の統治では、四方海  
に囲まれた島国の国土が境界の一つだ。また、万葉の古  
から続く朝廷が統治の境界で、鎌倉時代からの武家支配  
でも、祭司としての朝廷は、経済力は奪われたものの、  
精神的にも形式的にも崇め奉られた。緩い絶対的な境界  
がある。論理的ではないが、朝廷と武家による聖俗の分  
離が根付いた。この境界に反した、秀吉の朝鮮出兵と、  
日中戦争は、大きなしっぺ返しを受けた。この下地の土  
に、明治時代に西欧の近代的な思想を受け入れた。少な  
くとも、表面上は近代思想で覆われた。

隣の中国はどうだろうか。西のローマと重なる時期に  
秦が統一国家を完成させていた。秦の後、数々の王朝が  
勃興と滅亡を繰り返した。統治を支える思想の儒教は統  
治者と被統治者の間の安定した秩序と、その中で人の  
道を説いたもので、人と人の間の相対的な関係を最良に  
保つための優れた原則を説いた。西欧の根本にある神と、

宇宙の創造という絶対座標を持たない。人の恣意に依ら  
ない絶対的な事象を基に、真理を探る思索は含まれてな  
い。西欧文明との大きな差異がここにある。

易姓革命と称して二、三百年毎に総入れ替えの王朝が  
成立する。西欧と異なり、王朝を頂点とする俗社会を超  
えた聖は存在しない。王朝を確立すると、皇帝自らが天  
に通じる龍と称し、聖俗合わせて支配権を握った。聖と  
俗が争いながら、真理を追究する姿は見られない。今で  
も心理的に王朝の名残は捨てきれない。

一衣帯水、同文同種で親戚関係の隣人という受け止め  
方があるが、思考形態の底辺に相違点がある。それを理  
解して、お付き合いをしないといけない。

民話、西遊記の孫悟空は傍若無人に暴れまわり、遂に  
頭にリングが嵌められ、三蔵法師の呪文で締め付けられ  
て大人しくなった。

中国とはこれからも親しく、穏やかにお付き合いしな  
いといけない。経済的、軍事的に理不尽になってきたと  
きは、世界の世論をリングとして、なだめながら賢く付  
き合って行きたい。

## 中近東の紛争

杉浦 右藏

中近東での経験 私は中近東の学者でも専門家でもない。今を去る四六年前にJICA専門家でイラン国の電気通信研究センターに行く人事内示を受けたとき、何故私が外国にと青天の霹靂で受けた。間もなく任国のカウンターパート六人が六ヶ月の事前研修のため来日した。

私は毎日三鷹の電気通信研究所で各研究室への送迎と昼食係を申し付かった。初めて食事の異文化に驚いた。半月ほど経って判ったことは「豚なし骨なし」である。骨なしとは、えび・イカ・タコ・カニ等である。食堂長と一週間のメニュー打ち合わせで、出せる物が無いと嘆いた。仕方ないので鶏肉を主力として工夫して凌いだ。

現地に赴任し四年近く住んだが、日本と異なる中近東の強烈なカルチャーショックを受けた。

紛争の原因 現在の、シリアを中心とする中近東の紛

争は第一次世界大戦の結果、起こるべきことが起きた必然の結果と言わざるを得ない。ここから始まる紛争は英国の諜報者アラビアのロレンスの謀略によって引き起こされ、今日の悲劇に引き継がれている。

第一次世界大戦の戦後処理の結果が、そのまま第二次大戦後に引き継がれ、アメリカを巻き込んで西欧・ロシアと中近東諸国とが泥沼の血を流すテロと爆撃の形で進行している。日本も安保法改正の結果アメリカの要請に与すると国内も危険な情勢になってきた。

第一次世界大戦では、ドイツ・オスマン両帝国が、西部戦線では英仏と、東部戦線ではロシアと凄惨な戦いを繰り広げた。膠着状態を打開するために英国が仕掛けたアラビア語の上手なロレンスをスパイに利用してオスマントルコの分断に成功しドイツは負けた。戦後、ロレンスの約束は全て反故にされアラブ部族を細分化したサイクス・ピコ協定が今の紛争に繋がっている。シリア、レバノン、ヨルダン、イスラエル、イラク、サウジ、クエート、パレスチナに分割され、クルドは無視された。

英国は南部の石油に着目。中東に暮らす人々にとって、民族宗派問題はこれも無視された。フランスの委任統治領シリアは内部抗争に明け暮れ、今日の火種となった。この時ロシアは共産党革命が起こり戦争どころではなくなった事も英仏に幸いした。

**アラブとイスラム** 今年は西暦二〇一六年、イラン太陽歴一三九四年、イスラム歴（陰暦）一四三六年である。言いたいことはイスラムの発祥歴史は新しい。

日本もアメリカ人もアラブ、イスラム、ムスリム、シーエ派、スンニ派、テロなど言葉の意味を理解しないで混同している方々が多いのではないか。アメリカも判っていない。だから英仏の主張に乗り、ユダヤの言い分を入れ、間違った武力行使をしている。多くの民が迷惑な死の巻き添えを受けたり難民になっている。

**紛争の現況** 私がイラン滞在中はパーレビ国王の権力は強大でニクソン大統領も訪れ、シャーとオープンカーでパーレビ通りの行進を目の前で見た。しかしその後、

テヘランの米国大使館がイランの若者に占拠され大使館員を人質とした事件が起きた。中東の大国はイランとエジプトであるが、米国はアラブイスラム圏の情勢変化を理解できていなかった。イランのシャー体制が崩壊して三十七年が経過した。エジプトのアラブの春の嵐も情勢が変化した。中東は揺れ動いている。

ロシアがアフガンを攻めたが敗退、米国がイラク、アフガンを攻めても不成功。シリア自体も内戦のさなかである。アメリカ、英仏、ロシア、サウジ、イランの多数が介入して入り乱れている。どちらが誰の何処を攻撃しているか判らない混戦が続いているのだ。巻き添えを受けている住民が難民として逃げ惑う。かつては宗教と民族の寛容さで仲良く暮らしていたはずだったが、今はテロがテロを生み、テロを憎む殺戮が繰り返されている。

**紛争の不拡大を祈る** 日本はこの戦争に関係ない。参加してはならない。テロも望まない。難民対策としてシリア国の内部に緩衝地域を設け、難民救済の国連案もある。一般市民を難民化させない寛容さを望みたい。

## 日本が失ったもの、取り戻すすべ

野上 浩三

日本は一九八〇年代初めには豊かな社会を築ける位置に在った。それが一九八〇年代の後半に発生した資産バブル(平成バブル)の崩壊によって一転、経済的にも社会的にも苦難に満ちた社会になってしまった。一千兆円もの財政赤字を抱え、公的年金の財源は窮地に陥っている。日本は重大な好機を失った。しかし、好機を失った原因は解明されていない。原因の解明と失ったものを取り戻す方策を考えてみたい。

### 過去の清算

好機を失った原因は過度の円高と平成バブルである。円高については『強い円は日本の国益』(元財務官榊原英資氏)とする考えもある。しかし、第二次安倍政権による円高是正で企業業績が好転し株価も回復したのであり、円高が好機を失う原因になったと言い得る。

平成バブルが好機を失う原因になったことについては、

異論は出ていないが、バブル発生の原因が正しく解明されていないのが問題である。

平成バブルの原因は基本逸脱の時価発行制度にあるというのが、長年株式投資に従事していた経験に基づく確信である。

時価発行制度は長期借入と社債に並ぶ資本調達の手段である。多方面に重大な影響を及ぼすので独自の法制度を必要とするが、額面発行の規定が踏襲されるに止まった。米語の Equity Financing が「時価発行増資」と誤訳された弊害である。

時価発行制度の主たる基本は次の三つである。

- ①発行価格が発行会社の実力を反映していること。
- ②発行額を適切な規模にとどめ、調達した資本の返還や適切な配当を行なうこと。

③調達された資本は、設備投資や研究開発費など他の調達手段では賄えない目的に使用すること。

いずれの基本も全く守られず多くの弊害が引き起こされた。最大の弊害が平成バブルの発生であった。

過剰な資本が調達され、その相当部分が投機に流用さ



れたのである。一九八六～九〇年の五年間に調達された資本の額は七〇兆円（貨幣乗数七～八倍を乗ずると五〇〇兆円）に上った。投機に流用されたが、自己資本であるために日本銀行の統制力は及ばなかった。

バブル崩壊によって株式市場が破壊され、全てが暗転した。時価発行制度の法整備を行なって過去を清算することが失ったものを取り戻す第一歩である。

### 発想の転換

国民総生産のほぼ全ては株式会社によって生み出される。株式は株式会社の持ち分であり、上場されると万人が株式に投資して配当金や値上がり益を得ることができ、一般大衆や年金基金が大量に株式を保有すると株式会社が産む富が国民全体に行きわたるようになる。まさに株式は国民の宝である。失ったものを取戻す第二步は、次のような対策を講じて株式市場を正常化し、株式投資を積極的に活用することである。

- ① 時価発行制度による資本調達に関する法制度の整備
- ② 東証の在り方の改革と監督機関の拡充と機能の強化
- ③ 発行会社に対する行政指導の充実・強化

### 未来への挑戦

資本主義経済は株式投資を通して大衆資本主義に変貌する。アメリカでは既に実現している。大衆の株式保有は個人金融資産の三二%（日本は僅か三%）、年金基金の株式投資への依存度は平均六〇%（同三〇%弱）となっている。

大衆資本主義の下では、労使関係は相互に貢献し合う積極的なものに変化する。経営者は大衆のため、年金基金のために経営責任を果たし、労働者の意識は「自分たちが働くのは自分たちの年金のため」と変化する。

アメリカでは株価が安定的に上昇しているので年金基金は安泰である。これは、政府、証券取引委員会、連邦準備局が株式市場を厳しく監視・監督していることの結果である。証券取引委員会は四〇〇〇人超の陣容を有し、連邦準備局の委員長最大の関心事は株式市場の動向であると言われている。

わが国も大衆資本主義の構築に挑戦すべきである。この挑戦こそ経済を豊かにし、国民年金を万全にする最善の道である。

## 「過剰反応社会」からの脱却

横内 則之

物事の是非や真偽と関係なく、一部の不満に駆られて燃え盛る社会を、「過剰反応社会」という。

あるTV番組で、佐賀県知事選において、自民圧勝の予測が土壇場で民主党候補に敗れた件について、室井某女史が「自民党は、国民の声を聞け」と言っていた。傍らにいた伊藤某が、これは農協改革を進めようとした自民党に対し、農協が造反した結果であると解説すると、室井某女史は、キョトンとしていた。

また先日、地元の繁華街で「戦争法案反対」の集会があり、そこで署名集めをしていた熟年のご婦人に「戦争には、侵略、防衛、国際平和維持（PKO）があるが、どの戦争に反対なのか」と尋ねたところ、そそくさと逃げた。

当世はやりのSEALDSの言動も同類であり、すぐに炎上するネット右翼や、ヘイトスピーチも同床異夢であ

る。この本質がどうなのか、対応をどうすべきかを考える前に、信条や感情の赴くままに軽々に騒ぎ立てるのは、公益を著しく損なうことになる。

これは今に始まったことではなく、遠くはポーツマス条約に反対した日比谷焼き討ち事件、「鬼畜米英、一億総玉碎」を叫んでいた戦中、戦後では60年安保反対運動も同じことである。このようなことはわが国だけでなく、いかもしれないが、先進諸国の中ではまれであろう。これは江戸時代以後、太平の世に染まり、權威に弱く、周りに同調する他人任せの気風が、後天的DNAとして刷り込まれてきたからだろう。

これでは、生き馬の目を抜くような、欧米、中韓を相手のグローバル競争時代を勝ち抜いてゆくことはできない。失われた二十年と言われるが、その最大の原因は、冒険をしてでも打って出る経営者（それを支える管理職も）がいなくなったからではなからうか。

今、教育改革が文科省を中心に急速に進められている。今までの、知識偏重、〇×式教育から、「自ら考え、生きる力を身につける教育」を目指しているようだ。それ

にはまず、現実をよく観察し、そこから課題（問題）を認識することが大事である。そして、短絡的に結論に走るのではなく、なぜそのようなことが起こるのか、なぜなを繰り返して、深く洞察することによって、真の原因と解決方法を見つけ出さなければならぬ。この繰り返しが問題解決能力を伸ばし、ひいては生きる力に結びついてゆく。このたびの教育改革は、明治の義務教育、戦後の民主主義教育に次いで、第三の大きな改革だと思う。勿論、何事も全て良いとか、悪いことなどあり得ないので、ケチをつけるばかりでなく前向きな改善提案をし、良いと思えば先ずはやってみることだ。その上でない場合があれば、その都度見直してゆけばよい。

そして、国民一人ひとりが自ら考え、リスクを取って決断し、責任をとる社会が生まれれば、日本も新たな発展を期することができるだろう。戦国時代はそうだったし、幕末から維新にかけても、異国の支配を受けないために、それこそ命を懸けて考え抜き、行動した先人達があった。そこまで、国民を再度引き上げる必要がある。これは、学校、企業だけで成し遂げられるものではなく、

家庭での責任も重い。

政府に望まれることは、それらを支援するためのインフラ（教育、資金、情報、ノウハウ）の整備と、失敗した人へのセーフティネットを用意することである。今、丁度、「一億総活躍社会」が謳われているが、誰かがなんとかしてくれるという他力本願ではなく、老いも若きも男も女も失敗を恐れず、それぞれの分野でもう少し背伸びしてチャレンジすれば、世の中は相当良くなるに違いない。主役は国民一人

人である。その成果が表れるのは二、三十年先のことで、見届ける事が出来ないのは残念だが。

現実を見ず、リスク承知で合理的な解決方法を考えず、きれいごとばかりを言い、ムードに流される「過剰反応社会」からの脱却が切に望まれる。



## 日本のこれから 一老人の願い

山縣 正靖

日本はこれからどうなるの？ どうするの？ 小生は総理大臣どのに、これだけは外さないで下さいよというお願いを書きます。一老人のささやかなお願いです。

まず、今や手負い猪（虎？）と化したお隣さんに対する国防戦略のお願いである。

それは、戦争をやろう、始めようと我国にぶつけてくる挑発に乗せられて「日本が単独で」戦争を始めないで下さいよ、ということである。

孫子が云うには、信念を持った將軍は敵の挑発、侮辱に乗せられて一時の感情で不利な戦争を始めてしまう弱さがある。そこをぐっと抑えて、相手が戦争を始められないように予め策略、謀略の限りを尽くせとある。

単独で戦争を始めたら、待ってましたとばかり経済戦争、十四億人の国家の軍隊との戦闘に拡大し、我が自衛

隊が勇戦すればするほどエスカレートして最終的には核兵器まで撃ちこまれる。まさかそんな筈はないよ、というのはあの国に対しては希望的観測である。

そんな都合の良い策略、謀略があるの？ という諦めも早過ぎる。日本と同じように挑発されている米国、P国、V国と謀議すれば、必ず道は開ける。

そんな謀略は失敗するよ、というご批判もあるが、一の矢が外れたら、二の矢、三の矢を準備しておく。

最近、日米両軍が島嶼奪回作戦の共同演習をしているが、あれは攻撃された後の二の矢であって、そもそも攻撃させない環境を作り出す先手の謀略をうってほしいのだ。

次に日本経済の再生戦略についてのお願いである。

今の日本は経済成長ままならず、世界の成長力競争では劣後して、EUなどから日本病だと揶揄されている始末である。そこで新三本の矢が飛び出したのだが果たして当たるのか？

小生が秘かに師とあおぐ篠原三代平先生は資本主義経

済に付き物の景気循環論の大家であらせられたが、更にその先に経済大国の発展・衰退段階論があると説かれていた。かつての名だたる先進国も絶頂期を過ぎると英国病、米国病と段階を追って衰退し、そして今や日本病というわけである。

日本の場合、ジャパン アズ ナンバーワン と言われた頃が絶頂期で、その頃には近隣の韓国、台湾、中国が技術力を習得し、その豊富な労働力を生かして価格競争を挑んできた。日本の国内産業は次々に価格競争に敗れ、日本の大企業は国内生産を諦めて海外投資を優先して、国内設備投資を抑えるようになった。これは日本の低成長を招くし、国内産業の設備陳腐化、価格競争力の劣化をもたらす。また国内現場が不活発になると肝心の新商品の開発力も落ちる。

これが日本衰退化の原因である。ただし英国も米国も衰退に手をこまねいていたわけではなかった。鉄の女・サッチャー夫人がだらけた産業界にかつをいれ、フオーランドの奪回に奮闘していたら北海の原油が噴出した。米国が破綻したビッグスリーを国有化して立ち直りを

促し、日本には輸出制限を迫るなどの強硬策をとっている間に、IT産業が花開きシェールガスまで出現した。日本はどうか？ 衰退の原因は篠原先生が語り尽くしておられるのだ。日本の技術力を総動員して

#### ① 価格競争力の奪回

② 韓国、中国の製品を凌駕する新製品開発力の奪回  
具体的にはこれらを実現する戦略的な設備投資を増加させることだ。誘導政策も必要だろう。

③ 高齢者が操作できる自動化設備を、苦闘する中小企業に導入することは国策とすべきだろう。

④ 日本の誇る生産技術研究所、理化学研究所、各大学工学部なども価格競争力、商品開発力の奪回に参加願う。科学技術予算の組み替えも必要である。

民間の手におえないことは政府がやる。そのための国債発行は許されるだろう。

戦後七十年、いまは再び戦うときである。我が総理大臣どのには総指揮官となって再生戦略のバズーカを四発ほどぶっ放して下さい。

## 子どもたちの未来のために

田 宮 實

縁あつて児童養護施設の園長を二年間勤めたことがある。この児童養護施設の創設者A氏は高校生の頃設立を志したという。

「私は高齢者のことは興味が無いが、子供たちは違う。自分には何ら責任のない、また責任のとれない事由で親の養護を受けられない。これは理不尽である。他の子らと同じ環境を作りたい、十八歳以降も自立するまで支援したい」

児童養護施設、いかめしい名前である。昔は孤児院とも呼ばれていた。養育される子供は昔と全く異なっている。A氏はこの「施設」という呼称を激しく嫌悪している。子供は物でもないし収容されるものではない。

私の勤務した施設は「こども館」と呼ぶ。昔は戦災孤

児等、親がいない児童が対象だったが、現在は親が生存している。親が養育できない或いは親から引離すべきとの行政判断に基づき人所させる。これを「措置」と呼び、経費は行政が負担する。日本社会全体で育てるというテーマエダが実態はあまり知られていない。

生まれてきた子供を育てない、育てられない親の存在をもつと社会全体が認識すべきである。昔は大家族、隣近所ということ子供たちを取巻く大人が大勢いた。今は核家族化が進む中ひとりぼっちで途方に暮れる母親、自らの怒りやストレスを最愛の子供にしか向けることが出来ない母親、連れ子を虐待する父親等が顕在化している。

児童養護施設は、全国で三万人の定員、国費が年間九〇〇億円、同額以上が都道府県負担で運営されている。措置が必要だが空きがなく入所できない子供も多い。欧米で一般的である養子縁組、里親はごくわずかである。日本では親権が強く、自分では育てる気持ちがあっても

養子に出すのは拒否する親が多い。物心ついてからの里親はうまくいかない。行政も個人の家で問題が起きることを極端に恐れる。里親が広がない理由である。

「子ども館」で会った子供たちは、表面的にはみんな笑顔で元気で明るい子たちだった。しかし、親の愛情を知らない、また物心ついてから捨てられた子、そして「子ども館」に来るまでのつらい体験などから心の奥の闇は想像出来ない。さらに八人から十二人での共同生活も大変である。

他人との関係が築けない子供、発達障害等を持つ子供をやさしく丁寧に見守り世話する若い職員たち。彼らの就労環境も、数多くの宿直勤務、暴発する子供の対応で疲労困憊しメンタル不調を訴える者も多く厳しい。給与は措置費の中からの給付であるからおのずと限度があり、人生の将来展望を描くことも難しい。

これからますます多くなる、元気で社会参加を希望す

る高齢者の経験・知恵が、児童養護の分野でもっと活用される仕組みが考えられるべきである。

また、養護施設の運営を社会福祉法人という民間団体に担わすことにも限界を感じる。

養護単位の少人数化を目指したグループホームの拡充施策も職員の負担増を考えると問題が多いと考える。

子供が安心して生活できるということは、職員が安心して働ける、子供の世話ができるということが前提である。

『子どもたちの未来のために』はA氏の思いを具体化した「子ども館」の理念である。



## 深刻化する世界情勢に想う

安藤 晃二

人は皆、家族の幸福、国の将来を憂い、この地球の在り方を想わざるを得ない。

人類の歴史において、資本主義社会が必然的にもたらした富が人類を支配する。覇権の歴史、数限りない紛争と殺戮が繰り返され、その民族、国家間の利害衝突は、いまなお厳然と問題を突きつけている。今やこの状態に辟易し、人類は地球規模の良心と英知に支えられた問題解決に至るゆるぎないロードマップを立案して、それを辿るべきなのではなからうか。ターゲットは、世界が社会レベルで進化して相当の経済平準化を見る世界を実現させる事である。それは、貧困が過激派に繋がらない、文明の衝突と人間のエゴに歯止めがかかる世界を実現すること、途方もない長年の作業、そして教育が大きく寄与するに違いない。

現実には立ち返り、大国によるISIL殲滅作戦を見ると空爆は正に「絨毯爆撃」。第二次大戦でも、ベトナム戦争においても、また最近のイラク戦争においても、民間人への甚大な人道的被害をもたらした。「歴史に学べ」と言う。一体、その学びから、どれ程の想像力で一般人への災厄を考慮した作戦なのか。ヨーロッパに向かう何百万人の難民が発生、受け入れ側諸国の世論を分断、出口の見えない問題が出現しつつある。

シリアではアサド政権に与するロシアが空爆に参加している。ウクライナ問題から無法にもクリミア併合を強行したロシアの動きは、隣接するEUとの間に新たな地政学上の難題をつきつけた。EUは、EU加盟を切望したトルコの意向を、中東問題への介入を嫌って否定した。難民問題でも協力できた筈のトルコとの親密な連携を欠いたことで、EUの黒海から中央アジア地域への影響力は現在ゼロに等しいと言われる。そして、中国は中央アジアへのシルクロードプロジェクト推進政策に余念がない。EUには、今後トルコ重視の新たな地政学を意識し



た行動が求められ、それが西側の利害を左右する。

シリア内戦の発端はアラウィー派アサド政権の宗教問題にあらず、部族の自衛の戦いだ。最近サウジとイランの間で外交断絶が発生した。こちらもスンニー派對シーア派の宗教対立と解説されるが、両大国の覇権争いと解釈すべきだろう。現実的な世の中で、神学上の違いのみが斯くも深刻な確執に発展することは考え難い。原油価格の低下はサウジに十兆円近い財政赤字をもたらし、米政権による対イラン譲歩の展開も、サウジを焦らせている。

十二月の突然の日韓慰安婦問題合意は米国の北朝鮮核問題封じ込めのための差し金が働いたと、合意直後に米国のシンクタンクが分析する。即ち、六か国協議再開のため、この際日中韓の協力体制は不可欠、そこで米政権より対韓圧力がかかった。その矢先の北朝鮮による「水爆」実験、米国は先手を取られた形だ。

前大戦の戦勝国が核保有を続けている現在、世界は核兵器による抑止力で均衡を保つ。この様な形でここまで

行くのだろうか。核兵器廃絶を視野に入れた、真の世界平和の実現への道筋の構築を求めて、人類は更なる行動を起こす時期に来ているのではないだろうか。我が日本も振り回され、引きずられて行くだけの国であつてはなるまい。戦後百幾十年をも見据えて、努力を重ね、真に主体的に行動するのだ。

高校時代の図書館。ビッグバン理論のジョージ・ガモフに読み耽ける。銀河系のサイズが十万年、その中に浮く数千億個の星の一つに取りついて戦乱の歴史を繰り返す人間という生物群がいる。

米国駐在時代、一九六九年六月、月面より撮影された半円の地球の写真がタイム誌の表紙を飾る。その写真を見て「地球上の人間全てがこの写真を見るべきだ」と口にしたのは父の友人、米国原子核研究所長ポラード博士である。彼は原爆製造のマンハッタン計画に参加した冶金学者であったが、その後勉学を積み、聖職者になった。

## COOL JAPAN?

西川 武彦

一年半前、久し振りにパリを訪れた。メトロを乗り継ぎながら街を探訪して驚いたのは、乗客に西アジア・北アフリカ系が増えたことだった。郊外路線では、乗客の八割方がコーカシア系ではない印象だ。

フランスは、欧州各国から陸路ですりりを入れる。若い頃、モンマルトルで遊んだ怪しげな女性も東欧出身だったし、前大統領もそうだったから、彼の国では驚くことではないのかもしれないが、ヒジャブ（ベール）を被った女性も多く、時代の変化を感じた。二〇二〇年にイスラム系仏大統領が誕生というミシェル・ウエルベックの『服従』が超ベストセラーとなったのは、むべなるかなである。

凶暴なISの台頭、イスラム宗派の争いが絡んだ中東の大混乱、一年で百万を超えるという非法難民・移民の欧州への流入……。二極体制終焉から四半世紀を経て、

後発諸国が経済的に成長するなか、世界は混迷を深めている。

振り返ってわが日本。バブルが弾けてからほぼ四半世紀、少子高齢化のなか、夢よう一度で、経済力、軍事力などの怪しげな大国指向が蠢いている。

その中で、目を見張るような変化が起きているのが、訪日外国人の激増である。二〇二〇年の東京五輪開催が決まった頃は年間一三〇〇万人だった訪日外国人数を、六年後には二〇〇〇万人に増やすのが国の目標だった。

ところが笛吹けど踊らない経済成長のなか、円安も効いて、その目標値は二〇一五年にはほぼ達成されてしまった。JTBでは、二〇一六年は二〇%増の二三五〇万人と予測している。中韓との関係がやや好転したという背景があると報道されているが、後知恵とでもいいえよう。中韓からは欧米への旅行者も急増しているのだ。

日本の本格的な高度成長が始まった一九六〇年代半ばに、海外旅行の自由化でバック旅行が誕生。急増した日本人観光客が駆け足で欧米各地を廻り、免税で豪華な洋品を

買いあさったのと同じであろう。欧米や豪州、あるいは急成長中の東南アジアからの訪日も二桁の年増率を見せている。流れが変わったのだ。二〇二〇年には三〇〇〇万人も夢ではない。消費総額は三兆とか五兆円に膨らみ、いずれ国を支える柱の一つになるにちがいない。

背景には日本社会の欧米並み、或いはそれ以上の成熟化がある。世界中のものが溢れる。最先端のものが何でもある。民度が高い、安全、安心、安い、そして清潔。四季温暖、豊かで美しい自然。海外では寿司、ラーメンに象徴される美味しい和食は、二〇一三年にユネスコの無形文化遺産に指定された。東京の街中も、銀座・丸の内・浅草・上野、六本木・表参道、渋谷・歌舞伎町…、清濁混在で、欧米とは異なる魅力に溢れ、リッチだ。盛り場をぶらつくと、世界各地からの旅行者が溢れているといっても過言ではない。

筆者が住むシモキタこと下北沢もしかり。ごちゃごちゃした細い路地と盛り場、劇場……、ちよつと入れれば閑静な住宅地で、戦火を免れた日本家屋もちらほらある。西洋人好みの街らしく、筆者が住む古い二階家を含め、

ご近所では、少くない数の外人が「ホーム・シェア」している。

悪い所なしの良い国といたいのが、ヘイトスピーチに象徴される日本的排外主義も厳然としてある。元日の人気番組で、若手社会学者が、「ハーフは劣化が早い」と暴言を吐き、人種差別との批判が殺到した騒ぎがあった。見回せば、芸能界、報道、スポーツ界等々、昨今の日本では、どの分野でもハーフの大活躍が目立つ。生活環境の西洋化で、容姿が国際化した生粋の日本人と彼らが混在し、無理なく社会が活性化する。ブラジル系、中韓を含むアジア系、イスラム系も含めて。

人口の減少は避けられないだろうが、東京五輪を挟むこれからの四半世紀は、成長より価値の多様性を求め、成熟を目指し、武力に頼らぬ外交を広げ、新しいCOOL JAPANを求めているかもしれないのだと、傘寿を目の前にしたご隠居は呟いている。



絵 しんじえりこ

## 今も昔もみんな大変

児玉 寛嗣

オレンジ色の太陽が、灼熱のアフリカの大平原の彼方に沈もうとする頃、アバラ骨の浮き出た一頭のライオンが息を引き取ろうとしていた。数日間、餌を食べてなかった。空腹で朦朧とした彼の脳裏に、最近の暮らしの様子が浮かんできた。群のボスとして、六頭のメスと彼女達との間に生まれた子供達の上に君臨していた。

仕事は、小高い丘に陣取り縄張りに入って来ようとするよそ者を追い散らすことと、彼女達に子種を提供することだった。彼女達の役割は、狩りと子育てである。鬣(たてがみ)を持った彼のほうが強そうで狩りに向いていそうだがそうではない。体が大きく敏捷さに欠け、鬣も風の抵抗となり獲物に逃げられてしまう。狩りは専らメスの仕事である。捉えた獲物はまず、ボスである彼に捧げられた。その残りを子供達とその母親達が食べる、幸せな日々であった。

ところが最近、体の大きな若者を縄張りの回りでよく見かけるようになった。若者は、虎視眈々と彼の座を狙っているようだった。彼はライオン年齢では定年に近い年であり、体力に少し自信を無くしてきたところであった。

遂に対決の日が来た。追い払おうとしたが、ものともせず突進してきた。勝負はあっけなく決着したが、深追いはして来なかった。若者はそれまで彼が居た小高い丘にゆっくりと向かっていった。彼は、三年前の自分を思い出した。この若者と同様に、老体のボスを追い出した。それ以来この群に君臨してきた。敗者は群から出ていくのが掟であった。服従してきたメス達も随分と冷たくなかった。新しいボスには獲物を差し出すが、自分にはくれなかった。食べ残しは、すばしっこいハイエナやハゲタカが攫っていった。

自分ひとりで狩りをした経験がなかった。やり方もよく知らなかった。少しでも彼女らに方法を学んでおけば良かったと後悔するが遅かった。空腹を抱えて、平原をさまよう地獄のような日々が待っているだけだった。

彼が土に還って、数百万年の時が経過した。その間に、ライオンの社会も大きく変わった。「彼のような悲劇を繰り返すな」との声がだんだん高まり、「働けなくなっても餌にありつけるというルールを確立した社会」を遂に実現したのである。賢いライオンも現れ、狩りのやり方も大きく変わり、捕獲する食料の量も飛躍的に増えた。また、群の垣根を低くしたことで社会が改善された。その結果、働けなくなった者達にも餌が行き渡るようになり、彼の時代には考えられなかった夢のような社会が実現したのである。

昔は、働けなくなつて僅か数日で死に絶えていたライオン達も、現役から退いて数年生きるものも多くなつてきた。

昔はボスが独断で物事を決めていたが、今では多数決で決めようということになってきている。仕事の忙しい現役や、一人前として扱われてない子供達の意見が通ることは少なく、働いていない引退者達の「皆、生きる権利がある。今日現役があるのは、我々が働いてきたからだ」という主張が社会の声となつてきた。

狩りの技術が向上したとはいえ、引退した者達を長期間養うには、現役達は狩りをはじめとしてひたすら仕事に精を出すしかない。そのため、子育てにも十分手が回らず、さらに子供に十分な食事を与えられないことも起きるようになってきた。現役達の最大の心配事は、「世話もあまり出来ず栄養が行き渡らないような子供達が、大人になって果たして狩りや仕事を満足にこなしながら働けなくなった自分たちを養ってくれるのか」であつた。このような声も、退役者の主張が優先される社会ではかき消されがちであつた。

彼の生きた数百万年前も自然の摂理とは言え大変だつた。でも今や、ライオンの社会の存続をも危うくする事態になれば、もっと大変な事になるのかもしれない。

今後、到来する超高齢化社会に対する警鐘ともなるライオンの話である。



## 清き国、日本

森田 晃司

最近日本からの食料輸出が、和食ブームにも乗って、香港・中国、台湾、東南アジアの国々の富裕層、或いは米国や欧州などへ向けて増加傾向にあるようだ。農林水産省の発表では平成二十六年度の食品輸入額六百八十九億ドル（約七兆円）に対して、輸出総額は六千百十七億円とケタ違いで少ないものの、この二年間は二桁の伸びが続いている。

私は、かねて四十哲しかないカロリーベースの食料自給率を上げて行くことが、日本の食の安全を保障すると共に、他国の食や水の需給に負担をかけない観点からも、国策上重要だと訴えてきた。

品質が良く、安心して摂取することができる食料を自給することで、自然環境の保護につながり、縄文時代以来の長い年月をかけて培われてきた、かけがえのない日本の食の体系、食の文化が維持できると考える。

とはいえ、正直なところ割高の日本の食品がアジアに向けて継続的に輸出できるとは想像もできなかったのだが、最近の輸出増勢の背景をみると美味で栄養価が高いという品質上の特長に加えて、安全性が高く評価されているようだ。

世界の各地で水や土壌の汚染が進んでいるが、とりわけ中国の汚染は深刻だ。その上に、失礼ながら国家のモラルが低いので、食品の安全性が大きく損なわれているようだ。中国に限らず、少しでも余裕のある層は、高くても安全な食品を求めるのは当然の対応だと想像できる。

『百年河清を俟つ』という言葉もある通り、環境汚染の改善は容易ではない。人間を教育し、社会を変えていく必要があるからだ。日本食品の輸出ブームは一時的なものではなく、長く継続される可能性が高いと言えそうだ。

縄文時代の研究が進んでいる。

土器や漆器は世界最古のものが、日本列島から発掘さ

れている。大型木造建築、季節ごとの豊富な食料、栗やえごまの栽培、集落の洗練度などから、文字や鉄器は持たなかったものの、縄文時代が世界の四大文明と遜色のない進んだ文明を築いていたことは、海外の研究者の間でも認知されつつあるようだ。

しかも、世界の文明が穀物栽培をベースとし森を浸蝕していったのに対し、私たちの先人は森を守り、水を守り、自然の恵みを利用して高度な文明を築き上げてきた。弥生時代以降には徐々に農耕文明を受け入れたものの、里山という中間地帯を森と田畑の間に設けて、自然を守りつつ自然の恵みを享受するシステムを作り上げてきた。

来年は明治維新から百五十年の節目の年だ。富国強兵を目指した明治の近代化によって、産業の中心は農業から重工業へと軸足を移した。昨年は敗戦から七十年の節目だった。国力の差を見せつけられて欧米への憧れが強まり、日本人の価値観も大きく変わった。日本の社会は大きく変容した。しかし、自然を守り、水を守る伝統は受け継がれている。一時、工場や生活の排水で汚染され

た川も海も蘇ってきている。今も国土の六十七割は緑の森林に覆われている。

かつてイザヤ・ベンダサンは「日本人は水と安全は只だと思っている」と評したが、世界では清い水はそれほど貴重だ。私たちの先人は縄文時代以来、清く正しく美しいものを大切にしてきた。森を守り、水を守り、平和で安全な社会を作り上げ、それを後に続く私たちに残してくれた。近代化の負の部分が深刻化している時代に、汚染されていない日本列島は益々重要な存在となっていく。

さまざまな価値観がぶつかり合い、とりわけ欧米の価値基準が世界を先導する中で、日本の伝統的な価値観を蔑にすることなくしっかりと見据えて、自然を慈しみ、清く正しく美しいものを大切にすること、秩序正しく安全な社会を維持して行くことが現代の日本人に課せられた使命であり、同時にそれはまた、日本のできる最大の国際貢献ではなからうか。

## 日本の未来に必要なこと

上田 信隆

政治は一寸先は闇だとよく言われる。株価については多くの経済評論家が間違えを平気で犯す。人間の営みについては本当に不可解なことが多い。コンピュータ業界に席を置いた我々は、近年とみに人にならなくなって機械が肩代わりする場を見てきた。将棋・囲碁といった場でもコンピュータは名人に近づきつつある。天気予報などは実によく言い当てるようになっていく。宇宙の不可思議の解明も海底の探索もかなり進んできた。「解」が見通せるもの、あるいは数式で表わすことが出来るものはおそらくコンピュータの範囲内だ。

情報というデータ分析の解説については、日本は欧米に差をつけられている。デジタルを得意とする欧米文化圏とアナログを長く文化の中心に据えた我々とは、自ずからデータの取り扱いに差異が生じることが多い。データの取り扱いが苦手で、善しにつけ悪しきにつけ判断に

情が入りやすいのは我々日本人の傾向とも言える。

日本が世界と互角に戦おうと思えば、我々の価値観をデジタル中心にする必要があると思う。日本は日本、と独自路線を志向するならばアナログを中心に元禄の世を再現するのも選択の一つだと言える。

残念ながら世界の環境と日本の立ち位置は、デジタルにかなり傾きをしなければやっていけないところまで来ている。個人的には私自身はかなりアナログ志向だと思うが、子孫の代の事を考えればデジタルにシフトしなければならぬ。

右も左もそれぞれの政治的な主張は理解できるが、なんととっても多数決で決められたことについては、議論の末には潔く従うことが民意に素直なことだと思う。日本の戦後はこのようにして変移してきたと思う。

むしろこれから難しいことは、複雑な世界情勢を鑑みて、いかに日本の主張を通せるようになるかだと思う。そのためには日本人の一人一人が多くの民意に同意する習慣をつけないといけないと思う。安定した政権運営がいかに国益に有利に作用するかは一目瞭然である。多



くの人が考えた民意というものは民主主義においては尊重されなければならない。およそ民主主義と言う制度は人類の考えてきた政治スタイルの集大成であるとも言える。

マスコミや一部政治家が唱える気まぐれな主張は決して責任を伴わない無責任なものが多い。戦前、戦後の歴史に真摯に応えた政治家や軍人が何人いたことだろうか。又政治の結果についてどのくらい真摯に反省した国民がいたかは疑問が残る。皆が皆、将来の結果については「仕方なかった」と思う他ないのである。

日本の未来について考えることは大変大事なテーマであるが、我々一億の民には責任はない。特に政治とは未来に対して無責任なものである。それだけに今の我々は出来るだけ将来にわたっての負となる財産の精算をしなければいけないと思う。特に我慢せず贅をつくしたり、必要以上の社会福祉を求めては将来に禍根を残すことになりかねない。今の日本にとって毎年重なっていく借金は見逃すことが出来ない。

我々の先代は戦後の貧乏をなんとか抜け出してきた。

それを今の我々が使い放題好き勝手に浪費してよいものかを考えてみれば、自ずから足ることになる。苦勞したことはすぐ忘れ、楽しいことは永くは続かない。

およそ人生とはそんなものと思えば、いかに人様に迷惑をかけぬよう生きることが肝要かと思う。

残り少なくなってきた我々世代は、よくよく自省して負の財産を精算し、来る未来に気になることを提言する必要がある。私は日本が世界に伍していきたいならもっとデータを客観的に評価する力を養うべきなのだ。アマゾンやグーグル等の手法を我々日本人は開拓出来ただろうか。欧米で開発されたものを使いこなす技術・応用には自信が持てるが、開発出来る環境は少ない。これからは独自の技術の開発が世界をリードしていけると思う。

ノーベル賞を今までの日本ではかなり獲得しているが、今後とも獲得が広がる保証は決していない。研究、開発の努力をこれからも我々は続けなければいけない。昔はよく日本はノーベル賞をいただいたものだと言いたくないからである。

## したたかな北朝鮮

平尾 富男

一〇年近く前に或る雑誌に投稿したことがある。その記事を書いた時の原稿がパソコンの中に残っていたのを偶然発見し、読み直して大いに驚かされた。新年早々の北朝鮮による水爆実験と、それを巡る現安倍政権の対応が一〇年前と極めて似ているからだ。まるで一〇年前の歴史がそのまま再現されたようなのだ。

旧聞に属する内容ではあるが、一〇年前の投稿原稿をここに一部転載し、北朝鮮事態が全く変わっていない事実を、読者各位に対しご参考にご供することをお許し頂きたい。

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

二〇〇五年六月、ニューヨークで行われた米朝両国の高官接触で、北朝鮮側が初めて「核保有国としての認知と処遇を求めた」と報じられた。時を同じくして、アメリカのメディアによる現地テレビ取材インタビューの中

で、北朝鮮が核兵器保有宣言を行う映像を日本のテレビが報道していた。

その当時は「保有」の真偽の程は分からなかったわけだが、はつきりしたことは、北朝鮮が核保有国として核拡散防止の枠組みの中に既成事実としての待遇を世界に求めたことであった。つまり、パキスタン、インド、そしてイスラエルと同じ方式を採用しようとしているのだ。

北朝鮮の常套手段的な脅迫戦術とはいえ、一連の外交駆け引きのレベルの高さには、その中身の善悪の論議とは別に、大いに驚かされる。稚拙で出鱈目と酷評する論者はいるが、日頃日本の外交手腕の低さを見せ付けられていると、その「したたかさ」に学べというのは暴論かもしれないが、大いに参考にする必要があるだろう。

さて、その北朝鮮が今年の一〇月九日に遂に核実験の「暴挙」（北朝鮮にとっての快挙）に出た。それは先に述べた一年半前の核保有宣言の内容実現となったわけである。現在でも核実験が本当に成功したのかどうかを疑う声が聞こえるが、今や国際会議の場では、ブッシュ大統領でさえ核拡散防止に向けて「北朝鮮に核兵器を放棄さ

せる」強い意思表示を行い、国際的な外交包囲網を確立すると言っている。つまりこれは、北朝鮮が遂に核兵器を保有したことを認めたことに他ならない。今や国際社会は、北朝鮮が数年前から言明し続けてきた「核保有国待遇」の実現を突き付けられたのだ。

一方日本では、右に傾きながら船出をした安倍政権内で、北朝鮮が核実験をしたことを理由に、早くも「北の核に対抗して日本の核武装についての論議をすべき」という主張が出始めてきている。日本の核武装論議は、裏ではアメリカからの要求によるとも言われているとはいえ、これによって日本の「非核三原則」が大きく揺らぎ始めたことは明らかである。

近隣アジア諸国にとっては、日本の軍備強化は絶対に回避したい脅威であり、それが日中・日韓首脳会談を急遽実現させた理由だとも噂された。安倍政権にとって、北朝鮮の今回の核実験が更なる右翼化傾向を推し進めることに国内的な世論が後押しをする結果となったが、今後の日本の方向性への大きな懸念材料でもある。

話を北朝鮮に戻すと、今回の核実験は北朝鮮の規定路

線であり、核保有というカードを手に入れた上で国際社会での発言力を強めようという魂胆は自明である。

北朝鮮は核実験を行った（少なくとも行ったと言明した）ことによって、アメリカからの空爆攻撃も受けなかったし、ブッシュ政権のアメリカ国内での弱体化に伴って、北朝鮮が以前から要求していたアメリカとの二カ国間協議の可能性さえも浮上しているのが現実である。結果的には北朝鮮の「したたかさ」の勝利を世界に示したことになるのではないか。

金正日体制がいつまで維持されていくかは未知数であるが、もう失うものが少ない瀬戸際外交の「したたかさ」には、「体制」の立場に立っての理解が必要であり、或る意味で見習うものがあることも事実なのだ。

そうは言っても、一般国民の生活に極度の非人道的犠牲を強いる金正日体制の崩壊は（近い将来にあるとすれば）、必ずや内部から起こるに違いない。そしてこのことは、これからの日本の政権担当為政者にも、心に留めておいてもらいたい一事なのである。

## 何でも書く会 —テーマ自由で800字—

定刻の午後一時にまだ二〇分、早くも一〇人を越える常連が円卓テーブルのいつもの席に着いて和やかに雑談しています。そのうち何カ月ぶりのメンバーも現れ、「おや、お久しぶり」という声があがります。席はどんな埋まって行き、プロマネは名簿を睨んで、あと何人くらい来るだろうか、時間配分は、椅子は足りるだろうかという嬉しい心配。今年の「何でも書く会」はこんな盛会の連続でした。

一時から五時までの四時間ありますが、参加者が二〇人近いと、一人の持ち時間は一分もありません。プロマネの進行は、いかに効率よく論議を進め、文章を磨いてもらい、て・に・を・は・や送り仮名などの修正箇所を見つけてもらうか、が腕の見せ所です。

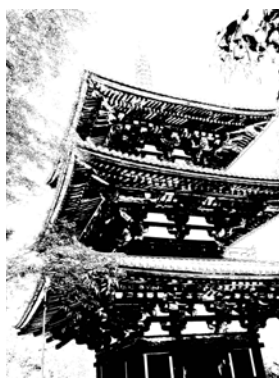
作品に関するエピソードや思い出、それに対する共感や質問といった楽しいお話は後の懇親会で、という事になっちゃいます。その懇親会も、会の中間で今日の会場を決め、電話予約してテーブルを確保するという事も

再々。しかし、参加者が多いと話題は広がり、ワインがすすみ、話も大いに盛り上がります。

作品では数回連続のテーマで連作を発表するメンバーが増えたのも最近の傾向です。勿論、毎回「えーっ」と声上がる意外性で勝負してくる常連もいます。

内容もバラエティが富んできています。旅や現役時代の話が多いですが、美味礼讃、コンサート評、劇評、日本古典文学の形而上学的考察、さらに宗教に歴史に民俗学の蘊蓄に愛犬の散歩に量子力学の復習と続くと、博識揃いのメンバーの頭脳も右往左往させられます。

(プロマネ 大越 三春 志村)



# 特集 旅の流儀



撮影 野瀬 隆平

## 旅は遙かに

富岡 喜久雄

今では「旅は独りで鈍行」をモットーに気ままにやるのが本物だと我流を通せる身ではあるが、旅と言えはやはり現役時代の業務上の海外旅行が一番印象に残っている。中でも南米はアルゼンチン、しかもブエノス・アイレスから南米流カウボーイのガウチョが走る草原を車で四百キロ、マルデル・プラタに出かけた時はさすがに、「思えば遠くへきたもんだ」と言いたくなる気分がした。さらに南へ下がればサッチャーがこだわり、戦争になったフォークランド諸島や最果てのパタゴニアがある。大西洋の荒波が海岸の切り立った岩々に当たって白く砕ける様は波静かな太平洋とは大違いだった。

漁業試験所を建設する事前調査行で、施工を担当するペルー子会社の職員との二人旅の筈だったがこれが問題。彼は純日本人だが永年の南米勤務で思考、行動、感情もあちら風に染まって、全てがアスタ・マニャーナだ。こ

ちらは転属して間もない異邦人だったから旅にも不慣れだった。ペルーのリマ空港で乗り継ぐ筈が、闇夜の空港待合室でエル・コンドル・パサを聞かされながら堅いベンチで一夜を過ごす羽目にもなり、ブエノス・アイレス空港に着いてみたら出迎えもない始末。事前にリマで待ち合わせるか、都合がつかなかった場合はブエノス空港で必ず出迎えると言っていたのである。憤懣のやり場もなく足蹴にされた気分です。「俺はボスだ、それなりの扱いをされても良いだろう」と独り愚痴るが、何せ見知らぬ初めての土地だから、心細さのほうは勝手にやってくる。

旅程に宿泊先を入れて送ってあるから連絡があるだろうと、うろ覚えのスペイン語を駆使してタクシーを捕まえ「オテル・コンチネンタル、ボル・ファボール」と言えば、何とかホテルには行き着けた。部屋に落ち着くと全くの初見参だから、見るものすべてが好奇心の対象になり退屈する間もなく飽きもこない。窓越しに見えるセニョリータの何とも粋な風情は、山高帽子に派手な毛織マントのインディオや小柄でキュートなメスチーソが多

い南米諸国とは違った雰囲気だ。チリのサンチャゴもそうだったが、ブエノス・アイレスも白人が多く、他の南米諸国と違いここはヨーロッパの雰囲気だなどの思いを強くした。あれこれ見たり聞いたり、思案したりのうちに、部屋の電話が鳴った。取り次ぎのスペイン語の後から日本語が聞こえる。

「富岡さん、こちらの業者との打ち合わせが入ってしまったものですから出迎えませんでした。すぐそちらに行きます。ここは初めてでしたか？ でもどこも変わらんでしょう」と如何にも屈託がない。

「業務優先だ。いいよ、気にするな、デ・ナードだ」と、いかにも旅なれた振りで鷹揚に返したものの、ペルーに戻ったら嫌みを言つてやろうと心に決め、その場合は腹に収めた。暫くして彼がやってきて、翌日からの予定を打ち合わせ、その夜は旅の疲れを癒すことを優先し、この地で有名なタンゴとステーキは仕事の後の楽しみにとっておこうと諦めて、早々に寝ることにした。

翌朝早くチャーターした車でブエノスから一路マルデル・プラタに向かった。クラシックな建物が並ぶ市街地

を抜けると大平原である。嘗てヨーロッパの穀倉と言われただけのことはあつて、はるかに大平原が広がる。道路はそれほど広くはないが、すれ違う車も少ないから飛ばせる。でも、400キロを走破してマルデル・プラタに着いたときは時刻になっていた。一日掛かりの旅ではあったが、現地事情視察には有益なドライブだった。カウボーイたる此処のガウチョは、遅しさより何か哀愁を感じさせるものがある。やはり此処はインディオの国、遙か南半球、地球の裏側だったのだ。

素朴な港町マルデル・プラタは海岸に大岩が突き出たような漁村だった。用地、立地、現地材調達の可能性等確認して再びブエノスに帰る頃は、濃艶なタンゴとステーキへの思いを掻き立てられて、当初の腹立ちは消えてしまった。勿論、その夜は十分に楽しんだ。帰路は茶色の革張り座席がいかにもアルゼンチン航空でイースター島を超え太平洋へ。

ああ、懐かしの歌が聞こえる。

ドント・クライ・フォー・ミー・アルゼンチーナ

## 今日は大山が見えるか？

浜田 道雄

前夜東京に泊まった朝、熱海の家に戻る湘南新宿線の車中で、読みかけの水村美苗さんの『日本語が亡びるとき』から眼をあげ、窓の外を見た。電車は戦後まもなく住んだことのある馬込のあたりを走っている。その昔の思い出からだろうか、なんとなく懐かしさを誘う家々の上には、夏の眩しい青空が点々と白い雲をあしらって輝いていた。

その夏空を眺めるともなく眺めながら、ふと思った。

「この電車から、今日は大山が見えるだろうか？」

二十数年前、小田急の鶴巻温泉駅にほど近い丘の上には、ささやかな庭のある小さな家を建て、家内と暮らしはじめた。三十年近く勤めた公務員生活を終えて、すこし気楽な仕事に就いたところである。

庭の一角は畑にしてハーブや香菜、トマトなどを植え、居間から見える南側は盛り土して小さな山水とし、低く

刈り込んだ木々と山から採ってきたリュウノヒゲやモジブリを植えて、わが家の里山<sup>サトウジ</sup>を作り上げた。

しばらくして、生まれて間もないメスの仔ネコが一匹、また一匹とやってきてその小さな家に住みつき、私と家内の二人暮らしはすぐに二匹のネコを加えた四人暮らしになった。

ネコたちは私の作った庭を大のお気に入りとして、若いころは日がな一日庭を走り回り、としをとってから下草の陽だまりに寝そべって日を過ごした。

私たちもこの家と庭がたいそう気に入っていた。庭の手入れをしたり、近くの山を歩いたりしながら、ネコたちとともに自然に親しみ、のどかな日々を楽しんだ。そんな暮らしが二十年あまり続いた。

家からは相模の大山がよく見えた。だから、私たちの鶴巻温泉での暮らしは、大山とともにある日々でもあった。大山は、あるときは家内と一緒にその山頂を目指して歩き、汗を拭きながら見上げる山だったし、あるときは庭仕事のあいまに疲れた腰を伸ばし、空を見上げたと、眼に飛び込んでくる山だった。



また、あるときは足にすり寄ってきたネコどもを抱き上げ、その背を撫でながら眺めて、「大山の頂に雲がかっているよ。明日は雨だね。山歩きは無理かもね？」と、家内に話しかける山だった。

大山は季節の移ろいを知らせてくれる山でもあった。冬の重い雲の下では薄く雪をかぶった姿を見せ、春の日差しの温かくなるころには木々の芽吹く淡い茜色の衣をまとい、また初夏には新緑の明るい萌黄色に包まれ、秋には紅葉して、私たちの眼を楽しませた。

だが、大山はなによりも、家を留守にした旅行の帰りや毎日の勤めからの帰りに、新幹線の車窓からそのピラミッド型の山容に向かって、ふもとの家で待つ家内とネコたちに「帰ってきたよ」と呼びかける山だった。

そんな大山が身近にあった日々は、いまはない。この家の先住者だとのさばり返っていた二匹のネコは、二十年もの長寿を保ったあと、三年ばかり前あいついで亡くなった。そして、私と家内はネコのいなくなった大山の見える家を捨てて、熱海の家がひろがる家に移った。

その家内も熱海の家で逝って、はや三月余り経つ。

いま車窓から大山を見ても、あの小さな家で四人が過ごした日々の思い出、電車のなかから「帰ってきたよ」と呼びかけた記憶を知るものは、私の他にだれもない。それなのに、なぜ私はこの車中で、「今日は大山が見えるか」と思ったのだろうか？ あの大山の姿を見れば、さきに逝ってしまった家内とネコたちに、なにかを呼びかけられるとでも思ったのだろうか？

そんな思いは、はかない感傷でしかない。そして、そのことを一番よく知っているのも、私なのだ。

索漠とした思いが心に広がるなか、窓の外を飛んで行く家々を見つめながら、私はふたたび大山の雄大な姿を思い描いてみた。だが、それは在りし日々を蘇らせる何ものでもなかった。

私は首を振って大山の幻影を振り払うと、膝の上の本を取り上げて、ふたたび読みはじめた。しばらくして眼をあげ窓の外を見ると、電車はすでに国府津の駅を過ぎていた。大山はもうはるかうしろ、曾我丘陵の陰に隠れてしまっている。

## 佐渡の旅

保坂 令華

大野亀に着く。小高い丘にはトビシロカンヅウの黄花が斜面を埋め尽くして美しいこと。眼下には青い海と白波そして二つ亀の奇岩が一望される。

昨年六月、友と二人で、悲話と史跡の佐渡へ二泊三日の旅をした。

東京駅より上越新幹線で新潟へ。車窓から見る越後路の青田が美しく心が弾む。

新潟駅より両津港へ。日本海の荒波が嘘のように穏やかで二時間程で佐渡へ。

水無月や佐渡へ渡るは流離めく

両津港より北へバスで海岸沿いを走る。道祖神や神社仏閣、そして流人の島らしく無人墓が多く見られる。

紫陽花の美しさが切なく、思わず掌を合わせる。

潮寄せて四葩<sup>よひら</sup>影ひく島の墓

六月の海に展がる奇岩かな

二日目も快晴。西海岸を走り尖閣湾に着く。遊覧船で断崖絶壁の景観を仰ぎ見る。

絶壁の波をしずめるあいの風

佐渡金山に行く。想像以上に奥深く、各ポイントには電動で話す人形が置かれ、当時の様子をリアルに再現している。

金山の悲話胸できく五月闇

いよいよ佐渡名物、小木のたらい舟。泳げない私は当初は乗らぬつもりだったが、たらい舟が思ったより大き

くゆったりしていたので乗ってみた。

たらい舟乗れば夏日に遊ばれて

小木から北へ約三〇分、徳川家康、家光の御霊屋がある蓮峰寺、あぢさい寺と言われるだけに多くの種類の花が咲き乱れていた。さらに土地の高低に応じ金堂中心に多数の建物が配置され、伽藍美の美しさに圧倒された。

二日目は真野温泉泊り。日本海に沈む夕日の美しさに幸せいっぱいひと刻だ。

大夕焼燃えて流人の島つつむ

三日目は佐渡歴史伝説館を見学。順徳上皇は二十五歳で佐渡へ配流され、二十二年の歳月をこの島で過ごされ、四十六歳で崩御されたとのこと。館内にはこの他日蓮上人、世阿弥なども配流されたことを、人形の動きと語りにより知ることが出来た。

四葩咲く御陵に深む愁いかな  
青嵐吹く奥津城や朽ちしまま

次に妙宣寺<sup>みょうせんじ</sup>。茅葺の仁王門を入ると五重塔。三十年の歳月を重ね、文政八年完成し、国の重要文化財に指定されている。本堂をはじめ茅葺屋根の庫裡、方丈、書院、土蔵造りの宝物殿には日蓮上人御真筆など数多くの重要文化財が収められている。また日野資朝の墓所や歌碑もあった。

佐渡は能の島とも言われ現在も能舞台が三十余残っている。島の人々に支え育まれ、伝統的な能が息づいているとのこと。本場の能を鑑賞出来なかったことが残念だった。

二泊三日、天候にも健康にも恵まれ、歴史と自然が溶け合った佐渡へ旅のできたことを感謝し、また新たな旅が出来ることを願い帰路に着いた。

## 脱亜入欧の旅

大野 晃

例年ならば第一テーマの「日本 これから」に取り組むのですが、今年は「アベノミクスの成果」に違和感をもち、当会の「サロン21」の議論にもついてゆけないので、敢えて第二のテーマを選びました。

勿論旅をするのは経済事情からフリーという訳には行きません。

私の旅のモットーは「脱亜入欧」です。「脱亜」の「亜」は「亜細亜」プラス「亜米利加」です。福沢諭吉先生からの拡大解釈です。脱線を許されるなら「天は人の上に人を造らず」も大好きな言葉です。月謝が払えなくて塾に入らなかつたことをお許しください。

「脱亜」ですら韓国問題はパス。

前置きが長くなりました。

健康のためと称して冬はスキー、夏はアルプスの山歩

きを楽しんでいます。

旅をするには先立つ物はお金なので、大都市には行きたくともホテル代が高すぎて二の足を踏んでいます。

ではどうするか。外貨を替えるのは面倒なのでユーロ一本に絞っています。その中で比較的宿賃の安いところを狙います。不思議な事ですが宿泊費と食費は反比例するようです。つまり大都会では宿泊費は高いが食費は日本よりも安い店が沢山あります。一方田舎では談合をしているのか安い店の中々見つかりません。ただスーパーで食材を買ってきて宿で食べるという手があります。

では私の眼鏡に適った国はどこでしょうか。

最近ユーロ圏に加入したスロヴァキアは穴場です。タトラ山系は夏冬楽しめます。ただ、朝日本を出て、首都のプレスブルク（スロヴァキア語でブラチスラバ）からその日に入ることはできません。

この国はソ連体制の崩壊後訪ねて驚いたのですが、それまで一言もドイツ語を話さなかつた街の人々が流暢なドイツ語を話すではないですか。一般的な日本人の見方

と違ってハンガリー人よりも遥かに達者です。理由は簡単、オーストリア・ハンガリー帝国を分けるライタール川の内外の違いです。外側のハンガリーとクロアチアは今一つドイツ語が通じませんが内ライターのスロヴェニア、チェコ、スロヴァキア（この国のみグレイゾーンですが）の三国はドイツ語で不自由することはありません。

従って私の旅の目的地としては、ドイツ語地域ではあるが物価の高いスイスと西ドイツを除いて、オーストリアを含む内ライター諸国と精々東ドイツになります。これに朝日本を出てその日の内に確実に田舎の町まで行けるという条件を加えると、オーストリア、それもインスブルックかザルツブルク近郊ということになります。

特にインスブルックは氷河の上で一年中滑れるスキー場が五つも直ぐ近くにあります。これは今やスイスのチューリッヒやジュネーヴが逆立ちしても敵わない事実です。氷河の上とは標高三千メートルで滑るということです。その中でシュトバイタールという谷のスキー場は八十歳以上の高齢者のリフト代を無料にしています。

勿論フランスアルプスには七十二歳、七十五歳から無

料のスキー場はありますが、宿泊代がざっと三、四倍になるので、貧乏人の私は諦めました。

当分の間、冬はこの谷でのスキーになりそうです。



## 同行二人と二期二会

内田 満夫

私なりの旅の流儀はいくつかあるが、目玉は「同行二人」と「二期二会」だ。

まず、長旅をする時の「同行二人」。

私の原則は一人旅だ。単独行は自由気ままでいいのだが、張り合いに欠け寂しさも拭えない。すぐに牧水の「寂しさの終てなむ」気分には陥る。根が人恋しいたちの私には、これはつらい。

そこでいつの頃からか、気心の知れた知り合いに、四国遍路の「同行二人」よろしく、旅の道連れを頼むことを思いついた。道連れといっても携帯電話によるメール同行である。交信しながらツアーをしていると、あたかも二人で旅をしているかのように寂しさは消え、楽しさが倍加する。

交信の内容は、行った、着いた、見た、聞いた、した、食べた、飲んだ、などの他愛ないやりとりだ。こういう

のは妻か娘かあるいは知り合いの女性に相手をしてもらうに限る。

次に「二期二会」。これは長旅に限らない。日帰り旅をする時の楽しみでもある。

私は週に二、三度、街歩きツアーに繰り出す。いろんなスポットでいろんな人に出会う。そんな中で、そのまま別れてしまうのは惜しいなと思うことがある。その時は、遠慮なく携帯電話の番号交換をお願いする。番号さえ交換しておけば、異機種間でもショートメールのやりとりが可能なので縁が切れない。

こうしてつながりのできた人と、同じようなTPOで再会する遊び心が「一期二会」だ。時や場所を違えて同種のイベントのある時が、連絡を入れて再会するチャンスになる。私の場合には、映画や舞台やセミナーやウォーキング会などだ。そんな時、手軽で控えめな通信法である携帯メールは最適の連絡手段だ。二度目に会ってみると、いい交遊に進めそうかどうかだいたい見当がつく。

私にはこうして親しくなった知り合いが何人かいて、

街歩きのあちこちのスポットで出会うのを楽しみにしている。メール交換した知り合いは時空を超えて有効だ。長い無沙汰でもメール一発で容易に交遊復活できるのがいい。突然の連絡でも違和感がない。メールで十数年つながっている知り合いも何人かいる。

私が旅を思い立つきっかけは、同級会とか祝い事とか遠方で非日常のイベントのある時だ。それをメインにして、かねてから温めていたサブテーマをプランに組み込んで行程をつくる。

たとえば一昨年の秋、飛驒の下呂で同級会があった。それを主軸にして、地方鉄道の乗車、旧友との再会、帰り道の京都市内立ち寄りという盛りだくさんの行程をプランした。地方鉄道乗車は、ラジオ番組を聞いていて触発されたものだ。

六甲山裏の自宅を早朝に出て、朝八時発の直通特急で大阪を出発。同行二人の連れを頼んだFさんにさっそく第一報を入れる。高山本線に入ってすぐの美濃太田で下車し、長良川鉄道を刃物の町、関まで往復乗車。十五時

過ぎに下呂に着き、合掌村を見物したあと宿に入り同級会。

翌日の午前、高山市内を散策して駅で解散。一行と別れ高山本線を北上。越中八尾で下車し「おわら資料館」まで往復して「風の盆」の町の匂いを嗅ぐ。その夜は富山で会社時代の同僚と一献のあとホテル泊。

三日目。「富山ライトレール」で富山港の岩瀬浜まで往復乗車のあと、北陸本線ですぐの高岡で下車。「万葉線」で富山新港の越の潟まで往復乗車のあと、特急列車で一気に京都まで戻ったのが十七時。高校時代の同級生と一献のあとホテル泊。

四日目。午前中京都市美術館で開催中の「ボストン美術館所蔵ジャポニズム展」を覗いたあと午後は東映太秦映画村を見物。その頃封切された『太秦ライムライト』に触発されて初めての訪問だ。

旅で同行二人してもらったのは、ウォーキングがきっかけの二期二会で気心の知れたFさんだ。今回は鉄道好きの職場の同僚にも時々顔を出してもらった。

こうして私のオンリーフォーワンの旅が終わる。

## 菅江真澄の旅日記を読む

大月 和彦

江戸時代の旅行家菅江真澄が長い漂泊の旅で見聞したことを記した旅日記が、『菅江真澄遊覧記』（全五巻、東洋文庫）として刊行されている。

天明年間に三〇歳の時故郷三河国を出て以来、信州、越後から出羽に入り津軽、南部、伊達領、蝦夷の松前、江差、長万部を歩いた後、下北半島の大畑、田名部などに二年余滞在した。津軽から再び出羽に入り晩年は佐竹藩の地誌編集に携わった。みちのくを歩き続けて五〇年近く、文政年間に秋田県角館で七六歳の生涯を終えた。

菅江真澄の生涯は謎に包まれている。

生い立ちや旅に出た動機、目的は一切語らず、旅費の出所、旅が厳しく規制されていた当時藩境の関所をどのようにして越えたのか、各地の支援者との関係など不明の点が多い。

本草学、国学、和歌などに造詣が深く、これを活かして旅先で教えたり情報を提供したりしながら土地の有力者や知識人宅、寺社などを渡り歩いたらしい。

確かなことは、各地を歩き続け、村人の暮らしの中に入り込んで、風俗習慣、口承、年中行事、お祭りなどのほか山川草木の自然の姿を観察し、克明に書き留めたことである。

遊覧記の舞台は東北地方と蝦夷で、大きな町や名所旧跡ではなく普通の農山漁村である。

老人や女性、アイヌ、遊芸の旅人など社会の片隅に生きる人たちの声に耳を傾け、生活史や風俗史、地誌など多岐にわたる貴重な記録となっている。

十余年前、勤務から解放されたのを機にこの遊覧記を読み始めた。当時辺境とされた東北の人々の生活や事物の丹念な描写に魅せられ、真澄ワールドにはまり込んでいる。読むだけでは物足りなくなり、真澄の足跡を追うようになった。五万分の一地図を手に、遊覧記に出てくる村や寺社を訪ね歩いている。



おびただしく出てくる地名や寺社を意外なところで発見したり、描かれている山、川、滝、島などの情景に出合ったり、ゆかりのある人の名などを見つけたり——真澄の世界を探索するのが楽しい。

天明の大飢饉の直後、津軽のある村を歩くと草むらに人の白骨が沢山乱れ散り、うず高く積み重なっていた。

矢立峠では鍋釜や家具を背負い幼児を抱えた男女が大勢やって来るのに出会う。飢饉を恐れ逃げだす難民だった。ある山里で無縁車をカラカラと廻し念仏を唱えている乞食に会う。ここに埋められた餓死者を吊っているという。数年前、大館市郊外のこの山里を訪ねた。田植えがすんで青々とした水田が広がる明るい情景だったが、思い出しぞくぞくと震えがきた。

羽後の西馬音内の市でのこと。店先から鮭の頭を盗んだ男を女店主が見つけ、「どす、ぬすと、ものいだせ」、「いな知らじ」、「いうな、たばこふくとして家にいりたるひまに手をさしとりおった、とくと代の錢いだせ」、「はた

らずともやるよ」…土地の言葉でのやりとり。雄物川沿いの村の暮らしの、のどかな一面を見る。

恐山は湯治場でもあった。地獄めぐりの修行者にまじって、宮古からやってきた遊女たちが紺の湯巻をまとい、頭に手ぬぐいを載せて、念仏を唱えながら、手桶で湯を掛け湯浴みをしている情景を記す。

恐山菩提寺境内の参道には古びた湯小屋が建っている。

泊まった山間の一軒宿の片隅に寝転んでみると、早曉に髪を振り乱し、異様に光る眼の形相の怖ろしい男たちが炉端で斧を研いでいる。やがて氣勢をあげながら出て行く。山仕事に出かけるマタギだった。

米代川上流の湯瀬温泉に「真澄の道」の標柱が建っている。

秋田市高清水の共同墓地に眠る真澄の墓には花が供えてあった。

## 旧交の旅

岩崎 洋一郎

現役時代は、高度成長期に当たり、かつ技術革新が激しかった石油化学分野に身を置いていたために、更に当時珍しかった帰国子女で英語がネイティブであったために、欧米への海外出張が年に三〜四回あり、年次休暇などは殆ど取れないくらい忙しかった。その為、国内の旅は殆どできなかった。妻は、私の海外出張の間に、同学の女友達と温泉旅行に出かけたりしていた。

六十歳半ばで定年になると暇ができたので、国内の名所を訪れたい気持ちになった。そこで始めたのが小学校時代の友人たちとの旅行だった。私を通った成蹊学園の小学校は、一学年東西の二組からなり、各クラス男子二十名と女子十名で構成されていた。男子は、同じ成蹊学園の尋常科（中学のこと）と高等科に進学したので、十年以上の深い付き合いであった。旧制下では、女子は

同学ではなく別の上級校へと進んだ。

しかし、定年後のクラス会は男女合同で行い、女子もかなりの参加者を得ていた。そこである時、一緒に旅行しようという話になり、二泊三日の旅行が提案され実施の運びとなった。その小旅行の立案と予約を任されたのが、何と最も実績が無い私だった。なんでそうなったかはもう忘れたが、成り行きで引き受けざるを得なかった。

皆六十歳を越している高齢者達であるので、二泊三日に限定することで一致。また、足弱の女性もいるので移動は新幹線と車と決めた。人数によってはタクシーか小型バスと決めた。そして最大のポイントは、一泊はその土地の最上の旅館にし、もう一泊はごく普通のお得な旅館にする取決めにした。

実績を見ると、北は北海道、南は鹿児島まで足を延ばした。沖縄は、我々は「姫ユリ部隊の玉砕」の同時代であるので、心情的に耐えられない。九州の特攻基地「知覧」を訪れた際も涙が止まらなかった。

贅沢旅館で覚えているのは、小樽の「銀鱗荘」と石川県の「加賀屋」。高知の「城西館」では「成蹊学園の卒業生」と「岩崎」という姓のお蔭でご当地の財閥家の一員と誤解されて厚遇を受けた。同じ嬉しい誤解が岩手の「小岩井牧場」でも生じた。ここも財閥の岩崎家が経営する牧場であつたので。

私自身は、国内旅行は殆どしていなかったもので、どこへ行っても印象的であつた。例えば大分県の国東半島は、大陸から伝来した仏教がまず根付いた土地なので、ひなびているが古刹に恵まれていた。又、琵琶湖の東の湖東地区にも、隠れた由緒ある寺院が散在していた。愛媛では、古来の和紙の漉き方を体験したりもした。別府温泉も訪れたが、ギヤルが多くて泊りは当時無名の黒川温泉に足を延ばし、鄙びた、かつ洒落たおもてなしを満喫した。

また思い切つて趣向を変えて、当時就航間もない豪華クルーズ船「飛鳥」を利用した。やはり二泊で、本土沿いに紀州熊野まで行き帰りは名古屋で下船した。成蹊学園の名前が効いたのか、夕食時は船長のテーブルに招かれ、その上乘船中に誕生日を迎えた仲間の女子がいたの

で、盛大にケーキや花束で祝つていただく幸運にも恵まれた。今でも印象に残っているのは広い水平線に落ちてゆく大きな太陽であつた。

とにかく、男子たちは計十三年間も同じ学校で暮らし、特に戦時中は、一時集団疎開で文字通り寝食を共にした仲間なので、遠慮なしの付き合いで愉快に冗談を飛ばしあい、杯を交わす親密さが身についている。女子はたった六年間一緒であつたが、たちまち男子の雰囲気のみこまれて温かくも稚氣のあふれたグループが形成されていった。回を重ねるたびに、それまでに気が付かなかつた各人の長所短所が露見して一層盛り上がつていった。

十数回もこのような旅を重ねたが、七十歳代半ばになると、一部の仲間に加齢に起因する身体的な不具合が出るようになり、自然に終りになっていった。今振り返ると、楽しい十数年であつた。

## ウズベキスタン共和国への旅

田原 敬

二〇〇五年四月二十一日から二週間、「地球と話す会」の高野直明さんに誘われて、ウズベキスタン共和国へ行った。

この国の国土は日本の一・二倍あるが、人口は僅か二五〇〇万人である。気候は大陸性で、夏は暑く、冬は寒い。昼夜の温度差が大きく、降水量は極端に少ない。砂漠が多い乾燥地帯で、七、八月は摂氏四十五度以上になるようだ。宿泊したブハラでは、四月の末で四十八度もあった。

民族はモンゴル系の突厥の子孫もいるが、ウズベク、カザフ、トルクメン、タジク、キルギスなどは主にトルコ系である。

国名のスタンは紀元前六世紀のペルシャのダリウス大王が支配した名残といわれる。

一八五〇年よりロシアに支配されたが、一九九一年に独立を果たした。

宗教はイスラム教のスンニ派その他、ロシア正教が主だが、ゾロアスター教の古い建物が遺っている。

この国の英雄であったチムールの時代に建てられた、青空に映える、碧い丸屋根のモスクが目立ち、格段に素敵な風景である。青は理想郷、天国の色という。

欧州と中国を繋ぐシルクロードの中央にあり、サマルカンド、ブハラは紀元前よりキャラバンサライの交易地として栄えた。しかし、サマルカンドは十三世紀にモンゴルの侵攻により徹底的に破壊された。「チンギス・ハンは破壊し、チムールは建設した」という言葉は、ウズベキスタンの人は誰でも知っている。

近くに聳える高地には紀元前の古代人が彫った岩絵があちこちに残り、その数は数千もあると、居合わせた地元の考古学者が言っていたが、一見の価値がある。

天山山脈やヒンドークシユ山脈から流れ出す水が、シルダリア、アムダリア川となって流れ、この二つの川の間にウズベキスタンがある。

出口のない内陸湖のアラル海が北部にあり、行つてみると水が減っている。川の途中で灌漑用水として畑などに利用されるのと、地球の温暖化もあつて、砂漠化が更に拡がる様だ。

湖の手前にあるカラパルパク州の州都、ヌスクにあるアリシエルさんの家庭で三泊させてもらった。われわれは男子五名、女子五名の一行であつた。

ご主人のアリシエルさんは高野さんの友人で、日本に留学して早稲田大学大学院まで七年間滞在され、故郷へ戻られたとのこと。

父親のアイナザルさんは以前、自国の大学教授をされ、大変な日本最良の方であつた。

奥様のゲルチエルさんも若い頃は教育者で、五人の子供さんは成長しアリシエルさん以外は、全部教育者となつたそうだ。

この初めての訪問に、二年間も育てた羊を屠殺し、心からの歓迎をしてくれた。

アリシエルさんは留学に際して、「留学をするなら日

本にしなさい」と父親から強く言われたそうだ。その理由は「戦後ロシア軍が満州にいた日本兵を、大勢連れ去り、この国の首都のタシケントに、美しいナヴォイ劇場を建てさせた」と、父のアイナザルさんが言われた。

捕虜にされた日本兵は勤勉で、態度が堂々として、現地のウズベキスタンの人々に、大変、好印象を与えたようだ。ナヴォイ劇場の外観は素晴らしく内部も均整とれた見事な出来栄であつた。

現地で亡くなつた軍人も大勢いる。後に、墓苑を造り、素敵な墓石に一人ひとり氏名が彫られている。墓石を見ていると、故郷に親、妻、子供、兄弟姉妹を残し、断腸の思いであつたであろうと偲ばれる。

父親のアイナザルさんは当時十歳位であり、アリシエルさんの祖父が見聞させた日本の軍人達の生き様や人間愛など、祖父の言い残した言葉に感動を受けたらしい。

日本の大使館もこの墓苑の建設に大いに関わり桜の苗木二十七種、三千本を植えたとのこと。その季節になると、見事なお花見ができるのであろうと、一人思っている。

## 船と山

阿部 典文

人間の運命、それは一寸した事で左右される。

私が造船を一生の仕事として選んだのも、入学願書締切りが迫ったある日の出来事がきっかけであった。

建築もいいなあ―近代的な高層ビルを設計できるし。

うん林学、そうだいいつでも山に行ける。だが待てよ、趣味と職業が一致してはつまらないなどと迷っていた。この時、私の幼年時代の忘れられない思い出の一つが、突然脳裏に浮かび上がってきた。

それはロサンゼルス港の夕暮れを背景に、軍艦旗を靡かせながら入港してきた駆逐艦のダイナミックな姿であった。その時子供心に、軍艦に一度は乗ってみたいし、又設計してみたいと考えたのだった。

それから数日間、北米大陸を後にしてからは大圏コース特有の灰色の空と荒い波に苛まれ、船や海に對して多少の嫌悪感を抱いた。

しかし神戸に到着、上陸してから自分の乗っていた船を振り返ったとき、私は再び驚きの声を発したのだった。純白の美しい流線型をした船体。太くて短く逞しい煙突。それらの織りなす機構美。水上を航行する船として、無駄の全く無い美しい姿に私の心は魅せられてしまった。ブラジルのサントス港で乗船する時は、何も感じなかった私が、ひと月以上共にした船を去るに当り愛惜の情を覚えたのであった。

このようにして私と船の絆が始まった。小学校の高学年になると、ボール紙を積層して作る軍艦の水線上模型に熱中した。又私が感激した船、即ち「あるぜんちな丸」を設計した和辻春樹博士の名著『隨筆・船』にも接し、この本から多くのことを学び、船は私の体に潜在する一部分となっていくた。

しかし一方で、多感な青春期を迎えた私の軌跡は、大きく山へと傾斜していった。そのきっかけは、昭和二十三年夏の学校行事としての富士登山であった。

新宿を午後の早い時間に出発し、富士吉田より裾野の

長い道を夜通し歩き、八合目でご来光を仰いだ。指導教官は国語の先生で、ご来光を迎えたとき、その荘厳な美しさに感激して「いや栄え」と何度も絶唱された。私も山の持つ靈感に打たれ、清々しい気持ちに酔いしれた。この経験为契机として山岳部に入部し、私の登山遍歴が開始されたのである。

「最初の頃の山登り」は、自然の美を観賞し、心の憩いの場を求めている山行であった。しかし山行の回数が増え、体力も技術も向上するにつれ、スポーツとしての登山指向が強まり、狂気の如く山を歩き回り、学業は急速に悪化していった。そのままの状態が進めば登山家としての私が出来上がっただろう。

『日本の百名山』を著した深田久弥は、「登山と年齢」というエッセイで、山に熱中する者は三つの関門によってふるい落とされると記している。

その第一の関門は就職。学校はサボっても落第ですむが、勤め先をサボると出世の妨げになる。第二の関門は結婚。家庭は山より手強い。善良な夫ほど山から遠ざか

る。そして最後の関門は「登山家」の道。

私の就職した時代は、日本の高度成長が始まった時期で、多忙で休暇も満足に取れなかった。また「善良な夫」として山登りは視界から消え去って行つた。

しかし「山恋」の想いは消え去らず、定年後「低山歩き同好会」を結成。山への憧憬を持続させていたが、鬼門は老齢化による体力の減退と老人病。前立腺ガンや軽度の狭心症に見舞われ、山登りは夢のまた夢となつてしまった。

齢八十二才を迎えた今、天竺にも幾つか山があることに気付き、そこで山登りを楽しむ私を夢想してみた。恙なく天国に辿り着けるかが最大の課題。健康に気配りをする昨今となつてい



## アルプス一万尺を走る

志村 良知

山脈とは平原と平原を隔てるものである。峠は陸路で山脈の向こうに行く為にある。曲がりくねった急坂を登りつめ、峠の頂上（鞍部）を越えれば、遠かった山の彼方の空の下にまだ見ぬ地が広がる。

ヨーロッパにはアルプスというとてもない山脈が文明社会のご真ん中に陣取っている。高速道路に囲まれたアルプスは、山中に入っても道路が網の目状に張り巡らされ整備されている。そしてその道路は必然的に峠道の連続になる。

峠の前後では空気が違う。言語や国が変わったりもする。峠道はまた絶景である。アルプス地方の森林限界は千八百メートル位で、その上を走れば景観を遮る樹木は一本もない。飛び込んでから部屋の有無を尋ねるのが常の谷あいの素朴な旅籠のもてなしも嬉しい。峠道ドライブというのは苦難もあるが、楽しみにも満ちている。

私も車の運転が好きで、ヨーロッパ駐在中は精一杯ドライブを楽しもうと分不相応な高級車に乗っていたので、峠道を求めて山中を目指すようになった。連れ合いは涉外担当で旅籠を探して交渉し決定する役目だった。

丁度そのころ、インターネットを通じて日本在住でヨーロッパドライブを趣味とする人と知り合った。彼は年一回、二週間位ヨーロッパをご夫妻で旅したが、ロンドンやパリなどには全く興味を示さず、徹底的に峠道ドライブであった。そのホームページ『ヨーロッパアルプス峠・谷ドライブ』は個人ホームページの常識的規模と内容を遙かに超越したもので、アルプスをドライブするということについての情報の全てが網羅されている。

アルプスで車で越えられる標高千五百メートル以上の峠道全制覇を生涯の目標とするドライブの計画は毎年精緻を極め、地元民以外誰も知らないような細い峠道を探し出し、一筆書きのように結んで行くのだった。私はこの人を師匠と呼ぶことにした。

さらに若い医師で、夏の休暇には当時まだ幼いと言つてよかったお嬢さんと奥様と三人でヨーロッパをドライ



プするのが趣味という人が参加してきた。この人も師匠ほど徹底しているわけではなかったが、峠道フリークで、車だけでなく汽車での峠越えにも詳しくかった。長幼の序で私が兄弟子、彼が弟子ということになった。

師匠のホームページや主催する公開掲示板には結局十人あまりの同好の士が集まった。仲間とする深遠かつ重箱の隅をつきまわすアルプス談議は楽しかった。ガイドブックには絶対に載っていないアルプスの峠と谷の魅力にあふれていた。

仲間たちとは峠道番付を作ったことがある。侃々諤々の議論の末、一位となったのはステルヴィオ峠であった。イタリアの南チロルのヴェノスタ谷からスイスに抜ける峠で、高さ二七五八メートルはアルプス第二位。ヴェノスタ谷から頂上まで三十キロの標高差一八六八メートル、最後の五キロは平均斜度十二度という坂道は、後にBBCの『トップギヤ』という番組で「世界最高のドライビングロード」に選ばれ、我々の審美眼の正しさが証明された。

アルプス山脈の全域に魅力的な峠が分布しているが、標高が高い峠ベスト五の内、ステルヴィオ峠を除いた四つがフランスアルプスにある。

このフランスアルプスをエヴィアンからニースまで走行距離八百キロ、十個以上の峠を越え、六日間を費やして縦断するドライブコースがミシュランガイドに載っている。最高地点はボネット展望台の二八〇二メートル、最大の峠イズランは高さ二七六四メートル、前後の人里から人里まで七十キロの無人地帯を行く。部分的には何人もが走っていたが、ミシュランガイドに忠実に一気に縦断するのは夢で、誰が最初に実行するか牽制し合った。そして、二〇〇〇年九月、師匠にも先駆けて私が最初に完走した。当時の地元住民として第一号は譲れなかった。

ゴールは、ニースのプロムナード・デ・ザングレのヴィクトリー・ランであった。

## 旅の杖

猪股 重子

月日は百代の過客にして行きかふ年もまた旅人なり  
芭蕉も言っているように、人生そのものが旅の積み重ねだと思われまふ。

思っておくすといろいろな旅が心に浮かびます。

縁あって視覚に障害のある人達と長年ふれあいました。その人達や団体などの旅行を通して、深く感じたこと学んだことがたくさんあります。その中でも尾瀬の旅は忘れられない旅です。

よく、見えない人が旅行に行って何を見るのでしょうか？という質問を耳にします。すると必ずその場の風、空気、匂い、全てを体で感じることですという答えが返ってきます。

数十年前、尾瀬の素晴らしさが話題になっていた時、視覚障害者のリーダーだった夫が尾瀬の一泊旅行を計画しました。私もツアーガイドよろしく何でも屋のボラン

ティアを張り切って引き受けました。

まず募集の条件を厳しくしました。軽登山靴などで一人歩行の出来る人、白杖を使える人、付添人のいる人などとしたので、何人の申し込みがあるか心配していたら、あつと言う間に今まで何の行事にも参加しなかった人達が申し込んできました。年配の女性が多く大丈夫かしらと心配になりました。若い頃見えていた時に尾瀬を歩いたことがある、今一度行ってみたいとの思いからの参加です。

ガイドは山歩きのベランボランティアを数名募集。名乗り出たのがこれまた年配の男性で、大丈夫か？と：。

いよいよ準備万端出しました。一路予定の福島県峠の茶屋へ、天然のイワナの塩焼きを目指してバスは進みます。今はトンネルになっていますが当時はヘアピンカーブの急な道で、運転手さんがこんな難所は無理、マイクロスに乗り換えてくれと言いました。困っていると山から地元の大形バスが降りてきました。それを見て都会の運転手さん、一大決心したのか、「行きましょう、

しかし見えている人は、怖いとかキヤーとか声を出さない、説明しない、席を立たないこと」と言ってバスは走り出しました。でも怖いこと怖いこと、早く着くようにと祈りました。

良い匂いのするいろいろ端を囲み、美味しい山の幸の昼食にみんな大喜び。夜は国民宿舎の御池ロッジへ。まだ所どころ残っている雪に感激。

翌朝沼山峠でバスを降り、いざ出陣とみんな張り切る。でもすぐにすごい難所、大きな水たまりや落差があり、どうやって沼地に降りるかと迷っていたら、さすがベテランの山男ガイドさん、一人ずつ背負って素早く木道へ続く道へ降ろしました。人は見かけではないと反省。夏うぐいすの声にうっとりしながら、綿すげの白い実、ニッコウキスゲの黄色い花、水芭蕉は少し咲いていました。落ちないように注意しながら一列になって木道を進みました。先頭を歩いていた夫が、あつという声をあげました。あれ程用意万端で行ったのに、白杖が折れてしまいました。いくら勘が良くても杖がなければ進めません。持っていた会の旗をぐるぐる巻きにして渡し、それを杖

代わりにして木道の縁をさぐりながら進みました。

すると反対から来た女の人が「良かったらこれを使って下さい」と長蔵小屋で買ったというお土産の登山杖を差し出して下さいました。貴重な記念の品と恐縮し辞退しましたが、「又買えますから」と言われ有難く頂きました。人の情けが心に沁みました。

無事に長蔵小屋までついたころ山の天気が変わり強い雨が降ってきました。一休みしていいよ帰路です。みんな黄色い雨合羽を買って一列になり、ロープで前後を確かめ合いながらバスへ戻りました。心を寄せ合い、助け合いながらの思い出の旅は無事に終わりました。

後日記念の写真を見るたびに、いずれがニッコウキスゲかと見紛うほどの黄色い一列に笑みがこぼれます。

今一度立ちたし尾瀬の草紅葉

登山杖拭へば老鸞耳にあり

今も、家には私の宝物としての登山杖があります。

## 心身癒やしの旅―梅の木「葉」の杖

ひこばえ

羽田 壽夫

昨年の十一月九日から十一日迄の三日間、昭和三十八年機械科を卒業し全国に散らばった全六十名の内十六名の参加を得て、喜寿記念旅行（心身癒やしの旅）と称する大旅行が企画された。小生は未だ七十五歳であったが、メンバーの大半が喜寿に達したお祝いに和歌山在住の幹



事が日本旅行に依頼し、貸切バス、旅館、語り部と称する特別案内人を手配しての高野山、龍神温泉下御殿、熊野古道、南紀ホテル浦島忘帰洞、橋杭岩、紀伊大島エルトゥール号トルコ記念館等々、結構豪華旅行であった。これはその報告の一部である。

ここに示した写真は熊野古道を案内して戴いた熊野古道語り部福田様の写真である。福田様が手に持っておられるのが今回ご紹介する梅の木「葉（ひこばえ）」の杖である。左の集合写真は、箸折峠牛馬童子付近で参加者全員撮影の時のものである。よく見るとほぼ全員が福田様の御厚意で準備して戴いた、梅の木「葉（ひこばえ）」の杖を持っている。葉（ひこばえ）と言うのはあまり目に懸からない漢字ではあるが、樹木の切り株や根元から生えてくる若芽で、太い幹に対して、孫（ひこ）に見立てて「ひこばえ（孫生え）」と言い、俳句では春の季語だそうである。梅の木の場合、まっすぐに伸びる特性があるとのことである。福田様は南高梅生産農家でもあるが、この貴重な梅の木の「葉（ひこばえ）」を加工し

て熊野古道完歩用の杖を作られたのである。梅の木「薬（ひこばえ）」の杖の重さはわずかに百十グラム（自宅帰着後に計測）に過ぎず非常に軽く、しかも弾力性に富んでいる。他のメンバーは一本ずつであったが、小生は足が不自由であったのでこの杖を特に二本頂戴したのである。

この二本の杖のお陰で、小生の幹事への当初の申告では熊野古道について「歩かない」としていた小生も熊野古道の牛馬童子口↓近露王子を完歩できた。誠に、梅の木「薬（ひこばえ）」の杖様様であった。

熊野古道を歩いた後は、熊野本宮大社、大斎原（おおゆのほら）を観光したが、熊野本宮大社の名に勝負百五十八段の石段を制覇するにもこの二本の梅の木「薬（ひこばえ）」の杖は大いに役立ち、又、大斎原の高さ三十四m、幅四十二mの日本一の大鳥居の見学にも大いなる戦力となった。

なお、小生以外の十五名は新幹線や飛行機の中にこ

の貴重な梅の木の杖を持ち込むのは憚られるとして梅の木「薬（ひこばえ）」の杖は全て福田様に返却されたことを付言しておく



## 外遊をした犬

都 甲 昌 利

私の名前はアミ子。犬種はマルチーズ。先祖は地中海の温暖なマルタ島が起源と言われ、ふさふさした白い毛で覆われているが、寒がりである。生まれは横浜市日吉のスチュワードスをしていたお姉さんの家で生まれた。

お姉さんが今のご主人と結婚したので東京・世田谷の家に一緒に連れてこられ、ここで育った。ご主人の職業は航空会社の社員である。

私の日課は、朝ご主人のベッドに飛び乗り、彼を起こすこと、出勤する時玄関で見送りをし、帰宅したとき尻尾をふって最大級の喜びを表し出迎えることである。彼が飲んだくれて夜中近くに帰ってきた時は、出迎えないでお姉さんと二階で寝る。

私が四歳の時、ご主人がアメリカ・シカゴに転勤になった。さあ大変私を連れて行くかどうか、二人の間で激論が飛ばされた。お姉さんの強い主張で連れてゆくこと

になった。狂犬病、デイステンバーの予防注射を接種し旅立った。

初めてのジェット機の長旅。機内は人間様には静かであるが、私はゴーという騒音には耐えられなかった。

ニューヨーク経由でシカゴに着いた。窮屈なケージに詰め込まれ十四時間のフライトでさすがに疲れた。落ち着いたのはミシガン湖畔に立つ高層アパートの十七階の2LDK。眺めは最高で湖のよううで対岸は見えない。アメリカは規模が大きい。廊下も幅が広く長くて私が走り回るのに最適だ。

ある日、遊びすぎてうっかり誰もいないエレベーターに乗ってしまった。さあ大変、部屋に帰れなくなった。お姉さんも廊下に出て探し回っていた。一人で中にじっとしていたら、エレベーターが偶然にも十七階で止まりドアが開いた。私の匂いと彼女の匂いがしたので飛び降りた。後で彼女にひどく叱られた。

近所の公園は芝生が綺麗で格好の遊び場だった。犬を連れた人々が散歩に連れてくるのに最適な場所だ。ここで私はアメリカの犬達と友達になった。英語が話せなく

でも意思は通じた。多分犬語は共通なのだろう。

イースターの休暇でお姉さんとご主人が私を置いて一週間のカリブ海に旅行することになった。私はアニマル・ホスピタルのお世話になった。病院は実に清潔で獣医さんはドイツ系アメリカ人。身体が大きく最初に抱かれた時には怖かったが、優しい温和な先生ですぐ慣れた。中年の黒人のおばさんが毎日散歩に連れて行ってくれた。お姉さん達が旅行から帰ってきた時にはあまり居心地が良かったのもっと居たいような気がした。

アメリカ生活の楽しい日々も終わりに近づき、いよいよ帰国だ。サンフランシスコ経由で羽田に着いたのは七月で暑い盛りだった。お姉さんたちはパスポートで入国審査を受け無事入国できたが、私は羽田の動物検疫所に規則によって二週間留め置かれることになった。寂しかった。二週間は長い。お姉さんは毎日のように会いに來てくれた。

二週間が経ち落ち着いたのは、駒沢の2LDKの社宅だった。リビングが六畳で狭い。アメリカから持ち帰っ

たダイニングセットを置いたら私の大好きなソファが置けない。

間もなく世田谷の奥沢の家も空き、駒沢から引越をする。広いリビングは気持ちが良い。お姉さんは毎日のように散歩に連れて行ってくれた。近所に大きなブルドッグがいて友達になった。お姉さんはこの犬が「ハナはじめ」に似ているので「ハナさん」と呼んでいたので可笑しかった。

私も十三歳の老齢になり体力も落ちてきたところに悪性リンパ腫に罹ってしまった。動物病院で治療をして回復に努めたが無理と分かり、これ以上苦しまないようにと安楽死をさせてもらった。

深大寺の動物霊園に埋葬された。振り返ると私は外遊をさせてもらったし、家族の一員として可愛がられ本当に幸せな日々を送った。

お姉さんの悲しみは尋常ではなかった。この悲しみを二度と味わいたくないというのもうペットは飼わないそうだ。

## オレの旅の流儀

松谷 隆

十年前、『悠遊十三号』に自由テーマで「手作り旅行の楽しみ」を投稿した。今回は過去十年間の旅行を振り返って、特集テーマの「旅の流儀」にかなっているかを検証することにした。

なぜ手作り旅行をするかというと、

一、自分が手配するので、毎回新発見があるはずで、ボケ防止に役立つ。

二、同じホテルや航空会社を使い、特典をためて無料宿泊やアップグレードを可能にする。

三、グループツアーは自由度が少なく、集合時間や見学時間の制限や、お仕着せの食事はいやだから。

これらを実現できる行先は十三年間駐在したアメリカしかない。さらにアメリカの年金は駐在時の口座への振り込みなので、ドル持参の必要がない。

手作り旅行の最大のポイントは、毎回ネバダ州のラスベガスカリノのカジノに立ち寄ることである。何故ならカジノが家内の精神安定剤で、彼女自身「あそこへ行けば自分に活力が湧いているのが分かる」とまで言う。

その他、駐在時代に行つてよかったところ、行つていないところに交互に行くとか、米国内便は可能な限りフアーストクラスにアップグレードとかも目標とした。

さて十年前『悠遊十三号』の合評会の直後、成田↓サシノゼ↓シアトル↓リノ↓成田のルートを選った。このときのハイライトはシアトルでイチローのプレーをネット裏から見たことである。ノーヒットでも守備と走塁には感心した。リノでは定宿のステーキハウスでの素敵なディナーを堪能できた。

翌年五月には、前述の条件に反し、ラスベガス三泊フリースタイルのツアーに参加した。というのは豪華ホテルのベラージオ宿泊にひかれたからだ。しかし、空港で長々と旅行社の宣伝を聞かされうんざり。失敗だった。



秋にはリノと初めてのミズリー州セントルイスへ行つた。カージナルスがワールドシリーズ出場を逃したおかげで、ホテルでは球場が眼下に見える部屋に入れてくれた。同市は西部開拓の出発地として発展してきた。その記念の高さ一九二メートルのゲートウェイ・アーチのてっぺんまで密室のような五席のカプセルに乗り登った。展望台からの眺望は素晴らしく、改めてアメリカの大きさを認識した。市内観光の目玉はバッドワイザー工場見学でビールを堪能したことである。

二〇〇八年に状況が一変した。娘婿が元旦からバージニア州リッチモンドに駐在し、三月に家族帯同としたためである。我々にとつて南軍の首都は初めての土地で、五月にさっそく訪問した。英国色豊かな最初の入植地だけあって、市内にも多数の見どころがある。翌年秋の訪問時に地図を眺めていて、Pine Valley Driveを見つけた。その画像を年賀状に使用したのもいい思い出である。

二年後、二人目の孫が誕生の際には、二人で応援に駆け付け五十日以上滞在した。結局四年間にシカゴやダラ

ス経由で六回訪問し、家内も精神安定剤を二回、ニュージャージー州アトランティック市で、三回はラスベガスで補充した。

彼らが十二年六月にシカゴ郊外に転居してからは、シカゴ経由、成田ーラスベガス往復のコースを採った。シカゴでの入国審査に三時間もかかることあり、乗り継ぎ便に辛うじて間に合うという経験もした。また、真冬に零下十七度の体験も懐かしい。

十四年六月の彼らの帰任後は、もっぱらラスベガス詣で、バスでの市内散策を楽しんでいる。またステーキハウスでは初めて熟成肉を食べた。価格に驚いたけれど、そのうまさは格別だった。

暮れの帰国便をビジネスクラスにアップグレードを依頼したら、なんとホノルル乗換のハワイ航空便となり、ホノルル滞在八時間も手作り旅行の余禄といえる。

やはり手作り旅行が「オレの旅の流儀」である。

## 『旧街道歩き』と『北海道温泉巡り』

清水 勝

旅は自由気儘が良いとはいえ、何らかの拘りをもって旅すると達成感が倍増する。

『旧街道歩き』では江戸時代の旅人氣分で、リーダーが事前に調べてくれている街道沿いの社寺の歴史・由緒に触れつつ、厳かな気持ちで参拝しながらの旅となる。

『北海道温泉巡り』は観光客の来ない温泉探しに喜びを感じ、大自然の中の露天風呂に浸るのが堪らない。

『小京都巡り』となると、掌編小説の取材だとしている関係で、地元の人との接点を求めて夕食は地場の居酒屋に行っている。その成果は掌編小説勉強会での作品『小京都シリーズ』に活かされているだろうか、少々疑問。

いい機会なので、旧街道と北海道温泉について、今まで行ったところを整理してみようと思う。

まずは旧街道歩きを振り返ってみる。「東海道」(492 km)、「中山道」(537 km)、「甲州街道」(210 km)を

基本にして、それぞれの脇街道も歩いた。

### ◆東海道姫街道(61キロ)

新居関所は女改めが厳しいため、それを避けた浜名湖北側の街道で、將軍吉宗に献上された象も通った。

### ◆京街道(54キロ)

公家との接触を禁じたため京の都を通らず淀川左岸で大阪へ向かう道。東海道五十七次と言われている。

### ◆中山道姫街道(74キロ)

碓氷関所と碓氷峠を避けて北周りで行くことから上州姫街道とも呼ばれていた。本庄宿↪軽井沢町借宿。

### ◆伊勢街道(70キロ)

東海道日永追分↪伊勢神宮まで、多くの参拝者が通る。

### ◆美濃路(76キロ)

東海道の七里の渡しを避け陸路で東海道宮宿↪中山道垂井宿までの二つの主要街道を結ぶ道。

### ◆矢倉沢往還(192キロ)

東海道の脇街道で、途中までは大山街道と呼ばれ、その後は足柄峠を経て御殿場線に沿って東海道沼津宿で合流する。

◆古代東海道（191キロ）

これは奈良時代の国府（国分寺も隣接）を結ぶ道で、相模国府平塚四ノ宮（相模国分寺（海老名市））武蔵国分寺（国分寺市）（下総国分寺（市川市））常陸国分寺（石岡市）までの道を歩いた。

◆塩の道（117キロ）

糸魚川（松本）まで塩を運んだ道。暴れ川である姫川を避け、厳しい山間地の断層に沿った道を牛馬が通った。

◆鎌倉街道は途中まで、上ツ道は鎌倉（町田）所沢（武蔵嵐山）藤岡千部供養塔まで。中ツ道は鎌倉（二子玉川）まで。下ツ道は鎌倉（武蔵中原）東京八重洲（金町）までは歩いたものの、まだ先がある。

◆大山道は関東各地から大山詣で歩いた道で二十五道あるが、保土ヶ谷道、粕尾道、田村道、矢崎道を終えた。江戸からのメイン道は矢倉沢往還と同じで、残りは二十道あり、まだまだ元気で歩かにはいきません。次は『北海道の温泉巡り』。その拘りは公共の宿だ。地元産の材料を活かした料理に舌鼓して、併設の日帰り温泉でその地の方々と会える。そして、安いのが魅力。

宿泊した温泉を列挙してみる。

《道南》恵山温泉、鹿部温泉、大沼温泉、二股らじうむ温泉、虎杖浜温泉、平田内温泉、北松山温泉。

《道央》有名温泉の多い道央では、岩内温泉、ニセコ温泉、石狩温泉、新篠津温泉、丸駒温泉、由仁温泉、秩父別温泉、雨竜温泉、東神楽温泉、白金温泉とあり、有名な洞爺湖温泉、登別温泉を外しても大丈夫だ。

《日高・十勝》鵠川温泉、新冠温泉、三石温泉、ナウマン温泉、士幌温泉、然別湖畔温泉、と知られていない温泉が多く、競走馬が見られるのが魅力だ。

《道東》観光資源の豊かな道東へは釧路空港から。山花温泉、鶴居温泉、津別温泉、阿寒湖温泉、川湯温泉、養老牛温泉、別海温泉、ウトロ温泉、小清水温泉、サロマ温泉、とあり、摩周湖、阿寒湖、屈斜路湖がいい。

《道北》オホーツク温泉、枝幸温泉、浜頓別温泉、豊富温泉、天塩温泉、羽幌温泉、苦前温泉、美深温泉。

以上四十一温泉になる。北海道のほとんどの市町村には公共の湯、公共の宿があり、これら以外にもまだまだ知られていない温泉がいっぱいある。今年も行くゾ。

## 中国やきものツアーに誘われて

原田 信

十年ほど前、急に中国やきものツアーに誘われた。出発まで僅か数日。旅は準備が楽しいからこそ計画する。でも、一行の大半は陶磁器の窯元たち。行く先は西安周辺と景德鎮。欠員が出て声が掛かったのだし、初めての中国だから思い切って飛び込んだ。だが、準備する気持ちにゆとりがないので地図も本も入れ忘れてしまった。

初日の夜、経由地の上海の民族系レストランで、小事件が起きた。食べ始めて間もなく、一行の大半が「まずくて食えない」と騒ぎだした。陶磁器研究家の団長が立ち上がって「だまらっしゃい」と叱りつけた。八六歳の小柄な団長は静かに続けた。「中国の本当の姿を見てもらいたい。この店の味も中国です」。確かに泥臭い料理だ。でも、この味は市民が親しんでいるのだらう。そういう味が判るのはやはり旅ではないか。

四日目、私たちは西安の北百キロの村にいた。なだらかな草原に羊が群れている。オリブグリーンと言われる中国北方青磁の復元を目指す窯元の屋敷で昼食だった。うどん、炒飯、青菜炒め、卵焼き。先に騒いだ連中も「結構おいしい」と言っている。大皿に残った料理は女性たちが別の部屋に運ぶ。家族や従業員のためだ。つまり、ふだんの昼食が出されたのだと判った。屋敷はすべて黄土高原の横穴住居。厚い土壁や天井で、真夏のこの時も涼しく感じたし、冬は暖かいという。

翌日は二百キロほど東の黄河にある壺口瀑布に行く。先の集中豪雨で寸断された道路の復旧工事があちこちで行われ、バスはものすごく揺れる。二時間も遅れて瀑布に到着。帰りは悪路を避けて別のルートになった。それがとんでもない行程になるとはだれも予想しなかった。間もなく夕暮れ。道に灯りはほとんどない。バスは灯りのある所までひたすら走る。灯りは大抵、小さな商店だった。果物でも菓子でもとにかく買い込む。空腹はこれほど辛いことだったのか。「えーっ、ここはさつき通ったぞ」「標識が見えたけど、ますます遠ざかってる

よ——みんなが悲鳴のような声を上げる。二人の中国人添乗員も地元の運転手も地理が判らなくなってしまう。自分もやはり事前の準備不足を思い知った。自分の地図も磁石もない。外国語の地図は急場の役には立たないことも知った。仕方がない。しばらく走っては、みんなで話し合う。「道が間違っている感じはしないか」「方向は正しいか」。カンに頼るしかない。かくして月明かりの黄土高原を六時間以上もさまよい、ホテルに降りついたのは午前一時。ホテルの人が大勢待つていて、深夜の宴会になり、一同おおいに感激した。あの辛い彷徨があったればこそその感激と言うべきか。高原の砂漠化を止めるためリングの植樹が多い。小さな青い実が成っていた。袋をかけた果樹園は月光の下、さらに幻想的だ。伊藤整の『林檎園の月』を思い出しながら、その向こうに「耕して天に至る」夜景を堪能できたことも忘れ難い。

ツアーも後半の景德鎮。専用バスの中で女性ガイドが話している。隣の席から「彼女が話しているのは日本語ですよね」と尋ねられた。「そうですね、日本語以外で

はないですね」「で、あなた判りますか」「いえ、全然判りません」——二人は顔を見合わせて苦笑した。景德鎮随一の日本語ガイドだと言う。バスの横に白い等身大の花瓶を載せたリヤカーを見かけたので質問したが、答はなかった。でも、美術館では重要文化財を前に専門用語を羅列していた。理解できない日本語を聞いても仕方がないし、ひとりで回った方がいい。こういう場合でなくても、できるだけ図録を買う。帰ってからの楽しみにもなる。

このツアーでは、雑技団のショーを見物中に、数人が隣のドイツ人たちに「うるさい」と注意されて小競り合いになりかけた。下町を探訪したいと言って添乗員と談判したグループもあった。それでも、メンバーの中に妙な溝はできなかった。北方青磁のオリブグリーンの色合いや景德鎮の精妙な絵付けを楽しみ、六メートルの巨大な花瓶の焼成も見た。両国の陶工によるろくろの技比べが即席で行われた。加えて、始皇帝の兵馬俑や楊貴妃の華清池など多くの史跡を訪ね、黄河の自然や黄土高原の人々の暮らしにも触れた格別の旅であった。

## 実記を片手に「久米邦武・追っかけの旅」

鵜飼 直哉

### 鳳尾松の話

実記久米邦武著『米欧回覧実記』には現地で見聞きした動植物の名前はほとんど現れないが、「鳳尾松」（ほおびしょう）という木のことはずいぶん詳しく書いてある。以前スイスのところを水沢周先生の『現代語訳・米欧回覧実記』で読んだとき、第五卷第八十五章「スイス観光の記」に

スイスの山には鳳尾松が多く、幹はみな直立している。それに落葉樹が混ざっている。秋の景色はきつとすばらしいであろう。スコットランドの山々はここから鳳尾松を移植したので、スイスの景色に似ているのである。

との記述を読んで面白く思った。丁度スイスに来ていたので、山の木立をいろいろと調べてみた。素人目にはスイスの山の木にはおおまかに二種類があった。枝の先端が、少女のおかっぱ頭のように内向きになっているもの（A）と、元氣よく跳ね上がったように見えるもの（B）の二つがあり、鳥の尾を思わせるのは（B）であらうと結論付けをして、写真だけ撮って帰ってきた。スイス旅行の翌年、我々はスコットランドにかけた。そこで話はスコットランドになる。

第二卷第三十二章「ハイランド観光の旅」によると岩倉使節団の一行は一八七二年一〇月一日にエディンバラからダンケルド村まで行つてバーナム・ホテルに泊まる。あいかわらずさまじい強行軍だ。

翌一六日、早朝からデューク・オブ・アソールの庭園にでかける。ここから久米の恍惚感一杯の文章が続いたあと、一本の巨大な「鳳尾松」との出会いがある。

教会を出ると二、三本の巨木が蔭をまじえて茂っており、みな鬱蒼とした古木である。中でもひと株の「鳳尾松」は一七三八年にスイスの山の中からはじめてこの地に移植したものであって、スコットランドにこの木を移した最初のものであるという。今はどの山にもこの木を植え、まるでスイスのような景色を見せている。

私の小学校時代の友人とそのつれあい計六人はダンケルドの村に遊びに行つてかなり疲れていたが、私には目的があった。

デューク・オブ・アソールの庭の門までたどり着いてホテルの方をみると鬱蒼とした森がある。標識に従つて十五分位歩くと目的地に着いた。そこにある一本の大きな木こそ使節団一行を驚かせたものであることは間違いない。高さは三十数メートル、根もとの太さは二メートルほどもあるかという巨木だ。

その前にある案内盤にこう書いてあった。

### Mother of Millions

私は二百五十年前ここに植えられた五本の「Larch」の苗木の一本でした。あとの四本のうち二本は五十年後に水車小屋の一部に残った二本も七十年後に船の建築に使われて、今は私だけが昔のブレア城のそばに立っています。今日までに私の家族として数百万の「Larch」が生まれ The Patent Larch と呼ばれています。

その上、年代順に一七三八年以降一九八五年までを五枚の図で示している。その中でも圧巻なのは一八七五年との説明付の写真である。使節団が訪れた正にその頃のものだ。

久米が見た木が目の前にある。これこそスコットランドへの旅行のハイライトだ。感動した。

かくして「久米邦武・追っかけの旅」スコットランドの巻の一日が終わった。

## センチメンタル・ジャーニー

福本 多佳子

未亡人になったばかりの友人を励まそうと、いま話題の北陸新幹線での金沢への旅を考えていた。それが急遽、友人の薦めで昔三人で訪れた沖縄へ飛ぶことになった。

機内放送で雨と聞いていた那覇空港に降り立つと、晴れ渡ったばかりの真つ青な南の空が待っていた。レンタカーの反応が遅いナビを「グズね」とけなしながら地図を併用し、係員から教えてもらった沖縄ソバ屋へと向かった。七十年代には食べたことも聞いたこともなかった。国際道路も変わっていた。「戦後すぐの日本ってこんな感じだったのかしら? 本土で見るアメリカ人の態度・雰囲気と全く違う」と思いながら歩いた記憶がある。返還前に一号線と呼んでいた主要道路も今は五十八号。コザの地名も消えている。当時は石垣と堀が残っていただけの首里城も屋内駐車場に車を停めエスカレーターで進むと、あの時代とは全く異次元の世界。これも京都や

鎌倉のように綺麗になっていると感心した。

夕方の五十八号を日航アリビラへと向かった。「シーズンオフさままね。この料金でこんなに良い部屋!」と梅雨時格安料金に感激の三人だった。

夜中の雨の痕跡が残る早朝のバルコニー。明るい陽光の下にエメラルド色のプールと青い海が目に入ってきた。ビーチでは青と白のストライプのパラソルの下に陣取り、五月の海に足を踏み入れた。ヒンヤリとした水に私一人安全エリアの境界線ロープへと泳ぎだした。水底の砂の動きを眺めたいと、漂っては泳ぎ、潜ってみる。次に上を向いて青空を眺める。スキューバやシュノーケリングとは違う、子供の頃の波の間に間にかんだ時間の再現だ。私にとっての沖縄旅行の目的の一つが完遂した。

午後は友人の第一希望、美ら海水族館へとドライブ。真夏の焼けつく暑さと違って心地良い。水族館は期待以上だった。一番の見ものは食事時のジンベイザメ。上からオキアミが投じられるとサメが水面と垂直になり、口のあたりには白い泡がたっている。彼らの食事がすむとエイや他の魚のための餌が水中に投入され、満腹のサメ



は水面を回遊している。まるで他人の食事の邪魔をしな  
いというマナーを心得ている感じだ。

三日目は辺野古見学を予定していたが、高速道路上で  
「万座毛」というサインが目に入った瞬間、ハンドルを万  
座ビーチ方向へときっていた。七十年代の定宿が万座ビ  
ーチのモーターで、白いコンクリートの平屋の建物だっ  
た。六つの目が追うのはモーターがあつた場所。砂浜に  
建つ結婚式用のチャペルが目に入り車から降りてみると、  
すぐそばの高台にお目当の建物が緑に塗り替えられて、  
従業員宿舎（？）になっていた。間違いない。まさしく  
この建物。「なつかしいー」同じ思い出を共有している  
メンバーと懐かしのビーチでのそぞろ歩きを楽しんだ。  
「ここからバスやタクシーでコザの町にランチに行っ  
たり、モーターの人が赤線見学に案内してくれたわね」  
アメリカ人用赤線地帯と日本人用という小路を車で通  
って見学させてくれた。暗い家の中や戸口には厚化粧し  
た女性たち。青や赤の電灯がわずかに彼女たちを照らし  
ていた。白黒映画の世界に入り込んだ気がした。女性た  
ちの無表情なまなざしが記憶の底に甦ってきた。

基地内レストランでの食事でも当時の沖縄旅行の大事な  
思い出の一つ。最終日の夕食は旧友が教えてくれた嘉手  
納にある海辺のアメリカン・ダイナーでと決めた。しか  
し電話をしてみるが通じない。ウェブサイト上にも同番  
号が記載されている。コンシエルジュもサイトで調べる  
だけで「クローズしたみたいですね」の一言。

諦める寸前にふと、英語で検索してみると英語サイト  
には違う番号が……。アメリカ人がでて番号を変えたた  
のこと。日本人もOKというので急ぎ向かった。旧友の  
話では九・一一以降セキュリティ面から部外者の基地  
内レストランでの食事は原則禁止。ここだけが例外とか。  
当時行った華やかなレストランとは違い、ここは米国人  
の家族連れが静かに食事を楽しむダイナーで、観光客が  
賑やかに席を占めるには向かない。私たちはTボーンス  
ステーキ、エビ、ピザと典型的なダイナーでの食事を注文  
した。隣の人がステーキにA1ソースを頼んでいるのも  
まさにアメリカン・ダイナー。勿論、ドル払いだった。  
思いがけず、現在の沖縄の中に七十年代の思い出を探  
し求める旅になった。

## 旅の終わり

斉藤 征雄

その頃、奈良に住む母親が介護施設にお世話になっていたので、私は母親を見舞うために、東京と奈良を頻繁に往復していた。

私の奈良行きは、大人の休日倶楽部が使える東京発8時03分発の「ひかり」に決めていた。自由席でも十分座れる。10時49分京都着、近鉄に乗り換えて最寄り駅の学園前で降り、駅前で腹ごしらえをしてバスで施設に向かうという旅程である。

母親は、徐々に認知症が進行していた。そのため、最初のうちは私の訪問にうれしい様子を見せていたが、そのうち息子の私の顔すら認識できなくなっていた。

不思議なもので昔の話をすると記憶が甦るらしい。私が、子供の頃の事や生まれ育った田舎の事などをとりとめもなく話題にすると、かすかに意思疎通することが出来た。それが見舞いに行く唯一の喜びだったがその喜び

は長くは続かない。母親は手の届かないところへ確実に往きつつあった。

あるとき帰りの「ひかり」の中で、高見順の「帰る旅」という詩を思い出していた。

「帰れるから 旅は楽しいのであり 旅の寂しさを楽しめるのも わが家にいつか戻れるからである（中略）この旅は自然へ帰る旅である 帰るところのある旅だから楽しくなくてはならないのだ（後略）。末期がんに侵された詩人の、氣力を振り絞った作品だ。

私の母親も、人生という旅の最期を旅しているのだと思つた。うすれ行く記憶の中でも、先に逝つた父親に会うことを楽しみにしているだろうか。是非最後まで少しでも楽しい気持ちを持ち続けてほしいと願つた。

東北で大震災があつた年の夏に、私の母親は九十七歳の天寿を全うした。

\* \* \*

昨年、まだ十一月も初めというのに、その日の旭川空港は雪だった。羽田を飛び発つとき、天候次第では新千歳に行き先を変更するという条件付き運行とのアナウンス

スがあった。無事旭川に降りたが、一面の銀世界。

三日前に、旭川に住む友人が亡くなったとの知らせを受け取った。一年ほど前から、がんと闘っていたのだ。

友人とは京都での学生時代の同級生。学部は違ったが能のサークルで四年間共に活動し、同じ下宿の隣同士の部屋に住んだ仲だった。下宿はボロで彼の部屋との間の壁にはねずみ穴が開いていたが、彼が入れるコーヒーを私も一杯ご相伴するには便利な穴だった。そしてわれわれの部屋はいつもサークルのたまり場だった。

卒業後、彼は生まれ故郷の旭川へ帰って、家業の仕出し料理屋を継いだ。そして五十年。この間に会って飲んだのは三回だけだが、わが家には毎年暮れになると、彼から箱入りの高級イクラが送られてきた。手紙も電話もなく品物だけが送られてくるのが常だった。私が申し訳程度のお返しを送り、年賀状でお礼をいっても返事が来たためしがない。いつか顔を合わせた時には、俺が元氣でいる証拠だと思って受け取れ、といって笑っていた。わが家の娘たちも、子供の頃から楽しみにしていて、彼のことをイクラのおじさんと呼んでいる。

その彼が、死んだ。

お通夜まで時間があるので、ホテルからお寺まで歩くことにした。一時間ほどかかるという。暗くなりかけた街には、人通りも少ない。黙々と歩いた。ときどき雪が顔にあたってしずくとなった。

お寺に着くと、息子さんと彼にそっくりの娘さんから最期の様子を聞いた。奥様はすでに先立たれている。

翌日、葬儀に参列した後火葬場まで行った。遺族の方たちに混じって骨を拾いながら、つくづく人の命のはかなさを感じた。

\* \* \*

無常である。<sup>あした</sup>朝には紅顔ありて夕べには白骨となる身ではあるが、それにしても無常だ。

昔の人は、はかないこの世を旅寝の宿と言った。仮の宿りなのだ。この旅が、いつかは終わりを迎えるのは生きとし生けるものの定めなのである。その終わりは、ついでを待たず突然やって来る。

ならば、残された時間は限られているが、この旅を少しでも楽しく思い出深いものにしよう。

## サロン21 活動報告

二〇一五年も左記のようなさまざまな時事あるいは歴史問題などについて、各回の担当者からのプレゼンテーション、それに引き続き参加者全員での討議という形で活発な議論を展開することができました。

新しい試みとしては、クラブ会員外の有識者にゲスト講師として参加していただくことを始めました。一月に元日銀、東銀ご勤務の大島陽一氏、七月には元三菱銀行上海支店長の有賀英樹氏にお越しいただき、新たな視点、得難い経験からの話題を提供願ひ、常とは一味違う緊張感の中で、新鮮で有意義な勉強をすることができました。二〇一六年も外部からの講師の参加もいただきながら、さまざまな角度からの勉強と討議を続けていきます。

二〇一五年の各月のテーマとプレゼンテーターは左記のとおりです。(敬称略)

一月 国際金融の現場に立つて 大島陽一  
二月 魅力あるJAPANを創る 西川武彦



|     |                        |      |
|-----|------------------------|------|
| 三月  | イスラム国について              | 横内則之 |
| 四月  | ピケティを読む                | 野瀬隆平 |
| 五月  | 安倍総理70年談話に向けて          | 横内則之 |
| 六月  | 世界の紛争地と地政学             | 大泉潤  |
| 七月  | 日中間の歴史認識の共有化に向けて       | 有賀英樹 |
| 九月  | 外務省の当局者から見た日米関係とメディア評価 | 下山健夫 |
| 十月  | これからどうなるアベノミクス         | 島海博  |
| 十一月 | 何でも喋ろう会                | 野瀬隆平 |
| 十二月 | 大久保利通の踏ん張り             | 大平忠  |
|     | (プロマネ 大平、森田)           |      |

# 自由テーマ



水彩 松浦 武弘

## どこが一番好きですか

塚田 實

私は、アメリカ、イギリス、中国と文化的・歴史的背景の異なる三つの地域で暮らしたことがある。

「どこが一番好きですか?」とよく聞かれた。

私の流儀として、働いているその地域が一番好きになるように心がけていたので、現役の時に住んでいるところが好きな地域だった。現役を退いた今、同じ質問を受けると少し考える。

アメリカは留学と駐在を合わせると計五年暮らした。

留学は、一九七六年から七八年までシカゴ郊外エバンストンにある、ノースウェスタン大学ビジネススクール（現、ケロッグスクール）で学んだ。私の人生で一番勉強した時期だと思うが、アメリカの自由闊達な雰囲気を感じた。家族で北米を貧乏旅行したことも良い思い出になっている。

一九八七年から九〇年までニューヨークに駐在した。

日本はバブル経済の絶頂期にあるときで、この時期日本を離れていたのは、ある意味で幸運だった。バブル経済の負の遺産からは遠かったからである。世界では、八九年にベルリンの壁が破壊され、冷戦構造が崩れた。政治的にはアメリカの一強時代に入ったが、経済的には日本の強さも際立っていた。世界経済の中心地での経験は、グローバル化への目を開かせてくれ、その後の会社人生の貴重な資産になった。

アメリカはその後何回も訪れた。基本的にはアメリカ人はオープンで明るく、誰でも受け入れてくれる雰囲気があった。実力次第で道は開けるとの夢があった。

二〇〇〇年から〇三年までロンドンに住んだ。仕事のテリトリーは、ロシアまでの欧州全域とアフリカだったので、いつも走り回っていた。欧州文化の多様性と深さはとても魅力的だった。バックingham宮殿やウインザー城でのイベントに招待され、ケンブリッジ大学ではエジンバラ公との会食にも呼んでいただいた。

欧州は音楽や絵画など芸術の宝庫でもあった。歴史の重みを肌で感じさせてくれる豊かさに溢れていた。

クリスマスの時期には、拠点のある欧州各地を訪れ、会社の経営方針や欧州戦略を説明した。活発な質疑応答や懇親会を通して、従業員との対話と交流を深めた。

欧州では、伝統を守りながら、多様な国民性の違いを超えて、一つになろうとする新しい息吹を感じた。

二〇〇五年から〇八年まで北京に駐在した。五千年の歴史を経て、ダイナミックな経済発展を遂げ、大国にのし上がろうとする中国での仕事は楽しかった。しかし、常に監視されているという息苦しさはあった。チベットのラサヤ、新疆ウイグル自治区のウルムチやトルファンなどへの旅も楽しんだ。

週末は一人で地下鉄に乗ってあちこち出かけた。すると二回に一回の割合で、白髪の私に若い女性から声がかかり、席を譲られる。中国人はマナーが悪いとよく言われるが、敬老精神はしっかりと生きている。日本ではまだ席を譲られたことはない。

住んでみると、旅行では味わえないその国の良さが実感できる。一番を選ぶのは難しい。

海外から日本に帰ってくるとき、空から地上を眺めていると、日本の素晴らしさにいつも感激する。豊かな自然、海に囲まれ山が迫っているのも、水は清く、緑に溢れている。南北に細長いので、自然の恵みも豊富だ。文化的な深みや匠の極みなど、世界に誇れる伝統が脈々と生きている。日本人は、日本の良さにもっと自信を持つてよい。

さて、「どこが一番好きですか」である。日本で生まれ育った私は、どうしても「日本」を外せない。

「日本は別として、次にどこが一番好きですか？」

現役を退いた今でも、やはり自分の住んだ三つの地域に甲乙は付けられない。世界には多様な伝統と文化が同じ時間軸を走っている。相互理解を深めれば深めるほど、尊敬の念は深まるはずだ。「青い地球」の住人は人類の幸福に向けて、助け合って生きて行きたい。

## 北日本文学賞

廣澤 重穂

二〇一五年初秋、ラグビー日本代表が南アフリカに勝利した。番狂わせがないと言われるラグビーだけに、奇跡としか言いようがない。

放送があったその夜、友人から電話が鳴った。

「おい、お前。見たか？ やったな、日本代表！」

あまりの感動に彼は、たまたま学生時代にラグビーをやっていた私に電話してきたのだった。

「ああ、もちろん見たさ。オレだつてテレビの前で両手を突き上げ、思わず万歳だ。試合が終わった後、もう涙がちよちょ切れて——」

お互い、しばらく電話口で興奮が続いた。

電話の切り際、冷静になった彼が、苦笑いを含んだ声でこう言ったのだ。

「ところでお前、もうすぐだな。新年会、あてにしているからな」

勿論それが何のことか、私にはすぐに分かった。

「あたぼうよ！」

この夏、友人らと居酒屋で、ウナギ肝と冷たいビールを前に暑氣払いをしていた。その際、私は、大いなる酒の肴をみんなに提供したのであった。

「ちよつと前、北日本文学賞に応募したからよ。賞金ゲットだぜ、賞金。発表は正月一日。楽しみにしている」

応募の前、当クラブの掌編小説勉強会に提出し、喧々譁々、阿鼻叫喚、叱咤激励の末に生まれた『北陸新幹線』を、北日本新聞主催の北日本文学賞に投稿したのだ。四百字詰め原稿用紙三十枚、勉強会とほぼ同じ枚数だ。純文学系の賞だけに、ちよつと違うかなと言いつつ、意を注意しながらも、ええ、ままよと応募したのであった。

「ああ。じゃあ新年会は、お前持ちだな」

「当然だろ。この店を借り切つてだな、パーツとやらうぜ、パーツと。何しろ百万円だからな」

鼻をしゃくり上げながら私は電話口で大口を叩いた。それなら読ませてみると、彼らは小説に興味を示さなかっただけに、誰も本気で聞いている奴はいない。



投稿した頃は自分でも冷静だった。しかし時間の経過とともにだんだん思い入れも強くなってくる。ひよっとしたら……。

まだラグビーW杯の感動が残る十二月中旬のことだ。北日本文学賞に関する情報をと、ネットで調べた。すでに一次、二次、三次、そして四次と、選考通過者一覧が掲載されている。

すぐに、最終選考である四次の結果を、身の程知らずにも勇んでクリックした。通過作品は二十七編。

激しく目を走らせる。

ない——そうだな、あのレベルでは。分かっている。後半部分は筆が足りなかったからなあ……。

冷静に、冷静にと自分に言い聞かせる。それなら、次は三次の欄を覗くべきか、それとも一次から順に追っていくべきか。

たのむ、今度こそあってくれ。

弱気になった私は、拝むようにして一次の選考者一覧をクリックした。九七九名中、通過者四〇一名。

あ、あった！——そうだろ、そうだろう。特に前半部分は、何度も何度も推敲したんだから。

東京都内在住の中に、投稿した『北陸新幹線』野間土門の文字が輝いている。急に期待感が膨らみ、謙虚さが影を潜めた。ひよっとしたら……。

二次を飛ばして三次通過者欄をクリックした。

ない！——やっぱりなあ。

もはや私の心はジェットコースターだ。期待と不安の中、せめて二次だけでも、とクリックする。

な、ない！——二次敗退かあ。

往生際が悪いことに、もう一度なめるように上から探してみた。やはりない。予選突破できず。

つくづく思う、人の心は不思議なものだ。宝くじならひよっとして、だが、交通事故なら「まさか」となる。宝くじの当選確率は交通事故より低いというのに——。

おかげで新年会もこの話題を肴に盛り上がれそう。簡単に起こらないからこそ「奇跡」なんだよな。思わず強がり口をついて出た。

ざ、残念！

## 睡眠時無呼吸症(SAS: sleep apnea syndrome)

中村 晃也

苦しい…。滝壺に飛び込んだ。懸命に手足をバタつかせ、水を掻くが水面が遠くなかなか浮上しない。このまま溺れ死んでしまうのか。ようやく水面に顔が出て、ハーハーと息をついたところで眼が覚める。

うるさい……。若い時から、登山やスキーなどの運動後に飲酒が重なると、同室のものが逃げ出すほどの凄まじい鼾。時々その轟音が一分近くも途切れて、呼吸が止まったのではないかと周囲のものが心配する。

タラタラ……。典型的な頻尿で、一晚に四、五回もトイレに起き、寝不足に悩まされる晩年。

こんな状態で、高血圧やコレステロール、糖尿病などの薬を服用していたが、三年前に心電図の異常から狭心症と診断され、カテーテルによる心臓の冠状動脈へのステント挿入の処置を受けた。

医師との面談で、心不全の直接の原因である各種の心臓病（心筋梗塞や狭心症、不整脈）や、脳卒中に繋がる生活習慣病（高血圧、高脂血症、糖尿病）の遠因のひとつに睡眠時無呼吸症（SAS）があることを知った。

高田馬場にある専門病院を紹介され、一昨年十二月にSASの影響を知るために、借用した簡易測定器によるテストを自宅で行った。結果は、無呼吸・低呼吸の頻度および血中酸素飽和度の低下頻度は、共に時間当たり四十八回で精密検査が必要とのことであった。

ちなみに無呼吸・低呼吸とは状況が十秒以上続く症状を指すとのこと。患者の歯並びや顎、咽喉の形態と肥満が主因でわが国では対象は約三百万人になるという。自慢ではないが私の適応性はピッタリだ。

明けて二〇一四年二月に検査入院した。鼻孔にプラスチック製のカニューラーを付け、胸に心電計、脇に眼電計、頭頂に脳波計の端子を装着し、両上下肢、顎など計

十二本のコードがぶら下がった。睡眠中にずれないように頭からネットをかぶされ、身動きできない状態での一晚中の検査だった。睡眠中の呼吸の深さや無呼吸・低呼吸の回数、寝返りの回数、眼球の動き、四肢の動きなどが全てSDカードに記録された。

結果は、無呼吸とそれに起因する覚醒の頻度は、時間当たり六十五回で、著しい睡眠の分断が観察され、重度の睡眠時無呼吸症と診断された。ただちにCPAP治療が必要とのことであった。

#### (continuous positive airway pressure)

この治療法は、睡眠中に、微小圧力の空気をプラスチック製のマスクを通じて鼻腔に送り、喉の柔らかい組織が内側に引き込まれ、鼾や無呼吸になるのを防ぐもので、フイリップ社製の装置を使用する。

四月からのCPAP装着の結果は無呼吸・低呼吸指数が六十五回から九回へ、無呼吸最大持続時間が七十七秒から四十三秒に、睡眠中の無呼吸・低呼吸時間が八十%から六%にそれぞれ改善された。特筆すべきは、トイレ

に起きる回数が一晚一回に減ったことである。

睡眠時に肺に十分空気が入らないと、胸郭が陰圧になり、これを感じた心臓が排尿を促進するホルモンを分泌するそうで、CPAPによる微小圧空気の補充でその作用が抑制される由。こうした事例は多いという。

毎月一回、装置から取り出したSDカードを持参して医師の診察を受ける。装置のレンタル費用込みの診察料は健康保険の一割負担で千五百円である。この装置は現在全国で三、四十万台使用されているのだそうだ。

この治療を始めてからは、溺れる夢は見えない。睡眠がよくとれるせいか、朝の目覚めがよくなり、気のせいか声の出がスムーズになった。自然に鼻歌が出て、カラオケで歌いたい気持ちが強くなった。

ただ、どうした訳か、物忘れの頻度は増加の一途を辿っている。医師によれば、それはSASのせいではないと言うのだが、はて？

## にぎり寿司

松浦 武弘

私は昭和五七（一九八二）年から昭和五九（一九八四）年迄コンゴ共和国（当時はザイル）キンシャサに伊藤忠商事（株）所長として駐在した。海外駐在員規定で一番海外給与の高い地域がキンシャサだったので、要は一番の僻地ということである。

一九六〇年代アフリカの旧植民地は殆どが独立を果たしたが、旧宗主国との経済的関係は緊密であり、ヨーロッパの旧宗主国から旧植民地への直行便が運航されていた。私のキンシャサ駐在時には、ブラッセル／キンシャサはベルギー航空を利用するのが一番便利であり、深夜にブラッセルを出発しキンシャサに翌日の朝到着する便であった。

ブラッセルには日本料理店は数軒あったが、必ず行く寿司屋が「三辰」であり、シーバス・リーガルをキープし、毎回閉店まで飲み続けるのが常であった。

千葉県、千倉の漁師出身の親方「優さん」とはすぐに懇意になり、「三辰」閉店後二人でブラッセルの深夜街を遅くまで飲み歩くほどの間柄となった。優さんから寿司の握り方の特訓を受け、遅くなり客が少なくなると、私がカウンターに立つこともあった。

私は「大葉」「とろろ芋」「特上トロ」など、日本品の味を優さんの為に「三辰」へ持ち込んだ。優さんは寿司ネタのマグロの赤身、トロ、イカ、たこ等は「さく」にして保存していたが、私はそれ等を原価で譲って貰い、冷凍でキンシャサに持ち込んだ。毎回十万円程度を支払っていたので、キンシャサの伊藤忠の社宅では、常に「刺身」が食えると言われていた。

一時帰国の折、男子厨房に入らずの私が「握り寿司」を披露したので家族は驚き、爾来、家では握り寿司は店で食べるものではなく、常に私が握るものとなった。家族以外で私の握り寿司を披露したのは、岳父夫妻、長女夫婦、長男夫婦（婚約当時）、妻の一番上の姉夫婦（奥村信義夫婦）のみである。

奥村信義君は大阪の大手前高校の柔道部で、三年の時

には奥村が大将で小生が副将を務めた。東大で機械工学を専攻し、三十七年度の柔道部キャプテンを務め、富士製鉄(株)に就職した。大酒を飲む私とは正反對に、健康に留意し、よく歩き、見習う点の多い義兄であったが、昨年未他界した。妻は四人姉妹の三女で、奥村君夫妻が我々の実質仲人であった。新日鉄退職後、小松との合弁会社の社長をつとめ金沢に移住した。最後に一緒に泊まった由緒ある「石屋」では風呂で流し合い、遅くまで話し合っ

って過ごしたことが昨日の様である。

長男の息子、稜の誕生は平成二五年だったが、その頃には初孫の朱里は一段と成長したように思われた。

朱里三才の誕生日直後の平成二五年十一月、朱里と夫婦三人だけの自由行動を実施した。地下鉄で銀座に出て、早い昼食を三笠会館のイタリアンで済ませたが、妻の用意した誕生祝いの数字積み木で遊びながらの昼食は、時間を忘れさせた。食後、朱里は、誕生祝いに、教文館での追加二冊の絵本(「ぐりとぐら」)を加えた小さな袋を肩にかけ、得意然と銀ブラを楽しんだ。

母親は子供を身籠もった時から子供の成長を肌で感じ、

母親としての情感に目覚めると推察するが、父親は子供の誕生後に自覚、情感に目覚める。

妻の幼児期の孫達への対応を見ると、極めて自然で適切であるが、私のぎこちない対応と比較すれば、その違いは歴然としている。孫達への対応に関しても男子と女子とでは異なるが、爺さんは小学校四年生になり、初めて真価を発揮すると確信していた。

妻は数年前から、朱里に「母」のへた取りを手伝わせ、昨年十一月には「サモサ」作りを手伝わせた。

私は今年の元旦、朱里にお寿司を握ると約束し、朱里は「お寿司を運ぶ」手伝いをするのと張り切り、稜はお客様と決めている。

朱里が小学校四年生にならないと、私の出番が無いと諦めていたが、早い出番が回ってきたのである。「にぎり寿司」さまである。



## 研究支援

吉 寄 清 己

関西ペイント(株)を定年退職した私は、公益財団法人、日本シルバーボランティアズに塗料専門家として登録、北京大学に床材の電子線硬化、化学工業部黎明化工研究院に合成樹脂研究、その他各地の塗料工場に十五年間、妻を同伴して派遣され、中国の人々と交流できたのは幸せであった。親の介護、子供の教育、日本も大陸も同じ生活上の悩みを話し合った。

さて、私は八十歳になったとき、年とともに友人は他界して、だんだん一人ぼっちになってきた。認知症にならないためにも、岐阜大学・応用生物の先生方の研究にふれてみたくなった。平成十九年度を第一回に、年間百乃至百五十万円を寄付、研究内容を勉強させていただいている。研究テーマは、先生方が応募されたなかから、教授会が毎年二件を選定している。

政府はわが国の温暖化ガスの排出を二〇三〇年時点に、二〇一三年比二十六パーセント削減という目標を世界に公約している。そうしたことを背景に、第九回平成二十七年度的については、CO<sub>2</sub>を出さない、中村准教授の稲わらを原料とした微生物発電の研究はおもしろく、七十五万円を当てる。他の七十五万円は、世界の人口増、中国、インドの生活レベル向上による肉類消費の増加、食料飼料の不足懸念に対し、中川教授のメタノール由来微生物飼料、蛋白質生産の開発に当てる。

ところで、私は現在九十歳。車椅子の助けをかりて歩行し、老人ホームに住む。これまでのように株式市場で現金を調達する作業は重荷になっている。そこで、関西ペイント五万株を岐阜大学に負担付遺贈し、配当金を研究費に当てる方法に、平成二十八年度から変えたいと思っている。吉寄清己研究支援基金という。

株を寄付することを思いついたのは、相続税を支払う場合、お金が外部に流出してしまう、それよりも、その分を株にして国立学校法人に寄附した方が、私の意にそ

うお金の使い方ができると考えたからである。

今まで岐阜大学には現金を寄付してきたが、これらは大学指定の銀行に振り込めばよかった。しかし株の場合は、証券会社が預かるので、大学は証券会社に口座をつくる必要がある。

関西ペイント五万株の寄付申込は平成二十七年七月に行なった。その後株式市場は大きく変動し、関西ペイントの株価は、高値二二五〇円、安値一六〇〇円と荒れている。大学は株を保持するのみで運用はしない。したがって株価の変動は問題ではなく、それよりも二十七年度上期の配当は九円五十銭、前期より二円増配になったのはよかった。

先生方は学問の自由に立ち、ご自身の専門分野で自主的に研究テーマを決め活躍している。研究テーマに市民である個人の寄付金を使う場合、テーマは少し社会化したものになってもよいと私は思っている。国、国民は国立大学法人の応用生物に、何を研究してもらいたいのか、国の方針、国民の要望、マスコミの関心事など外部の意

見をとり上げねばならない。原子力発電はもういらなくと言う大衆意見に対して、バイオエネルギーの研究はかせない。

資源の乏しいわが国で、森林は世界と競争できる分野である。建築に用いる木材、バイオマス発電に使う木材燃料、燃料にならない木屑、草の茎はアルコール発酵の原料になる。石炭、石油に替わる将来の化学製品のカーボンサプライヤーとして注目している。大佛殿、大寺院は木材を使う。木材は昔から石、鉄と同じように強い材料と認められている。その強さは植物セニイから来ている。木材のパルプをナノレベルまで細かく解きほぐして作るセルロースナノファイバ(CNF)。幅は最小三〜四ナノ(ナノは十億分の一)である。自動車の樹脂部品と混ぜて強度を高める用途がある。石油を原材料とする炭素セニイが現在利用されているが、CNFの量産が進めば割安に、一兆円のマーケット誕生と期待されている。バイオの研究は医薬を含めテーマは多く有望である。さて、先生方はどのような研究テーマを選定してくれるのだろうか。

## 手作り山小屋奮闘記

木村 敏美

標高四百三十メートルの小高い山の上に小さな山小屋が完成したのは、平成十五年の四月だった。夫が定年を迎えて一年後の事である。第二の人生は農業をしたいと夫は言い、畑用の土地を捜し景色のよさで四十坪購入した。野菜作りは素人なので夫は農業学校に通い始めた。その時知り合った人が脱サラをし、後継者がいなくなつた果樹園三千坪を買つて畑にし、そこに山小屋を自分で作り住んでいた。それを見た夫は、休憩や道具入れとしての山小屋を作りたくなったようだ。

いろんな山小屋を見て廻り、組立式のフィンランド製ログハウスで作る事にした。壁は丸太ではなく五センチ厚の平板。軽く安価で、窓やドア、屋根も付いている。基礎だけはプロに頼み、夫は会社の人に声をかけ、棟上げの日は数人、朝早くから手伝いに来てもらった。皆サ

ラリーマンで素人である。先ずは壁になる板の切込み部を合わせて積み上げ、屋根迄の高さにする。最初は時間がかかったが、午後になると要領が良くなり作業が早くなった。声をかけ合い、汗を流しながら学習効果を發揮、外壁は一日で出来上がり、二日目には屋根も付いた。あの日の達成感を、手伝いに来た一人が「あんな楽しい日はなかった。その日の内に成果が出て」とサラリーマン生活では味わえない事だと言っていた。これで残った材料を中に入れて雨風を凌げる。

後は二人だけで、自宅から車で片道四十分の道を弁当持参で通い、野菜作りをしながら仕上げていった。苦勞したのが断熱材。山の上は気温が低いので屋根と床に断熱材を入れる事になり、予定には無かった二重構造にした。屋根と床の材料と断熱材を新しく買い、試行錯誤し、作るのに二倍の労力と時間がかかったが、お陰で夏涼しく冬は暖かい。又、他にも解らない事や難しい事が出てきて、ほんとに出来上がるのか不安が何度もよぎった。しかし壁を切りぬき窓をつけると、外の木々が美しく見



え、力が湧き出て、新しいアイデアで大きなサッシの窓を付けたり、風呂を星の見える場所に変えたり、すったもんだしたりしながらも、俄然楽しくなってきた。壁の塗装は私の仕事だった。外側が出来ると中は掘り炬燵、食器棚、ベッド、そしてベランダまで作った。

近くの山道を車で通る人達が手作り作業を見て興味が沸いたのか立ち寄った。仕事で断熱材を使っているのと持ってきてくれた人、土台柱の切込み、穴開けを見かねて手伝ってくれた大工さん、畑があまりにも痩せているので馬糞を持って来てくれた人、畑用の藁束と椎茸栽培の原木を持って来てくれた幼友達、手作りと知って手伝いに来た友人達等いろんな人達とふれあいながら、十二坪の山小屋は何とか出来上がった。

完成後、手伝いに来た人達を招待し、宴をして壁に名前を書いてもらった。ほんとに手伝った人、宴だけ参加の人と別々にして、皆大笑いした。

暫くして、某テレビ局の「水と緑の物語」という番組で福岡の名水をエコカーで尋ねる番組があり、丁度山小

屋近くで電気が切れたので立ち寄り、成り行きで近くにある湧水まで案内した。汲んできた水でコーヒーを出す、それらが全部撮影されていた。もともと孫達に、有機肥料で作った無農薬野菜を安心して食べさせたい思いから始まった第二の人生である。番組の趣旨に合い、完成を待っていたようなタイミングと、私達が居あわせた偶然は奇跡に思える。殆どカット無しで、ぶっつけ本番のままテレビ放映され、いろんな人から電話がかかってきた。

あれから十二年経ったが、台風の直撃にもめげず健在だ。その後六十坪買い増しし、週に二度程畑の手入れの為通い、時々泊っている。訪れた人は数えきれない。ある人との出会いがきっかけとなり、四苦八苦して建てた山小屋は、思いがけず多くの人達とのふれあいを呼び、想定外の楽しさを運んでくれる。



## 学ばなくてよいのか

野瀬 隆平

冷酒をよく呑む。

料理にもよるが、好みの銘柄に「上善如水」がある。  
じょうぜんすいのい  
越後湯沢の酒だ。名前の如く、味は淡麗で癖がなく、確かに水のようにだともいえる。

「澄み切った水のようにサラサラで、スルスルすおな飲みやすさ」と化粧箱に謳っている。酒の名前もこんなところから来ているのだろう。

しかし、「上善如水」は、この酒の味を表わすために作られたものではない。今から二千五百年も前の古代中国の人物、老子の言葉である。紙がまだ発明される前で、竹を柵のように削ったものに書く時代だ。

「上善若水」とあり、ごとしの字は違いが同じ意味である。最上の「善」は水のようなものだ。水はあらゆるものに利益をもたらし、しかも争わない。みんなが嫌うような悪い所にもいる。さらに、水ほど柔弱なものはないけれど、固くて強いものを攻めたとき、これに勝るものはない、と説いている。

「成るほど」と納得する。しかし、老子が説いていることで、今日の常識からいって、にわかには領けないものもある。

例えば、「学を絶てば憂い無し」だ。色々と学んで知恵を付けると、それだけ憂うことも多くなるので、いつそのこと学ぶのを止めてしまえ、というのだ。

これまで当然の事として疑いもしなかったことを否定される。

老子と共に「老荘思想」と称される莊子も同じような主旨のことを言っている。

「不測に立ちて無有に遊ぶ」である。

予測がつかない先のことをあれこれと思い悩まずに、既存の価値観にとらわれず、自然体で過ごすべし、の意であろう。

「無有」の意味が少々分かりにくいのが、莊子の他の言説から考えて、次のように解釈される。

「有があつてこそ無があり、無があつてこそ有がある

というように、すべてのものは相対的な関係で存在する。言い換えれば、人間の価値観は相対的なもので、絶対的なものではない。そんなことにとらわれるな」

0か1しかないとデジタルで合理的に割り切り、白か黒かと単純に決めたがる今の世の中、その間に限りなく幅の広いグレーゾーンがあることに気づかせてくれる表現だ。

また、「無為自然」という言葉もある。何も努力をしなくてよいと言っているのではない。精一杯努力してその結果は天に任せ、受け入れるという意味に捉えることが出来る。要するに、すべてが人間の思うようにはならないのであるから、自然体でゆくべし、と教えているのである。

現代に生きる我々は、気がかりな問題をたくさん抱えている。一つ一つ気にしていたら、ストレスが溜まり心休まることがない。どうすれば、心の平穏を保てるのか。一つの解を示唆しているのではないか。

では、老荘思想では、生死の問題をどのように捉えて

いるのだろうか。莊子は次のような寓話を語っている。

ある国のお姫様が他国の王のところに送られた。最初は涙を流して嘆き悲しんでいたが、王のもとで贅沢な暮らしをするうちに、後になって何故嘆き悲しんでいたのかを悔いた、という話である。

これは、幼いころ故郷を離れる時には嘆き悲しんだのに、いつのまにか忘れて今いる所の方が良いと思うようになるのと同じ。生きている時にそれを喜び、死を憎むのは、単なる惑いかも知れないと、言っているのだ。

老子や莊子の考えを紐解くと、今まで絶対と思っていた価値観が覆されることが多く、目から鱗が落ちるように別の世界が開ける。厳しいこの世を生きて行くのに、少しは心穏やかでいられる。老荘の思想を学んだお蔭である。

いや、待てよ。「学ばなくてもよい」というのも教えにあった。これも、単純には黒白をつけられないことの一つなのだろう。

## 崖の下の家で

濱田 優ゆか

赤坂は坂の多い街である。

急な坂もあれば階段の坂もある。ぼくが幼児期に住んでいたのは、当時の表記で丹後町、今の赤坂四丁目である。家は急な坂の途中の棚地に建てられた六軒の借家の一つで、崖の上には小さなお稲荷様があった。

周りは大きな屋敷で囲まれ、緑深い台地を成している。地元対応のためか、子どもを広い庭に入れてくれる屋敷もある。そこで夏は蜻蛉や蟬取り、秋は団栗や椎の実拾いに興じられ、都会っ子にしては自然に恵まれていた。

ぼくが幼稚園児の昭和十九年春先。その頃の記憶のあらかたは、小さな断片しか残っていないが、一つだけその顛末を覚えている事件がある。

ぼくの家には、二階から崖に向かって張り出した物干し台があった。崖と物干しの間は二mほど離れているけれど、崖の上に叢生している灌木の枝が手を伸ばせば届

きそうなところまで垂れていた。若葉は未だなのに無数の鮮やかな黄色い花をつけていたからたぶんレンギョウだろう。「手摺りから体を乗り出してはいけません」と、日ごろ母にくどく言われていたので、ぼくはその枝を手折りたい気持を懸命に抑えていた。

その日、父と二人の姉は会社と学校に行き、母は坂の上の畑に出かけていた。食糧不足を補うために、母は慣れない農作業をはじめたのである。ぼくは幼稚園から帰ったら、卓袱台ちゃぶだいの上のおやつを食べて大人しく留守番をするように、とその朝言われた。

チャンス到来だ。おやつを食べるのもそこそこに、物干しに出て手を伸ばしてみた。が、もう少しのところでは咲く枝に届かない。諦めるか。いや、ちょっと乗り出すだけで届くの……。

結局、黄花の誘惑に負け、つま先立ちをして手摺りの上から体を伸ばして枝をつかまえた。なんだ簡単だ、と思つたのは一瞬のこと、生木の枝は粘つくくらい引いても揺すつても折れない。はじめは恐る恐るだつたのに、つい夢中になって大きく乗り出し、掴んだ枝を、えいっ！

と強く引つ張る。と、ぼくの体の方が引き摺られ、物干しから転げ落ちてしまった。

軒下と崖下の間はコンクリート打ち。そこに幼児が高さ四mもある二階から落ちたのだから、命にかかわる。そうでなくても打撲や骨折などの大怪我はまず免れない。落ちた瞬間、ぼくは蹲<sup>つまた</sup>ったまま動けなかった。あまりのショックに茫然としていたのだ。

痛みは徐々にやってきた。擦傷から血も出ている。だが、大怪我ではないようだ。後講釈だが、枝を握ったまま落ちる途中、崖にぶつかりもんどりうって落ちたのが幸いしたらしい。日陰の崖は厚く苔むして弾力性があったのだ。

隣の小母さんが激しい物音と悲鳴を聞いて窓を開けると、ぼくが泣き声も上げないでしゃがみこんでいる。慌てて母を呼びに走った。

やがて、坂の上から忙しげな人声と足音が聞こえてきた。近所の小母さんたちに伴われて母が戻ってきたのだ。母は大急ぎで駆けつけるや、ぼくを抱き起こした。そして、傷や身体の具合を調べ、たいした怪我はしていない

と分かると、態度を一変させて思い切りぼくの頬を平手打ちした。思ってもみなかった母の仕打ちである。

しばしの間をおいて、ぼくは堰を切ったように大泣きをしながら母にむしゃぶりついた。今度は母も泣きながらぼくをひしと抱きしめる。

母は、ぼくが大声で泣いているに違いないと思ったのに、お稲荷様の所まで来ても静かなので最悪の事態を覚悟した、という。一刻も早く様子を確かめたい。お稲荷様に必死にお祈りするとともに、いつそ足くらいは折れても崖を飛び降りて……、と本気で思った。それで、命に別状ないと分かった瞬間、ホッとすると同時にわれを忘れて手を上げてしまった、と後で照れながら話してくれた。

ぼくは子ども心に、自分が悪いことをしたのだから我慢しなければ、と考え、泣きたい気持ちを必死にこらえていた。それなのに……と訴えたものの、母に張られたとき実際に感じたのは快い痛さだった。

あの時、母は心底真剣に心配していた。真剣さゆえの、なりふり構わない振る舞いは、百の言葉より心に沁みだ。

## 『あさが来た』

### 広岡浅子と大同生命

上原 利夫

NHKテレビの朝ドラ『あさが来た』のストーリーは幕末から始まる。ヒロインは「広岡浅子」（一八四九—一九一九）がモデルである。私が彼女に興味を抱いたのは、私が子供時代によく通った齒科医が彼女の関わった大同生命ビル二階で開業していたこと、肥後橋（大阪北浜に隣接）の南詰に建つ、そのビルのデザインが華麗かつ重厚で印象深かったこと、大同生命の出原社長が父の学友であったこと、私が就職した会社の本店が土佐堀川に沿った新住友ビルにあり、東京本社へ転勤するまで一七年間をそこで勤務したこと、などの縁である。

広岡浅子は京都の三井家に生まれ、大阪の豪商、加島屋に嫁いだ。この時の加島屋当主は八代目であったが、跡を継いだ九代目は浅子の夫、信五郎の弟、広岡久右衛門正秋だった。浅子は衰退する両替商を支えるために北

九州に炭鉱を買い、石炭採掘事業を手掛けた。広岡家では、浅子の予てより念願の加島銀行を一八八八年（明治二十一年）に創立し、久右衛門正秋が初代頭取に就任した。さらに、一九〇二年（明治三十五年）に大同生命が創設されると、正秋は初代社長に就任した。

因みに、二代目社長は一九〇九年（明治四二年）に広岡恵三（広岡浅子の娘婿）が就任、一九四二年（昭和十七年）相談役に就任するまで、社長を三三年続けた。

大同生命の事業の流れを観るため、『大同生命 一〇〇年の挑戦と創造』（二〇〇三年発行）を紐解くと、創業の背後には、広岡浅子の思想が流れているのが分る。加島屋の貸金業が大名から回収がでず衰退したとき、核となった加島屋の信用をバックに炭鉱を成功させたのは嫁の浅子の一念であった。生命保険三会社を合併させ新社名を「小異を捨てて大同につく」方針を込めて「大同生命」とした。合併後の体制づくりも、社是として「堅実経営」「加入者本位」を掲げて特色ある商品を開発している。戦後、生損保をセットにしたのも一例である。

創業二十数年を経て、一九二五年に本社ビルを建てた。場所は肥後橋南詰の加島屋本宅の跡地、九階建て延床面積約一万四千平方米、建築スタイルはネオ・ゴシック様式、外壁や内装の建築材料はアメリカから輸入され、商都大阪のランドマークとなった。設計者はアメリカ出身のヴォーリス（広岡恵三社長の実妹の夫）であった。

浅子の死後の竣工だが、浅子の経営路線を歩んでいる。

浅子の葬儀は東京と大阪で二度行われ、合わせて二〇〇

〇人以上の参列があった。

この旧本社ビルは老朽化のため一九九〇年に取り壊されたが、デザインイメージを継承した新本社ビルは、一九九三年に竣工した。建物は地上一九階・地下三階建て、高さは旧ビルの二・九倍の八八・八米、延床面積は約二万七千平方米で旧ビルの約二倍を確保した。

大同生命にとって大阪中心部に回帰することは、発展の大きなきっかけになった。

女性実業家、広岡浅子が、大阪の梅花女学校の校長を務めていた成瀬仁蔵から女子大学設立の理念を説かれた

とき、その情熱に共感し、時の総理大臣伊藤博文を賛同者にして、大隈重信、渋沢栄一ら政財界の実力者を味方に付け寄付を募った。浅子の実家三井家の人脈も活用し、三井家から東京・目白の土地五五〇〇坪を学校建設用に寄付を取り付けた。準備に七年かかったが、一九〇一年に日本女子大学が設立された。初代校長は成瀬仁蔵、第三代校長を渋沢栄一が勤めた。

また広岡浅子は、大阪の経済基盤を強くするための施策を講じる五代友厚を事業の恩人と仰ぎ、相談をしていた。五代は若者の商業教育のため一八八〇年（明治一三年）大阪商業講習所を設立した。後に大阪商業学校に改称され、一九〇一年に大阪市立高等商業学校になった。

そして一九二八年（昭和三年）に旧制大阪商科大学を設立した。戦後、新制大阪市立大学が発足し、昨年は創立一三五年を迎えた。財界でも五代は大阪商工会議所、大阪株式取引所を設立した。東の渋沢、西の五代といわれる所以であり、広岡浅子も高い立場に立つ女性を育てる機関を設け、社会的貢献を志したのである。

## 桜への思い入れ

藤原 道夫

桜の花に惹かれ始めたのは、第一の現役生活のゴールラインが見えてきた二十年ほど前になろうか。それまでは通りがかりに桜を見上げるくらいで、特別に関心を抱いていなかった。それが浅川実験林（現多摩森林科学園サクラ保存林）にたまたま出かけ、様々な美しい桜花を見て一転した。以後桜の咲く時季になると天候に気を揉み、行く先を決めるために心を碎き、何かに取り付かれたように桜見物に精を出すようになった。全国各地を巡り、また固有名詞の付く桜、あるいは珍しい品種にも惹かれていった。同時に桜に関する詩歌、読み物、絵画にも関心が拡がっていった。平成二十六年十一月に、気に入った品種を中心に『桜十景』をまとめてみた。以下にその中で取り挙げた項目を記す。

①エドヒガン（老木）、②枝垂桜（各地）、③白妙（新宿御苑など）、④白山大手鞠（多摩森林科学園、八王子市）、

⑤御車返し（同上など）、⑥平野撫子（平野神社、京都市）、⑦鎌足桜（造幣局「桜の通り抜け」、大阪市）、⑧松前早咲（松前公園、北海道松前町）、⑨奈良の八重桜（奈良市内）、⑩ヤマザクラ（吉野山など）。染井吉野は番外に。これらの品種の特性、見ることでできる場所などを記載するとともに、いい条件の元で満開の桜に出逢う難しさ、原種保存法としてのクローン木の育成、桜の命名の曖昧さなどについても言及した。

例年時季が来ると、桜を讃えた詩歌などを読みながら桜見物の楽しみを増幅させる。以下に三首の和歌と一篇の詩を挙げ、個人的な桜への思い入れを述べてみたい。

一．青丹よしならのみやこは咲く花のにほふが如く

今盛りなり（小野老『万葉集』巻三）

当時の奈良の都ののどかな情景が目につかぶ。ここで詠われた花は梅である可能性も否定できないが、華やかさといい、季節感といい、桜（ヤマザクラ）が相応しい。「にほふがごとく」に、色が照り映えて美しく見える様が表現されている。



二、行き暮れて木の下陰を宿とせば花や今宵の主

ならまし（平忠度『平家物語』巻九「忠度最期」）

一ノ谷の合戦で討たれた忠度の簞（えびら）に結ばれた短冊に書かれていた一首。忠度と記名されていた。都落ちの際に俊成に預けた和歌の内一首が『千載集』に「読みびと知らず」と載せられたことを意識し、後の物語作者が名を明記した、という説もある。私はこの歌を次のように解釈する。今日もあちこち回って花見を楽しんだ。気が付くともう日が暮れてしまったではないか。今夜はこの桜木の下で過ごすとしよう。そうすれば花が今宵の宴の主となってくれるのだ。忠度はこの歌が気に入る、短冊に書き留めて敗戦の色濃い戦場に携えて行ったのだ。忠度の偏に桜を愛でる心優しさが感じられる。

同時代に生きた西行もこよなく桜を愛し、多くの有名な歌を残した。だが私は何故か忠度の歌に惹かれる。

三、清水へ祇園をよぎる桜月夜こよひ逢ふ人みな

うつくしき（与謝野晶子『みだれ髪』）

祇園界隈の夜桜は特別に情趣深い。夜桜は人の心を高

揚させる。花の美しさを表現せずとも、それは月明かりとかがり火に浮き上がる夜桜を見物する人々の表情から読み取れる。この歌人の目線がすばらしい。

四、あわれ花びらながれ／おみなごに花びらながれ／

おみなごしめやかに語らいあゆみ／うらかな足音  
空にながれ／をりふしに瞳をあけて／翳りなきみす  
の春をすぎゆくなり／……

（三好達治『測量船』『薨のうえ』）

この詩を読めば、誰しも幼い時に穏やかな陽射しの元で見た桜を思い浮かべるだろう。舞い散る花びらの背景に満開の桜木があり、古寺の雰囲気漂う。女の子（小学五、六年頃か）が話しながらそこを通り過ぎ行く。何ともものびやかで健康的な情景ではないか。

桜が終わる頃になると、それまでに撮った花の写真を見直し、図鑑を眺め、詩歌を読みながら、出会った花々を思い出しては感慨を新たにしている。そうしながら、心は早くも来る年の桜花へと向かっている。

## ランチョン・ミーティング

金京 法一

ニューヨークの冬は寒い。昼間でも摂氏氷点下十度などざらである。当然のことながら昼食をどこで取るか問題になる。つまり外食をするには防寒対策をしなければならぬからだ。つつい出前のサンドイッチを取ることも多い。ベーコン・レタス・チーズ・サンドイッチなど懐かしい。

しかしそうとばかりは言っておれないことが起こる。取引先との昼食、いわゆるランチョン・ミーティングである。厚手の外套にマフラーで出かける。外に出ると一度に寒気が襲ってくる。数ブロック歩いてはビルに飛び込む。暖気を取るためである。そんなことをやって目的のレストランに飛び込む。そこは暖房が利いていて別世界である。

挨拶もそこそこに酒の注文である。一九六〇年代、ワ

インはややフォーマルな食事の飲み物で、カジュアルな食事ではカクテルが一般的であった。ドライ・マティーニの注文が多く、甘口のマンハッタンや二日酔に効くと言われたブラデー・マリーなどが定番であった。

一口飲んでやつと人心地がつき会話が始まる。仕事のこと、会社のこと、上役のことなど他愛のない会話が弾む。緊張の連続である大都会のオフィス生活で、ランチョン・ミーティングは最高の息抜きであった。秘書も心得たもので、ボスの帰りが遅い時、取引先からの電話に、ボスはランチョン・ミーティングですと答えているし取引先もそれで納得する。

レストランも飲み屋兼業のところが多く、正面に大きなバーを構えている。客が入ってくるとまずは飲み物の注文を取りに来る。レストランにとって酒は採算が良さらしい。冬場は寒さのせいもあり酒類の注文は結構多いが、夏場は必ずしもそうではないらしい。夏場の冷房がようやく普及し始めた頃で、酒の注文を増やすため冷房をうんと利かしているなどと、もっともらしい説が流布

されたりもした。

勿論こういったレストランでの会食は取引先の担当者など気の置けない相手の場合であって、ややフォーマルな接待ともなれば、白いテーブルクロスとナプキンといった一流のレストランを選ぶ。取引先のアメリカ人の幹部連中は会社負担でプライベート・クラブのメンバーになっ

ていて、そこで接待をやっていた。カクテルを飲むとは言うものの、勤務時間中に変わりはない。ほとんどの人はカクテル一杯で、あとはステーキなどを食べ、ほどほどにオフィスに戻ってゆくが、中には豪のものもある。良く利用したレストランで、いつも同じ席に座っている巨漢がいた。ウェイターにそれとなく聞いてみると、彼は知る人ぞ知る酒豪で、毎日昼過ぎにやってくる。そして四時ごろまでちびちびやりながら粘っているという。運輸関係のブローカーで、顧客の時差の関係で午後は一時的に暇になるらしい。サラリーマンにしてはとびきり変わった人物と言うほかない。

酒を飲みながらの昼食に異を唱える向きも当然ある。

西海岸の大手企業で社長が交代したが、新社長は昼食時の飲酒には絶対反対であった。それまで酒を出していた幹部食堂では早速禁酒となった。この社長は社員の肥満にも厳しく、会社指定のクリニックでの身体検査を強制し、肥満のものに対して期限を切って減量を求めている。この会社の昼食に招待されたが酒類は出ない。食事も脂肪分のないサラダ中心のものであった。何となく意気が上がらない。どのテーブルでもひそひそ話をしている感じである。

ニューヨークのランチオン・ミーティングが懐かしかった。



## 南チロルは「未回収のイタリア」

松浦 俊博

北イタリアのトレンティーノ・アルト・アディジェ州の州都、トレント近郊にチベッツァーノという小さな山村がある。ここに娘の夫クリスチャーノの実家があり、昨年の夏に彼の両親に会いに行った。以前、娘が物理の研究をしていたトレントには何度も行ったが、両親に会うのは初めてだった。花に囲まれたきれいな家で、両親が一階に暮らし、クリスチャーノが二階を使っていた。

二階の壁にオーストリア最後の皇帝フランツ・ヨーゼフの写真が飾ってあった。写真の下に書かれた名前はイタリア語でフランチェスコ・ジュゼッペ。どうしてハプスブルク家の皇帝の写真飾るのかと思ったが、ヴェットーリオ・エマヌエーレ二世よりも親近感を持つのだろうと想像して、聞くのは控えた。お父さんはオーストリアのエプロンで料理をするし、家族はドイツ語も話す。オーストリアにはよく旅行するがローマには行っ

たことがないそう。この地域の複雑な歴史をふりかえると、これらの理由がみえてくる。

この地域は、一八七〇年以降にローマ教皇領がイタリアに併合された後もオーストリア領にとどまり、トリエステと同様に、「未回収のイタリア」と呼ばれた。第一次世界大戦後のサンジェルマン条約でイタリア領になり、トレンティーノ・アルト・アディジェというイタリア名の自治州になった。しかし、ここは本来にイタリアなのか。独仏国境のアルザス・ロレーヌ同様、住民はいつも戦争の勝敗に振り回される。

トレントは、十六世紀初めに神聖ローマ皇帝マクシミリアン一世が戴冠式を行った場所であり、彼はチロル地方をハプスブルク家の支配下におさめた。十六世紀半ば、彼の孫の神聖ローマ皇帝カール五世の時代に反宗教改革の公会議がここで開かれた。マルティン・ルターに始まる宗教改革で、プロテスタント勢力に押されたカトリックが、勢力を立て直すために開いた公会議である。断続的にはあるが十八年にもわたって協議された。この

会議がどうしてトレントで行われたのか。それは、ベルナルド・クレシオという枢機卿がトレントを発展させるために活動したからである。現代のオリンピック招聘のような行為だったのだろう。おかげでトレントは一層有名になった。

十九世紀初めにチロル地方がナポレオン一世に占領された時、アンドレアス・ホーファーという住民とその仲間がオーストリア帝国のために愛国的蜂起をした。彼らは山岳地帯でのゲリラ戦を得意とし、シュツェンと呼ばれる防衛隊を組織した。しかし、当時の皇帝フランツ一世はこの蜂起をハプスブルク家にとって何の利益もないと見捨てた。ホーファーはチロル地方の英雄として語り継がれ、シュツェンの名前も残っている。

トレントには、ブオンコンシリオ城という、かつて領主司教の居城として用いられた建物がある。城の中を見つて一枚の写真に立ちどまった。第一次世界大戦で、命令に背いて処刑された二人のトリエント出身のイタリア人兵士の写真である。第一次世界大戦ではイタリアとオ-

ストリアは敵として戦った。彼らは、「自分たちはオーストリア人ではなくイタリア人である」と主張して、当時は敵だったイタリアと戦うことを拒否したのである。

第二次世界大戦中にムッソリーニが逮捕された後、新首相となったバドリオが連合国側と講和したが、国王のヴィットーリオ・エマヌエーレ三世はこのことを国民に周知せず逃げ回っていた。このため、ドイツ軍がブレunner峠を越えてイタリアに侵攻したとき、南チロルのイタリア兵はドイツが敵になったことを知らずに彼らを出迎え多くの犠牲者がでた。国境地帯の人々はいつ最初に犠牲になる。戦後、イタリアは国民投票で王政廃止を決めたが、全く納得できることである。

トレントの北の地域では、駅名表示はドイツ語とイタリア語の両方である。ボーツェンとボルツァーノ、メラーンとメラノという具合だ。トレンティーノ・アルト・アデージェ州では現在も三分の一の住民がイタリア語を使わないようだ。住民はどちらの国に属したいのだろう。南チロルはまだ「未回収のイタリア」だ。

## 大国はマッチ・ポンプ介入をやめよ

新山 章一郎

東海大学で、アフガニスタンからの留学生たちから直にアフガニスタンの話を聞く機会があった。

まずスライドでアフガニスタン国土の紹介があった。

緑豊かな丘が展開する牧歌風の平原、紺碧の水にオーストラリアのエアーズロックのような島が浮かぶ静かな湖、島は豊かな緑に覆われていた。更に色彩に満ちた可愛い家々が立ち並ぶ街角、カラフルな民族衣装で輪になって踊る女性たち、そして色とりどりの料理がテーブルに並び、皆が着飾って集うホームパーティの一齣等々。皆、僕が想像していた岩だらけの荒涼とした大地、長年にわたる戦闘と殺戮に無残に荒れ果てた灰色の街をさまようぼろ服をまとった人々、という荒れすさんだ風景とはまるで違うのどこで陽気な国の姿だった。

ちよっとたどたどしい日本語で説明する五、六人の同国留学生たちも、褐色の肌、濃く太い眉毛、彫の深いイ

ケメン揃い。控えめながら真摯な話し方も好感を与える若者たちだった。

話の後で「こんな美しい景色、楽しそうなホームパーティなど未だに開かれているのか」と聞いたら、俄かに全員の顔が悲しげにさっと曇った。

「いえ…。今はもうぜんぜんない…。可哀そう」  
彼らは悲しげに、しかしはっきりと言った。

今のイスラム国問題はすべてアフガン紛争にその端を発すると言われる。一九七〇年代アフガンで勃発した反政府暴動に旧ソ連が軍事介入。以前から秘かに反政府勢力に武器供与していた米国との間の代理戦争になった。その時、反政府軍の中にオサマ・ビン・ラディンがいて、のちに強力なテロ組織アルカイダ、そしてタリバーンと合流、さらにイスラム国へと発展し、百万人にも及ぶ人々が住み慣れた土地を捨て、命がけで他の大陸に逃げ出さなければならぬ難民問題、更にバリのテロに発展した。他の要素もあるが、世界のごく一部の地方における小さな紛争で事は済んだものが、ここまで大きくなったのは大国の介入のせいだ。

歴史にタラ・レバは禁物だが敢て一言。先ず同紛争のごく初期段階において大国による武器弾薬などの供給がなければ、アフガンでの戦闘は極めて限られた兵器弾薬による、局地かつ散発的な撃ち合いに終始し、地域的にもごく限られた場所における紛争以上に発展することはなかっただろう。

使用する武器が一発づつでしか撃てない銃で、限られた量の弾薬によるものならばその殺戮も程が知れている。そのうち双方とも弾がなくなり、戦闘は続けられなくなる。

殺し合いの対象も、相手を認識してから狙って引き金を引く一対一の戦闘員間だけのものになり、女子供を巻き込んだ無差別のものにはならないだろう。その場合、戦闘やその惨禍は地球上のごく限られた一部の地域に限られる筈だ。

アフガンでのことは、大国の介入なかりせば有史以来この地球の至る所で行なわれて来た程度の地域限定の紛争で済んできたことではなかったのか？

中東地域の歴史をちよつと垣間見るだけでも、わずか

数年、いや数か月単位で地域の支配者が代ることは歴史的に繰り返されている。住民はそれでも、その時々々の支配者に合わせて彼らの生活、生きざまを守り、その土地を捨て去ることなくその地に生活し続けて来た。社会秩序は自然治癒的に回復し、人々は曲がりなりにも一応平穏な、時勢に適した日常生活に戻ってきた問題ではなかったのか。

日本の戦国時代だって、ある地方の豪族、大名家の栄枯盛衰に伴ってその地の支配者が代わっても、住民はその地での先祖伝来の田畑、生業を守り、営々と生活し続けてきたのと同じだ。各地域にはかなりの変化に耐え、地政学的にもその地その地方の地域社会保存の方法があったのだ。

地球上の小紛争の芽を荒らげて大問題にしているのは大国の覇権、膨張主義に他ならない。その大国が、今はその地の平和の名の下に桁違いの破壊と殺戮を繰り返すとはとんでもないマッチ・ポンプだ。

## 澤田美喜、戦後の始まり

大越 浩平

東海道線大磯駅近くに澤田美喜記念館がある。そこに、故澤田美喜夫人が、戦前戦後約四十年にわたって蒐集した「隠れキリシタンの遺物」が展示されている。白磁のマリア像、ガラシャ夫人の遺品、踏み絵の版本等。納骨堂には、エリザベス・サンダースホームで亡くなった孤児二十四名と、澤田夫人も分骨され、祈りを受けている。澤田美喜は三菱財閥の末裔として誕生し、明治三十三年、女子英語塾を開いた津田梅子に英語を学ぶ。幼い美喜が、キリスト教徒の梅子から影響を受けたことは大きかっただろう。岩崎家は真言宗であった。

大正十一年、外交官でクリスチャンの澤田廉三氏と見合い結婚する。外交官夫人としての美喜は、主人の出世のために終始する婦人会から、距離を置くようになる。ロンドン時代、日曜日の礼拝のあと、老婦人からドライブに誘われた。そこは孤児院だった。美喜は子供たち

が明るく、礼儀正しいことに驚いた。学校も小・中・高とあり、職業訓練まで行っている。運営が奉仕の精神であることに気づき、美喜は週一回、奉仕する事にした。

パリ時代、美喜は社交界に歓迎され、マリー・ローランサンに絵画を学び、香水商のコティと知り合い、黒いヴィーナスとしてパリジャンを虜にしたダンサー、ジョセフィン・ベーカーと出会う。

ジョセフィンは極貧の中に育った。パリ公演の成功後も貧民を忘れず、パリ郊外の貧民窟を慰問していた。そこに、美喜が行きたいと言い出した。ジョセフィンは押し留めたが引き下がる美喜ではない。ジョセフィンの車が貧民窟に入るや否や子供たちは一斉に飛び出して来る。持参した衣類、おもちゃ、食料等々を子供たちの母親に贈り、笑顔の子供達を抱きしめるジョセフィン。この光景に美喜は感動した。

ニューヨークに転任。趣味に情熱を傾けながら、五番街の聖トーマス教会の婦人援助会日本部委員長に選ばれ、講演活動等を頼まれていた。この時の友人に、戦後の美喜を助ける、清里の父、ポール・ラッシュがいた。



ジョセフィンが凱旋公演でニューヨークに来ることに  
なった。そこで美喜は米国の黒人差別の実態を見せつけ  
られる。迎えに行く自家用車の運転手にジョセフィンの  
乗車を嫌悪され、ニューヨークのどこのホテルでも、「満  
室です」と告げられる。仕方なく美喜のアトリエに連れ  
ていくが、管理人からは表門エレベーターの使用を禁じ  
られ、裏のホーム階段から入室を許される。

澤田一家が帰国したのは昭和十一年、二・二六事件が  
起こり、軍靴が地面を響かせ始めていた。

敗戦した。七か月後から、進駐軍兵士と日本人女性の  
間に混血児が生まれ始める。勝者の犯罪だ。子供達は有  
楽町、新橋、横浜や河川等に毎日捨てられていた。

美喜は、特攻隊から帰還した次男に会うべく列車に乗  
っていた。座席上の棚から風呂敷包みが落ちてきた。警  
官がやってきて「これは誰のですか」と叫んだ。

包みの中身は、油紙にくるまれていた裸の赤ん坊の死  
体だった。警官は「パン助め」と美喜を怒鳴りつけ、更  
に「こんなことをしくさって、よくも図々しくしてい  
るもんだ、とんでもないアマだ！ 日本人の面汚し！」。

乗客の協力もあり疑いは晴れるが、このとき美喜四十  
五歳、混血児の母になる啓示を受ける。美喜は大磯の別  
荘をホームにと考えていたが、そこは政府に物納されて  
いた。進駐軍総司令部と交渉するより他ない。交渉の末、  
別荘の買い戻しは許可されたが、名義は聖公会にしると  
命令される。だが資金が無い。美喜の持ち物すべてを換  
金し、高利の借金で登記した。ホームの名は、初めての  
寄付者エリザベス・サンダースに感謝して付けられた。

当時の司令部は、ホームの設立を潰そうとしていた。  
混血児を隔離せず日本人の間で育てるべきと主張し、米  
兵の起こした不祥事を分散し、目立たせたくなかった。

まして混血児を集めてホームを造るなど、米軍の不名  
譽を宣伝する、はなはだ迷惑との姿勢だった。挙句の果  
て、「サワダは混血児を集めて反米をっており、左翼だ」  
等の中傷を浴びせられた。日本の役人は、ホームを支援  
することは、進駐軍の政策に反するものを助けることに  
なると公言し、町民には「パンパン」の子供を集めると  
は何事かと怒鳴られる。

ここから澤田美喜の、日本の戦後が始まる。

## 日生劇場の『ドン・ジョヴァンニ』

川口 ひろ子

今日モーツァルトのオペラは、ロココ趣味の優雅な時代劇ではなく、現代社会が抱える諸問題について聴衆に問いかけをする現代劇として上演されることが多い。

オペラ『ドン・ジョヴァンニ』は、放蕩のあぐく神の罰を受けて地獄に落ちるスペインの若い貴族のお話。一方、彼に魅了され翻弄された人々は……という物語だ。

昨秋日比谷の日生劇場で、このオペラが新制作により上演された。演出は菅尾友。現在、国内やヨーロッパで活躍中の新進気鋭だ。開演前のプレトークに参加した。菅尾が語った主旨は以下の通り。

今までと全く違うドン・ジョヴァンニ像を創造した。

即ち、従来のマッテオな女たらしではなく、世の常識では測れない強力なエネルギーを持っていて、世の中をかき回す無邪気な青年貴族。大人になりたがらないピーターパンのようなキャラクターだ。彼の奔放な行動は、周

囲の人間の見方次第で善にもなり悪にもなる。これを現代社会の問題として考えると、とてつもないエネルギーを持ち、有能な働き者ではあるが、使い方によっては呪いともなりうる「原子力」のようなものかもしれない。

序曲。演奏は広上淳一指揮による読売日本交響楽団で、気合が入っていた。もう少し軽みのあるモーツァルトが私は好きであるが、時折現れる歯切れのよい古楽風な表現が新鮮だ。

幕が上がる。抽象の空間、異次元の世界の展開だ。

床より高い位置に数本の階段があり、上下左右に移動する。工事現場のクレーンが動いているように見える。上手と下手から延びた二つの階段は、舞台中央で先端がつながったり離れたりする。この上で歌手たちは歌い、演技し、別の階段に飛び移ったりする。

衣装は、ドン・ジョヴァンニのみが青色のロングジャケット姿だ。彼に振り回される一般人たちは、キルティング加工された灰色の衣装、綿入れのぼつてり感が何とも不格好だ。顔はべつたりとした白塗りで、濃い青のア

イシャドウが引かれ、頭に大きな白い髪など、絵本の世界の展開だ。

タイトルロールのドン・ジョヴァンニは、新進バリトンの池内響だ。声質は軽く響きはまろやか、階段の上を器用に駆け回り、いまどきの草食系男子という感じは、ピーターパンのイメージにぴったりだ。

ドン・オッターヴィオ役の望月哲也と、その恋人ドンナ・アンナ役の宮澤尚子が、格調のある歌唱を聴かせてくれた。父を殺されたアンナの驚きと悲しみ、そして復讐への執念を歌う二重唱「なんと……」は特に素晴らしかった。情感豊かなお二人の美声が重なり合い溶け合って、満員のホール一杯に響いていた。

フィナーレだ。ドンは「たてまえのお化け」だという騎士長によって罰せられ、炎の燃えさかる地獄に落ちる。ドンの身体から抜け出したのだろうか？ ピーターパンがどこか高い所に飛び去って幕となる。

良かったのは演奏面だ。空中に浮いた階段の上で、渾身の歌唱を聴かせてくれた若手の歌手たち、そして、指揮者広上の力強い推進力で、だれることなく物語を展開

させていた読売交響楽団のオーケストラだ。

反面、演出面で違和感を覚えた。今回の公演は、日生劇場側の「若い世代のための質の高いオペラの提供」という要請に添った、青少年向けのオペラなのかもしれない。しかし、危険な男ドン・ジョヴァンニが大人にならない子供ピーターパンに読み替えられるとはまことに驚きだ。

今回、私は「若い感性によって創られた最前線のオペラ」を鑑賞する機会に恵まれた。しかし、メルヘンの世界に読み替えられた舞台を存分に楽しむことができなかった。私の老いた脳味噌が、過去のドン・ジョヴァンニのイメージを払拭することが出来ず、批判を繰り返していたからであらう。

モーツァルトのオペラは博物館に納まる芸術品ではなく、元気に活動を続けるホットな生き物だという。私の不満はともかく、日本のオペラ界にも、威勢のよい次世代の潮流が渦巻いていて、その波は日比谷の入江にまで押し寄せてきているのかもしれない。

## 失敗

下山 健夫

祝日の月曜日夕方 新神戸駅へ到着、タクシーで六甲アイランドのSホテルへ。ラジオが大阪湾で震度一地震を伝える。東京ではこの程度では放送はしないが……。周りは高層マンションとオフィスビルで真っ暗、外に出なくなるような赤いネオンは周囲にはない。チェックインして先に来ていたメンバーとレストランで一杯飲みながら、翌日のスケジュールの打ち合わせを簡単に済ませ、早々に十五階の自室へ引き上げた。クローゼットへ翌日のスーツと着ていたズボンを掛け、隣のベッドへ残りの服を脱ぎ捨ててベッドに入った。

出張中の眠りはいつも浅い。暗い内に目覚めベッドへ腰かけていると、突然に地の底から起こるような大きな音と上下の揺れで天井近くまで飛ばされたように錯覚した。その後横揺れでクローゼットが倒れベッドの端で止まり、正面にあったTVが自分の方へ飛んできた。揺れ

の間はドラムの内にいるような大きな音が続き非常に長く思えた。

揺れが収まり、まず逃げる道を確保しドアを開けると向かいの部屋から寝間着姿のCAさん達が同じようにこわごとドアを開け声を掛け合った。一旦部屋に戻り、脱ぎ捨ててあった服を着たが、ズボンはクローゼット内で倒れて取り出せない。靴下だけはき廊下に出た。靴を履かねばと思ったが慌てていて、鍵を持たずノブを離してしまい、靴下、ズボン下とシャツという情けない恰好で部屋から閉め出された。

非常階段を使い外へ出、近くの小学校に案内されたが門に鍵がかかり入れない。宿泊者だけが五十人程いた。周囲が明るくなり廻りの建物、高層マンションは壊れておらずそこからは誰も出てこないでホテルへ戻ることにした。他のメンバーは服を着て荷物を持ってロビーに降りて来ている。私は事前に部屋番号を確認せず悔やんだがもう遅い。ロビーは宿泊者で一杯、地下の部屋へ案内された。地下の揺れは小さいようだった。

七時前に赤電話から自宅へ電話し、天井近くまで飛ば

されたと妻に話したが、東京では状況が判っておらず、笑われるだけだった。この大きなホテルも中年の宿直四、五名のみでおろおろするばかり、対岸では被害が出ていると伝えるのみで、皆いら立ってきた。従業員が揃わぬホテルは動きださない。オロナミンとポッキーが配られたが、恵まれたほうとの認識はその時はなかった。定年旅行中のご主人は、奥様に恥をかかせられないと一人で洋服を出して部屋から出てきたとのこと。

十時を過ぎると若い従業員が出勤し、各自五分ずつ部屋へ行き必要なものを持って来られる事になり、私も部屋までの階段を息も切らせず登った。若い従業員四名で倒れたクローゼットを元にし、荷物を取り出しやつと着替える事ができた。此の時、私は恐怖で窓近くへ行けず、大型クレーンが倒れ、岸壁が壊れているこの島の大被害状況を把握出来なかった。この間他のメンバーは現地の同僚のバンで近くの会社施設へ。幸い問題が少ないことを確認し、十二時にホテルを出て大阪へ向かうことにした。石畳が泥で覆われた液状化現象の唯一の橋を渡り対岸の住吉方面へ向かった。平行して走る六甲ライナーの

橋が落ちていることに驚き、煙突が折れていたり、酒蔵が屋根を残し全く粉々に潰れていたり、コンクリートビルの二階部分が潰れていたり、目を疑う状況を見てこの地震被害の大きさを実感しだした。

国道二号は大変な渋滞で、海側で火事が起きており、大阪方面からの消防車も動けず、車での避難は良くない。西宮辺りでは筋状に家が倒れていたが、その後は川を越える毎に被害が小さくなっていた。

十三時間かかり梅田に到着、駅前のホテルへ。深夜の居酒屋で食事を摂って長い一日が終わった。



## 過去からの贈り物

川村 邦生

絵画、写真、映画などの作品について、誰でもその作品がどこで描かれたのか、写されたのか、撮影されたのか知りたくなる。特に現代作品でなく時代が経った物ほどその傾向は強い。

最近、フェルメールの作品でビッグニュースがあった。三百五十年来の謎が解き明かされたというものだ。

在オランダ時代、国立モウリッツ美術館、アムステルダム美術館でフェルメール絵画と出合い関心を持った。そのフェルメール作品が話題になったのだ。

オランダの絵描きフェルメールは短い人生において三十七枚の作品を残した。「真珠の耳飾りの少女」「牛乳を注ぐ女」などを描き、世界に多くのファンがいる。そのフェルメールだが、三十七枚中風景画は二枚しか無い。

「デルフト眺望」と「小路」だ。故郷デルフトの街を、

運河越しに描いた前者と、街の日常生活を描いた後者だ。「デルフト眺望」は、フェルメールがどこから描いたか、はつきり判明している。船溜まりの対岸からの作品だ。

しかし「小路」は、デルフトのどこにでもある小さなレンガの家が並んでいる場所の風景だ。家はオランダ式レンガ家であるが、どこにでもある家の特徴は見つからない。そこには、婦人たちが家事をし、子供達は遊んでいる平穏な日常生活が描かれている。

三百五十年の謎とは、この絵がデルフトの何処を描いたかというものであった。

解明された要因は、フェルメールは科学的な性格を持った絵描きであり、すべての絵画が細部までもが正確にありのまま描かれていることだ。作品に書かれている地球儀、机上の書物、壁の地図など全部実在するもので、その寸法も形状も実物とほぼ違わずに描かれている。

デルフトは小さな街で、道路、小路、運河など、三百年前から大きく変わっていない。だが何故か場所が見つからなかった。建替えや増築がされ、少しずつだが変化し、決め手を欠いていたのだ。

オランダ人美術家が思いついた方法はユニークなものだった。当時の市税は、間口を基準にしていた。そこでフェルメールが描いた「小路」にあるレンガ家を、ひとかけらのレンガサイズから家の間口の寸法を測った。その寸法を持つ両側の家が狭い路地を挟む場所は、たった一か所しかなかった。古い地図などを照合した結果はドンピシャ。

そこは何とフェルメールのアトリエのすぐ近くであった。しかも彼のお婆の住まいだった。

「小路」に描かれている子供たちは親戚の子供であろうと想像される。

三百五十年の謎はこうして解明されたとその記事は伝えている。

ここまで解明に力を入れることは専門家に任せるとして、誰でも出来ることは「これはどこを描いたのかな」「どこかで見た風景だねー、行ったねー」と言いつつ機会を見て訪ねることだ。

経験した印象的な出会いは、東山魁夷の、奥蓼科の湖と白馬を描いた絵画だ。この場所を家電S社が吉永小百合さんを使いコマーシャルにした映像が素晴らしく、訪ねてみた。ドンピシャである。美瑛の太木は、ケンとメリーのスカイラインの映像となり、訪ねてみるとこれもドンピシャだ。輪島の千枚田、上高地の河童橋などドンピシャが沢山ある。

全国を訪ね回るのがおつくうな人には、広重「各所江戸百景」がお勧めだ。そこには「日本橋より江戸橋を望む」「永代橋より佃島を望む」「下谷広小路」（現在の松坂屋）などが紹介されている。一日数か所をめぐるようにすれば一カ月ほどで制覇できるのではないか。

ガイドブックが出版されているので身近な場所から始めることを薦める。

フェルメールや、広重が描いた場所を訪れ、その光景を目の当たりにすることにより、作品への思い入れが深くなる。これこそが彼らからの時を越えた、最高の贈り物だ。

## 病院にて

新田 由紀子

口腔と腕と足の付け根に管を挿入されて、救急室から母が運ばれてきた。呼びかけても反応はない。救急車に同乗してきた兄と駆けつけた私を前に、医師が言う。

「心肺停止ということで、蘇生措置をしました。昇圧剤も入れています。急性呼吸不全は肺炎によるものと判断されるので、抗生剤も使いました。自発呼吸はなく、呼吸装置で肺と心臓を動かしています。二、三日がヤマですが、今後は抜管の時期を相談していただくことになります」

張りつめた表情で一氣に言われると、耳慣れない用語もすんなりと頭に入ってくる。こんな日が来ると思っていた。その場面はテレビドラマでも見ているかのように現実味がない。つい二時間前まで私は娘一家と食卓を囲んでいた。初孫の誕生に慌ただしくも心浮く日々を過ごして三週間目の出来事だ。

母はヤマ場を越えて昏睡を続けた。肺炎はほぼ治まったという。わずかに自発呼吸も出るらしい。しかし、一向に目は開かない。両手を拘束され、毛髪は逆立ち、口に入ったチューブのせいで頬はかぶれている。胸が塞がる光景だ。たとえ、意識が戻っても認知機能は失われているという。目の前が暗澹となる。

母は兄と同居し、九十歳という年相応の心身の不調を歎きながらも、大事に毎日を送っていた。私は申し訳程度に買ひ物や通院の付き添いに通った。そんな折、聞かされるのは『ピンピンコロリ』の大往生。まさに、それを成就したともいえたのに。

一か月が過ぎて病院から呼ばれた。先に着いた私は、病棟の休憩所で兄を待った。エレベータホールにソファと自動販売機のある狭いスペースだ。冬の始めとはいえ窓からは明るい陽射しが注ぎ、院内は暖かい。だいたい遅れて兄がやってくる。さらに二時間、私たちは多忙な主治医を待った。エレベータは開いては閉じて見舞客や点滴をぶらさげた患者を吸い込んで、吐き出している。



兄と私はとりたてて話題がない。

「お母さん、保険になんか入ってないでしょう……」

「……オムツ代つてのが、ばかにならないらしいな……」

「……田舎に知らせたら、M叔母さんは来たけど、T叔父さんのところはどうしたかな……」

「……お正月はどうするの。予定が立たないね……」

「……猫のやつ、婆さんが『居ない、居ない』と騒いでさ、そこら中にオシッコするようになったよ」

「新聞紙やタオルを敷いておくようにしないとね」

「端の家の黒いのが外で待ち構えているんだよ。そいつのせいで出られないんだな」

ひとしきり、飼猫の話が続いた。ふと気づくと、テーブルの向こう側で、パジャマ姿の男がうつむいて携帯を耳にあてている。

「俺、猫って奴がだいっ嫌いだし。そうだよ。あの顔がイヤなんだ。顔見るとムカつくんだよ。あいつら」

私たちはそれっきり口をつぐんだ。

エレベータが開き、見覚えのある若い医師が出てきて足早に奥へ急ぐ。まもなく私たちは小部屋に呼ばれた。

ひととおりの病状経過を説明した主治医は、

「急変時の心臓マッサージ、気管切開を望まないということですと、病院はもうやることはありません。転院していただくことになります」と、パソコンから顔をあげた。気おされたように兄が黙りこくる。私は兄の顔を見てから、用意した言葉を口にした。

「先生、こんな状態は本人の望むものではありませんし、家族としても、もう辛くて見ていられません。口の管を抜いてください。その上で、この原因であつた肺炎の様子をこのまま見ていただく訳にはいきませんか」

主治医は的を射たように頷いて、抜管を承諾した。

薄くなった母の体は管を差し込まれて、すうすうと胸を上下させている。まずは栄養チューブがはずされた。発進した列車に飛び乗ったような気がして、私は櫛を取り出して髪をとかしてあげながら、声をかけた。

翌日の病院からの連絡は、呼吸器抜管は違法となるので中止ということだった。真冬の空の下、母の体は覚めることのない冬眠を続けて三か月になる。

## 母の面影

矢澤 正二

母が亡くなって十年になる。もうそろそろ母のことを思い出してもいいかなという気持ちになってきた。

母は長年神戸の山の手に住んでいた。そして神戸が日本が一番よいところと終生そう思っていた。

その神戸の家（父が台湾に単身赴任中であつたため母は実家で過ごしていた）を、終戦後まだ間もないころ火事で焼け出され、母にとって一番よいところから父の実家のある静岡に越してこざるを得なくなった。

それから母の苦難の日々であつた。母は火事で焼けのこった着物を次々と売り食料に換え、家族の糊口をしのいだ。正に竹の子生活であつた。

父はまだ職が定まらず、父が母になんとなく頭が上がりなかつたのはそのせいだと思う。私が五歳のときであ

つた。

母は嫁に来るときお手伝いさんを連れてきたという。

これは昔ではよくあることのようにであつたらしい。お手伝いさんがいなくては立ち行かないというわけではないと思う（今思うと若干そうと思われる節もあるが）。

それに当時のお手伝いさん（女中さん）は給金というのはお小遣い程度で、休みといえど盆暮れだけであつたという。その頃父はまだ若いサラリーマンであつたが、父の給料でお手伝いさんを雇えたのだろうか。

NHKの朝の連続ドラマ「あさが来た」において、主人公の「あさ」が嫁に行くとき京都の実家から「うめ」が付き人として大阪の婚家へ付いて行き、そのまま身の回りの世話をするといったように、これは関西ではよくあることのようにであつた。

母は私が言うのも何だが、綺麗な人であつた。母と歩いていると人が振り返って見るほどであつた。それが子供心に気恥ずかしくもあり嬉しくもあつた。

その最たるものが小学校の授業参観のときだ。母がくと他の生徒が気づき、何やらばーっと華やいだムードになる。それが私にはたまらなく恥ずかしく早く時間が過ぎればよいのにと思った記憶がある。

母は父親が医師で、そのせいか潔癖すぎるほどの清潔好きであった。

その頃ロバのパンというのがあった。家の前で年とつたロバにひかせてパンを売っていたが、そのパンが子供の私にはなんとも美味しそうに映り、食べたいと母にせがんだが非衛生であると、その希望はかなわなかった。(ロバをさわった手でパンを触る)一度は食べたかったロバのパン。

夏になると駄菓子屋の店頭でブリキのバケツの中に入った「ところてん」をお婆さんが黒い皺くちやの手で驚づかみし、天突きという容器からニュウとだす。これがなんとも子供心にはたまらなく美味しそうに見え、何度も母に無心したが却下された。そんな非衛生なものは食

べてはいけませんと。

母の着物の帯の芯で作ったランドセル。我々静岡では風呂敷のようなもので学用品をくるんで腰に巻きつけて通学するのがふつうの生徒の姿であった。私はその帯の芯のランドセルを何の不思議もなく小学校の一年生から三年生まで大事に使っていた。そんなランドセルを使っていたのは私だけであったのに。

野球のグローブもまた母が帯の芯で作ったものである。

その母が十年前に亡くなった。亡くなる前の晩、私は母の一人住む静岡の実家で母と二人ですごした。母は私が風呂に入るまでタオルがどうのと、あれこれ六十歳を過ぎた私に指示していた。最後まで母親をしていた。

ある人に言わせると「それはお母さんがあなたを呼んだのだろう」と。

母さんありがとう。

## 秦始皇帝と習近平

大泉 潤

国際情報には米中が圧倒的に多い。開かれた米からはふんだんに入る一方、中国は指導者の動向、経済状況、海の覇権、世界進出など高名な学者の論評に限られる。米は独立して二百四十年、中国は枕詞でも建国五千年という。我が国は文化の多くを中国から伝承している。国富については米中日が実質的に三強であり、国際関係の緊張はここが震源だ。まず歴史上の巨人、始皇帝と現中国の指導者、習近平について学ぶ。

祖父、父二代の早世から十三歳で王位を継ぎ、三年間慎重に準備した。法を重視し、軍事力で領土を広げ、灌漑で国土を治め五国を攻め戦国時代に幕を引いた。三十九歳で中国を統一し、独裁者となり、自ら始皇帝と名乗った。業績は次の通り。

●統治の方針は大会議により、郡県制を敷いて直接統治を行なった。行政、軍政長官を任命する制度とし、こ

れは清朝滅亡まで続いた。毛沢東はこれを中央集権による大革命と評価している。

●あらゆる種類の大量の書類を自ら裁決した。

●度量衡、文字書体、貨幣単位の統一、領土拡大により現代中国の基礎を築いた。

●大道の敷設で領土内四通八達、馬の跳び越せない高さの長城建設。その労働力は商人と罪人だった。

●多数の石碑、豪族十二万戸の移住、阿房宮の建設贅沢で、外征と盛大な儀式を重ねた。天下の巡遊、視察、祭祀を好み、四回にわたり各省を長期の旅で訪れている。四度目の途中で息を引き取ったのは、さぞ無念であつたろう。

戦国時代、中国では王子を人質として交換していた。

隣国趙の人質となっていた秦の王子は豪商呂不韋の愛姫と懇ろになり、生まれたのが政、後の始皇帝だ。だが、実父は呂不韋で、起業家精神の溢れる都会人だった。

出自の秘密が、始皇帝の事業意欲、度重なる外征の成功を裏付けている。

大国となった現在の中国は新聞を賑わせる。元の為替相場、物価・経済統計、一帯一路の通商問題、人材の教育、世界進出、海の覇権等一挙手一投足が報じられる。

指導者、習近平がメディアに姿を現すのは、演説、閱兵、他国元首との挨拶であり、肉声、立ち居振る舞いの詳細は分からない。

かつて一万キロを超える大敗走を陝西省で迎えたのが父親習仲勲だった。出版された朝鮮戦争の小説で英雄と描かれ毛沢東の不信を招き、服役、下放され強制労働に服した。後、政治的復活を遂げた。「人の嫌がることを押し付けるな」が教えだった。

習近平は十六歳で陝西省延安へ下放されたが、共産党入党、生産大隊の党支部書記、精華大学入学を経て、國務院副総理秘書、厦門副市長などを歴任し、党中央書記処常務書記に特進、中央党学校長を経て五十五歳で国家主席となった。軍の三権掌握の他、中央国家安全、外交安全保障など巨大組織の権力を手中にしている。

政治姿勢は、周囲の意見を聞く、官僚の腐敗に厳しい、

文章を分かり易く、先輩を大事にし、礼儀正しい、温和で芯が強い、わがままで周りの意見を聞かない、の評がある。また、三大派閥の中でも高級幹部の子弟の太子党に属している。

腐敗撲滅をスローガンに謳っている。政府高官、党幹部が数百人摘発された。検察ではなく、党の規律部門が担当し、その判断が絶対的だ。一年で十八万人が処分されたという。綱紀粛正が大きな課題だ。

習近平は元駐英大使の令嬢と結婚した。妻は海外留学を望み、習は地方で経験を積むことを優先し、性格不一致で別れた。三十三歳の習は、音楽活動で全国を飛び回っている彭麗媛と再婚した。金童玉女（お似合いカップル）と呼ばれているとの挿話もある。

十九世紀半ばの阿片戦争以来約百年に亘り、欧米日から略奪蹂躪され、眠れる獅子と言われた国が七十年間大國への復興の道を登って現在に至っている。

四千年の歴史を学び、矜持ある国家に成長するよう念じてやまない。

## すべてが共に働いて益となる

新井 良佑

古稀が間近に迫った四年前、ホームドクターを決めようと思って、近くの診療所で健康診断を受けた。年の割に元気そうな私を見て、医師が「健康な人も病気がちな人も、人の身体は七十歳を越えたらみんな同じになる。どんな元気な人でもいろいろな病気が出てくるから、くれぐれも慢心しないように」と診察の終わりに警告された。そのときは、漠然とそんなものかぐらいで、自分には関係ないことのように思った。

半年後、首の左側にしこりができた。そのしこりが日に日に大きくなり受診した。甲状腺腫瘍だからすぐに大きな病院へ行くように言われ、隣の市にある総合病院への紹介状を書いてくれた。

総合病院で受診検査の結果、甲状腺腫瘍（左葉）が悪性腫瘍であることが判明し、三年前の四月に甲状腺左葉を切除した。主治医は右葉への転移リスクを軽減するた

め、甲状腺全摘出を強くすすめたが、私は正常な組織を切除する気がなかったのでお断りした。主治医はフォローアップのための術後の定期診断を義務づけた。

術後の検診は、この執刀した主治医が翌月に他の病院へ転任したために、後任の主治医に引き継がれた。一年半ほど過ぎた一昨年の十二月、「そろそろ六ヶ月ごとの検診にしましょう。次回（昨年二月）はエコーでなく、CT検査をしましょうか」と言われた。主治医は「問題ないと思うが、念のためですから」と、こちらに余計な負担をかけないように気遣ってくれた。しかし私は、右葉への転移より、首の左側の手術の傷痕にできた小さなしこりが少しづつ大きくなってきていたのが前々から気になっていたので、検査と言われ、内心ほっとした。

CT検査当日、朝九時から検査を受け、十時半からの診察で結果の報告があった。診察室に入ると、主治医がCT画像を見ながら、表面近くの上しこりは悪性腫瘍でしたと驚きの表情で言われた後、「もう一箇所、ここも微かに光ってるなあ」と言いながら立ち上がり、私の首の

小さなしこりを触診しながら、「なぜ、こんなところに癌細胞があるんだ」と呟かれた。「前からこのしこりが気になっていました」と私。とにかく、細胞を検査してからということ、しこりの細胞を採取された。

翌週の診察で、小さなしこりが悪性腫瘍であることを告げられた。原因ははっきりしないが、癌であることは間違いないので、今後の対応を話し合った。分かったからには放置できないという主治医に従い、手術で除去することに決めた。表面にあるしこりの除去は容易であるが、奥にある小さな癌細胞の除去はかなり難しいとの説明があった。私は三回目の手術がないように万全な対応をお願いした。

話し合いの終わりになって、もう一つの疑念が湧いてきた。それは最も危惧している右葉への転移である。もし転移のリスクが高いなら、この際右葉を切除して欲しいと言ったところ、その必要はないと言われた。しかし、主治医は私の気持ちを察して、心配なら細胞診をして、その結果で判断しようということにしてくれた。幸いなことに右葉は正常であり、除去する必要がなかった。

今回も前回と同じように非常に危険が伴う部位で、高度な技術を要する難しい手術であった。七時間余を要したが、全身麻酔だったので、気がついたら個室のベッドの上だった。しかし、身体のダメージは前回よりはるかに大きかった。最新の医療設備、訓練された優秀な医療スタッフ、完全看護の行き届いたサービスの病院で、まるで最新鋭設備の製造ラインの上を流れる一製品のよう、ほぼ三週間をたんたんと過ごした。六ヵ月後の製品試験（CT検査）も無事に合格した。今は薬も食事制限もなく普通の生活ができている。

「七十歳を越えたらいろいろな病気が出るよ」と忠告してくれたホームドクター、右葉への転移を心配し、厳密な術後検診を義務づけた最初の主治医、予期しなかった所の癌を見つけ、丁寧な除去手術をしてくれた今回の主治医との出会いや今日までの出来事を一つ一つ思い返すと、「神を愛する者には、すべてが共に働いて益となる」という聖書の言葉がしみじみ実感できる。

## みかん雑感

橋本 政彦

ノーベル賞創設者ノーベルの命日、平成二十七年十二月十日の午後、ストックホルムのコンサートホールで国王のご列席の下、日本の二人の科学者にノーベル賞が授与されました。素粒子の一つニュートリノに質量があることを発見した東大宇宙線研究所所長の梶田隆章氏に物理学賞が、また微生物研究者で「イベルメクチン」の生みの親で世界中で三億人を失明から救った北里大学特別栄誉教授大村智氏には生理学・医学賞が。その式典で演奏された曲は安倍公房原作、勅使河原宏監督の映画「他人の顔」の主題歌で武満徹作曲の「ワルツ」でした。そのテーマは「平和への警鐘」だと言われます。

この頃、和歌山田辺の親類から少し早めの「大坊みかん」のお歳暮が届きました。スーパー店頭の蜜柑箱は「ミカン、みかん、蜜柑」と同県産のものでも表記はまちまちです。明治以降の日本語教育は、カタカナから始まっ

ていますので、時系列的には漢字、カタカナ、ひらがなの順序で使われていったのでしょう。ここにも戦争の影響がわずかに感じられます。日本では蜜柑は冬蜜柑が一般的で、漢字の蜜柑は温州みかんを指しています。この漢字は甘い柑橘を意味し、その名産地が中国浙江省の温州だったので「温州みかん」が日本みかんの代名詞となったようです。しかし学説では、日本みかんの原産地は九州不知火海沿岸で温州ではないそうです。北限地は茨城県北部と言われますが、それより北の新潟県佐渡で生産、出荷された報告があります。日本の蜜柑の年間生産量は百万トン／年で、トップは和歌山の十九万、以下愛媛の十六万、そして静岡の十二万と続き、この三県で全国シェアの半分ほどです。

みかんは冬の果物として人気があります。簡単に皮をむけ、食べやすく甘くジュシーだからでしょう。核家族が進んだ今も冬の居間にはみかんがあり家族団欒のバイプレーヤーです。大家族時代だった昔も今も変わっていないようです。オレンジの色は、気分を明るくしてくれます。サッカーのイエローカードは穏やかに注意を喚



起してくれます。こんなプラスイメージがある一方で、キリストを裏切ったユダが最後の晩餐で着用した衣服が黄色だったので、キリスト教世界では裏切りや嫉妬、嫌悪といったマイナスイメージを持つ人がいるようです。同じ色でも場所によりイメージが違います。文化や習慣には多様性があります。寛容の精神で対応することが大事です。

みかんからわれわれの受けるイメージは丘陵地の蜜柑畑で「幸せの色をひろげて蜜柑山」(田渕匡子)でしょうか。そんな感じが良く伝わってきます。カナダではクリスマスオレンジという風習があり、子供たちのサンタからの靴下の中にはプレゼントの品々と温州みかんが一緒に入れています。みかんはゴールドの象徴、子供の幸せを願う親の気持ちを代弁しています。日本からのみかん輸出は三千三百トン／年とわずかですが、そのうちの八割がカナダ向けで残りはアジア向けです。最近アジア向けが伸びています。ところで、TPPが発効しオレンジ類の輸入関税撤廃が実施されると日本のみかん農家は大打撃を受けるかもしれません。日本産のみかんが店頭から

姿を消して外国産に変わるかも知れません。農作物などの関税撤廃は同様な影響を生産者に与えそうです。食糧物は生活の基盤ですから日本の良き食文化が維持できるように官民ともに対応策を考えて実施することが求められます。

日本農家の担い手の高齢化は早いスピードで進んでいます。その対策として、農業法人の株式化、日本在住の外国人の雇用促進、里山資産の見直し、IT技術によるエネルギー自給型経済の構築、そして生活密着型の、老若男女が一体となったコミュニティを作り上げれば生き生きとした農村に再生されると思われます。「一族の無事を届けて伊予蜜柑」(須賀敏子)のような社会がこれから続くはずで

す。平成二十七年は戦後七十年の節目の年でした。戦争を体験した世代の方々も少なくなってきました。トインビーは「過去における経験は未来を照らすのに私たちに得られる唯一の光である」と記しています。穏やかな冬の日には、蜜柑を食べながら風雪に耐えて残された歴史の教訓を新たにし後世に伝えて行きたいものです。

## 案内嬢は見届けた！

浜口 須美子

市役所の正面玄関を入って、一番最初に会おうのが総合案内。私は案内嬢（？）として多くを学ばせていただいた。総合案内とは市役所の中の部署をご案内する業務なのだが、たぶん「どんなことでも案内する相談場所」というイメージで来られるのか相談窓口は別にあるのに、そこを案内すると「あんたの知ってる範囲でいいから教えて！」などと言われて、ますます案内嬢の資質を問われる。

ある日、目の少し不自由な方が受付に來られて私に携帯電話を渡された。簡単携帯で、三つのボタンで三か所にワンタッチで連絡できるようになって「1は市役所、2を警察にしてくれ」とのご要望。本来なら携帯電話のショップをご案内するのだが、ようやく市役所に辿りつかれたご様子、思わず受け取った携帯電話をむげに返すわけにもいかず登録した。1に市役所、2に警察。なん

だか、その方の人生を垣間見たような気がした。

最近のゆるキャラブーム。富田林のとつぴーちゃんも大活躍。「あのう、とつぴーちゃんに病院までついてきてもらいたいねんけど」。受付で、カウンターの前に立たれたご婦人の言葉。さて、冗談か本気か、「病院にとつぴーちゃんが行かれるのですか?」。その真意を探りながらお尋ねすると、どうも、医者の話が聞き取りにくく、そんな時に、誰か付いて行ってくれる人がいたら心強いからとつぴーちゃんにお願いすることを思いつかれたようだ。ヘルパーさんの関係の窓口をご案内した。ちなみに、とつぴーちゃんは大きな頭で、できたら手をつないであげたほうが歩きやすいようで、病院の付添い役はちよつと無理だと思ふ。

またある日、受付のカウンターに、新聞をどつさり持って來られたご婦人が「これ、返しといて! 頼んでいる新聞とは違う新聞が入りだしたから!」との事。まずは、販売店の連絡先をお伝えしたら、「なんや、市役所ですしてくれへんのん?」と言われた。「市役所に行ったらなんでもわかる、なんでも解決してくれる。そうだ、

市役所に行こう！」と思いついて来られるのは、地域と市役所とが密着していて喜ばしいことだと、市民とのパイプ役を自負している私は、それなりに達成感を味わって、一日が終わる。

そんなある日のこと、まさか、自分の息子を案内するとは夢にも思っていなかった。息子達の入籍する日は決まっていて、週末には結婚式の打ち合わせがあり、我が家に泊まって日曜に帰って行つた。入籍当日は、息子は出張。彼女が九州で婚姻届を提出すると聞いてた。「いまごろ提出したかな？」と思っていたら、なんと、私の座っている受付の正面から二人がニコニコ笑いながら歩いてくる。「どうなってるのん？九州で出すって言ってたんと違うのん？」とローカルな大阪弁が頭をよぎるが、ここは私の神聖な職場なので笑顔で応対した。息子たちは「母さんを驚かせようと計画してた」と言う。家族もこれを知っていて、「あまり驚かせたらお母さんが号泣するかも」と言われ、驚かせないようにゆっくり歩いてきたとのこと。市役所は、入籍、出生、転居、死亡

などの人生の節目の手続きが日常的に行われている場所なので様々な人の人生の節目の手続きをお手伝いするところが役目であつたが、まさか自分の息子の人生の節目をこのような形で見届けようなどとは思つてもみなかつた。なんだか、この日のために、私はこの仕事についてのかと思うぐらい、入籍の場に居合わせることの喜びを感じた。

二人は、私の目の前で婚姻届を出し、私は結果的に彼らのスタートを見守り、見届ける立会人となつた。まるでドラマのシーンを見ているような感覚で、主人公の二人の幸せそうな笑顔。その幸せを法律的に裏付ける婚姻届提出のセレモニーが私の目の前で繰り広げられた。これぞ至福の時。

案内嬢は息子たちの輝かしいスタートをしっかりと見届けることが出来た。



## 古代史は面白い

首藤 静夫

奈良・桜井市にある纏向遺跡、箸墓古墳を見たときは（これで邪馬台国論争は決着か）と思った。ところが、その後九州説が盛り返し論争は続いている。

九州説といっても邪馬台国の候補地は多数ある。九州北部に多いが私の出身の大分県にもある。県北部の宇佐市一帯だ。ご存知、宇佐神宮の所在地である。

宇佐は国東半島の付け根部分にある町だ。宇佐神宮を除けば政治的にも産業的にも歴史の表舞台に登場することのない地味な町だ。然るに神宮だけは伊勢神宮に次ぐ皇室第二の宗廟なのだ。

宇佐神宮は、全国に四万社以上ある八幡様の総本宮であるが、元は当地の産土神だったとか。それが皇室と深い縁になったのは何故か。

話は日本の国造りに遡る。八世紀前半に隼人の乱が起

こった。大伴旅人を大將軍とする朝廷軍に宇佐が加勢し、戦勝をもたらしたのだ。

さらに遡って『記紀』の神武神話にも宇佐は登場する。地方神の宇佐がいち早く神武軍に助力したのだと。今は目立たない宇佐だが、古代には瀬戸内を行きかう船の要衝だったようだ。

宇佐は朝鮮半島との関係も深い。渡来人がこの地に多く住みつき、軍事を含む先進技術の他、仏教・道教などの新思想をもたらした。宇佐神宮の主神は八幡神とされるが、これは元来ヤハタ神である。ヤ（八）は多いの意、ハタは秦氏だ。産土神と外来神・外来思想の混交により八幡神の基礎が出来上がった。

宇佐に対する皇室の思入れは強い。隼人の乱につぐ藤原広嗣の乱の時も宇佐八幡に戦勝祈願して勝利、さらに東大寺大仏建立でも有益な御託宣を出し、聖武天皇の信任をゆるぎないものにする。

以後、朝廷は国家の重大事には宇佐に勅使をたてて神託を仰いでいる。これを宇佐使いという。最も有名なのは、称徳女帝が道鏡を後継にすすめるかで悩み、神託を仰

いだ「道鏡事件」だ。伊勢神宮を無視して真っ直ぐに宇佐に赴かせたのだ。

四百年後、都落ちした平家一門は安德天皇を奉じて宇佐詣でを行う。平家なら、厳島神社や宗像神社などの神様がおわすしアクセスもいと思うのだが。やはり帝の将来に関わる故にであろうか。もっとも称徳天皇、平家一門のいずれにもつれない御託宣であつたが……。

皇室の帰依や信任だけでは片づけられない何かが宇佐にはある。邪馬台国Ⅱ宇佐説が生まれる背景もそこにある。邪馬台国Ⅱ宇佐説も一様ではないがその一端を紹介しよう。

二～三世紀、中津から宇佐のあたりに邪馬台国が存在した。その後大和方面に東征したが、その際卑弥呼の神格化された姿を奉じ、のちにアマテラスとして伊勢神宮に祀ったとする。

宇佐神宮の本殿は第一殿から第三殿まである。第一殿は八幡神（応神天皇）、第三殿はその母とされる神功皇后だ。応神または息子の仁徳の代に東征が始まり、河内

国に新王朝を開いたと説く。だから、応神天皇が八幡神Ⅱ武神としてここに祀られるのは自然なのだ。

問題は中央の第二殿に祀られている神だ。比売（ヒメ）大神というのだが、その正体はつきりしない。

そこで、比売大神Ⅱ卑弥呼（ヒメコ）Ⅱアマテラスという説が現れる。「日本書紀」ではアマテラスの本名はオオヒ（ル）メである。要するに「ヒメ」なのだ。

となると、宇佐は皇室の故地であり、神宮は祖先の聖なる墓所である。重大事の際し、祖霊にお伺いをたてるのは当たり前なのだ。

では卑弥呼はどこに眠っているのだろうか。

神宮の南に御許山（おもとさん）という霊山がある。

山頂には三個の石が聳え立っているというが、頂上付近は禁足地で近づけない。毎月、神官が九合目から山頂を遙拝し祝詞をあげる。祀っている神は比売大神だ。

宇佐神宮の主神は八幡様と思っていたが、皇祖神アマテラスが昔の名前（比売大神）でおわすのだろうか。

古代史は面白い。

## 「掌編小説勉強会」この一年

この勉強会は、短編より短い掌編小説を書いて小説作りを勉強しようという九年前にはじまりました。それ以来、隔月開く作品の合評会は途切れることなく続き、五月には節目となる第五十回を迎えることができました。

これはメンバー各位のご努力はもとより、このクラブのみならずの暖かいご支援のお陰と深く感謝いたします。この一年間に書き上げた作品は四十四編、発足時から累計は三百八十編に上ります。作品の内容は、企業物から海外物、時代物、そして恋愛小説まで多種多様です。メンバーは、女性三名、男性九名の十二名、それにコメンテーター二人です。年齢層は五十代から九十代まで幅広く、キャリアもさまざま、個性的な仲間の集りです。今年のトピックスの一つは、待望の新人、塚田實さんの加入です。かつて企業戦士として国内外で活躍された貴重な経験を活かした作品が期待されます。

トピックスの二つ目は、ベテランの出版活動です。長老の玉山和夫さんと新山章一郎さんが、それぞれこ

の勉強会で書き溜めた作品を基に、立派な作品集を編まれて出版されました。

これらの本の概要はアマゾンでご覧になることができ、お買い求めいただけます。

玉山和夫(著)

『有事列島―小説・201X年―』

出版社…T E M 出版書店

発売日…二〇一五年七月

新山章一郎(著)

『座敷ワラシは見た』

出版社…グッドタイム出版

発売日…二〇一五年九月

小説というとハードルが高いようですが、掌編よりさらに短いショートショートでも構いません。創作に興味をお持ちの方の見学参加を歓迎します。

(プロマネ 濱田、西川、廣澤)

# 創作短編



撮影 平尾 富男

## 恋のカンフル

中江 賢三

やりたいことをやる、言いたいことを言う、この自由度はどうだろう。好奇心やチャレンジマインドも十分、胸にトゲ刺すことまである。受験勉強や就活などが頭から離れず、ひどい金欠だった一回目の青春時代とは比較にならない。実際八十代に、このように豊饒な「もっと青春」が待っているとは思ひもかけなかった。

しかし、ただ一つ決定的な盲点がある。妻の管理と社会の監視下にあつて恋愛ができないこと、それが心身の老化を加速しかねないこと。

大学の役職定年後数年経って、私が出題したテストの解答用紙の余白に「先生のこと好きです」などと書いたAさんが、専門外の美容師になったということを伝え聞いた。英会話は得意だからヘアメイクの技術を身につけて、アメリカで暮らしたい、あわよくばハリウッドで働きたい——ということらしい。

私は、妻がカナダに英会話のホームステイに行った束の間の自由な時空を活用し、ある決心をしてAさんが働くところ聞いた表参道の美容室へ行った。高級デニムのシャツにジャケットもパンツもリーバイス、靴はリーガル、カルティエのサン格拉斯も忍ばせていた。

彼女はびっくりしつつも歓迎してくれたが、あつけないほどすぐ美容師に戻って、

「どんな感じでしましょうか？」

「とにかく、一番若く見えるようにしてもらおうか」それから、ゼミの思い出などに話の花が咲いたが、暫くして、心地よい眠りから覚めた私は鏡をみて仰天した。頭の両サイドを剃ったように刈り上げて、上の方には強いパーマがあてられていた。きついツーブロックだ。

「いいぞ！ でもこれって、余りにも僕とギャップがあり過ぎない？ 嫁さんまで変えなきゃいかんがな」

「そうされたほうがいいです。私でよければどうですか」「それはもってこいや。今晚どこで待つてようか」もともとその気で行ったから、間髪入れず瓢箪を胸にする会心の交渉術だった。レジでおつりを出しながら手



を握られたように思ったものの、半信半疑で指定の六本の交差点近くのスターボックスで待っていたら、彼女が本当にやって来た。その間のドキドキもトキメキも五十年以上前に感じたものと変わらない。カウンターの席がなく二人は隣り合わせに座った。

「僕は君が好きだった。ミーハーでありながら知的というコントラストがたまらない魅力だった。でも大学でセクハラは絶対ダメ。だから今日はやつと念願かなったよ」  
その言葉に反応するように、彼女がにじり寄ると二人の間に急速に愛が芽生えたが、それが私にとって「純愛」であるのか、「浮気」であるのかわからない。

「君はすごい魔術師だ。八十代の人間の身も心も甦らせて恋まで可能にする」

それから——しゃれたフランス料理店に連れだってシヤンパンで乾杯しワインと会話を楽しんだ。

「さあ、これから僕が、ライブハウスに案内しようか」  
「サーフィンUSA」がタイムスリップし五十歳余りの歳の差を埋めて僕たちを迎えた。フィフティーズの曲が主だったが、ラストミュージックは「星影の小径」だ

った。「じつとしてじつとして」。曲のとおり頬と頬がくつき足と足が絡みついて体が若者のように熱く反応した。外に出た二人は、新国立美術館の暗い裏通りを通って乃木坂の駅に向かったが、その間腕を組む彼女の胸のふわふわしたゴムまりが私をくすぐった。どちらかがキスをしかけたら、どちらも応じただろうが、どちらもそうはしなかった。その路地裏のラブホテルのネオンが二人を誘ったが、どちらかが入って行けばどちらも入って行っただろうが、どちらもそうはしなかった。それが、互いに失望を呼んだのか信頼をもたせたのかわからない。そのあとのデートはというと、それぞれが案内したいところに連れていくこととなった。

私は、国会前の「デモ」に誘ったが、Aさんを横にして拡声器で「警官隊諸君！」と、過剰警備を諷める演説をするなど、六十年前にもできなかったことだった。二人は肩を組んでシルズのラップをコールした。

彼女のほうは横浜アリーナでの「seka in o war i」に誘った。二人はロックに身を震わせデモの時と同じペンライトを振った。そうして、最後はこの

恋がなければあり得なかった高校サッカーの決勝相手の高校OBとのシニアサッカー、タイムアップ寸前に両脚肉離れを起こした为本望だった。

そろそろ妻が帰国する。

ある日の帰り道で

「ところで、君今、恋人いるの？」

「先生のゼミナールで一緒だったB君なのですが。今一つしっくりいかない」

「だっていつも一方的にしゃべりまくるのですもの」

「それから、私は文化会系、彼は体育会系。そろそろ別れようかと思っているのです。先生は両方ある。だからますます彼が物足りなくなってきました」

「なるほどね。それは困ったね。しかし彼は勧められるだけの男だ」

私は、嫉妬心を制し秘かにB君に会った。

「なぜ、ぼくたちのことを知っておられるのですか？」  
帽子をとって頭を見せて、

「彼女は僕の人生を変えてくれたのだ。その時聞いたよ」  
そして、単刀直入にA子攻略法を伝授した。

「もっと小説に親しみなさい。彼女は太宰治を読み込んでいるから、『正義と微笑』がいい。それから、彼女が話している間は最後まで聞いて、話し終わってもまだ聞いて気持ちを読み取って、そのことを伝えること。そして、空気をよく読み切って仕掛けていくこと」

「ありがとうございます。先生、勉強してレポートを書いてきますから、指導してくれませんか」

「そうしたら、僕のテキストの『ロジャーズ』と『サルトル』のあの箇所も読んできなさい」

一か月が経ち、A子の美容室へ行った私が、「B君どうしてる？」と聞いたら、「最近彼が変わって、また縋りが戻りました」という。私のなかで嫉妬と安心が交錯した。成田空港まで迎えた私の頭を見た妻はゲラゲラ笑ったが、「君を喜ばせるためだ」というとすぐ納得した。その夜二人は何年かぶりに深く愛し合った。

ところが、椿事が一つ——それは、私が不覚にも消し忘れた夫婦共用のPCのAさん、B君とのやり取りがいつの間にか削除されていたのだ。しかし、このことが夫婦の間で話題となることはなかった。

## 佐助を抱きしめて

三 春

「起きなさい、逃げるのよ!」と揺り起こす母の声。

倉田翔子十一歳、母小夜三十五歳の夏である。パジャマ姿のまま、季節労働者向けの駅前旅館へと深夜の町を走る。母の不貞を疑う父の暴力から逃れるためだ。父が追ってくるのではないかとという恐怖に加え、酔っぱらいのだみ声と女の嬌声が宿の薄い壁越しに響き、湿っぽい煎餅布団の中で翔子はいつまでも寝付けなかった。

父は、母と家庭教師との関係を疑っている。昼間の父は仕事一途の生真面目な人だが、その夜は口喧嘩が始まり、とうとう暴力に及んだのだった。

二十三歳の家庭教師は某大学に就職したばかりで、知性と熱意に溢れている。翔子の兄を有名私立校に進学させるための特訓が目的だが、不公平だとばかり翔子の相手もする。勉強のみならず食事も遊びも一緒に、翔子たちはこの大きなお兄さんにたちまち魅了された。父が連

れていくのは近所の薄汚い映画館での『鞍馬天狗』や『雪之丞変化』だが、先生は銀座の映画館で『怒りの葡萄』や『シエーン』を観せる。美術館や博物館を見学し、完成して間もない東京タワーから見下ろす東京の街に翔子たちは感嘆の声を上げる。未知への扉はきらきらと輝くばかり。母の小夜までが感化され、倉田家には大きなステレオセットが据えられてジュリー・ロンドンの歌声やタンゴのリズムが流れた。翔子の眼にも母と先生は親しすぎて不自然なのだが、まるで小夜を長姉とする仲良し四人兄弟のように、一緒に過ごす時間が多くなる。そんなときにたまたま父が現れると、聞かれたくない話をしているわけでもないのに、誰もがふっと黙り込む。父は何も言わず自分の部屋に閉じ籠る。父の不快と嫉妬も無理からぬことだが、家族との間に埋めようのない溝が深まっていくのも自然の成行きだった。

終戦直後、母は見合いをして、口減らしのように無一文の帰還兵に嫁ぎ、上京して父と共に「クラ工業」を創業する。父に代わって接待役も資金繰りもこなしてきた

その会社は、母の生甲斐でもある。くびれた腰と丰满な胸、うりざね顔に情熱的な瞳とぼつりした唇、それでいて気性が激しいときは、野暮で口下手な父が御せる相手ではない。父の愛は粗野で、悲しいほど不器用だ。

夜逃げ騒動から数カ月は小康状態が続いたが、翔子たちがそれぞれ目指す私立校に合格した直後、いよいよ本格的な別居が始まった。母が移り住んだ先は目黒不動尊の裏手、老夫婦の住む庭付き戸建ての二階である。トイレ共用で風呂もない一間暮らしたが、川の字の雑魚寝も銭湯通いも翔子には楽しく新鮮だ。先生も足繁くやってくる。生活費は母の役員給与で賄えた。だが父は探偵に尾行させ、先生と同居していないことを突き止めると、給与を取上げて母子もろとも兵糧攻めにし始めた。二つの私立校の学費はパートタイムや内職で稼いだせる金額ではない。家裁の調停員も小夜に批判的で、復縁を勧める。離婚が眉をひそめられた時代である。子供たちの学業と将来のために小夜は一年ほどで夫のもとに戻った。戻る数日前に小夜は、ここでの暮らしの思い出にと、目黒不

動尊名物の植木市で佐助の苗木を買い求めた。

それからの小夜は何かに備えるかのようになすすす事業に入れ込みだす。先生も折に触れて訪ねてくるが、母が時たま着飾って外出するのは二人きりで会うためだと、翔子は好意と嫌悪を緬い交ぜにしつつ感じていた。

いつしか十年の月日が流れ、兄がクラ工業に入社し、翔子も大学を卒業した。ある日、「近々見合いして結婚するつもりだから、君たちともあまり会えなくなる」と先生が告げに来了。母は驚いた様子もなく黙っている。二人で出した結論だろうと翔子は察する。それを最後に先生は姿を現さず、母も二度とその名を口にしなかった。

そしてまた十年。クラ工業では組合の過激分子による会社潰しが始まり、半年以上のストライキであつてなく倒産した。土地を売り払ってこぢんまりと再起した途端、父が脳梗塞で半身不随となる。だが、会社を支えながら父を介護する母の様子はどこか義務的で素っ気ない。父も本音を吐きだすように邪見で、病室を訪れる母に暴言

を浴びせる。最後は特別養護老人ホームで一人逝った。

父の死から十年余り。八〇歳を迎えた母なら、もう本当のことを言ってくれるのではないかと、初めて翔子は先生との真相を尋ねた。長い沈黙のあとにポツリと「何もなかったわよ」と笑顔で答えたが、その目は笑っておらず、じっと遠くを見つめている。

ほどなくして母も病に倒れた。入院を断固拒否して自宅療養の三年間に、母は何度も「お父さんには可哀そうなことをした」と漏らす。自宅で看取らなかったことを指しているようでもあり、最後まで父に冷たかったことを悔いているようにも聞こえる。母が溺愛していた兄は、同居しているがその三年間ただの一度も母の居室に入ることなく、義姉と翔子に一切の世話を委ねた。晩年にして母の期待と夢はまたも崩れ去ったことだろう。

今もきつと先生はお元気で、この春に七十八歳を迎えたはず。たとえ機会があっても真相を聞きだすことはすまい。倉田家と関わったことで先生の人生は少し変わったのだろうか。父と母はあの夜逃げから始まった数十年を

どんな思いで生きてきたのか。今や老境に入った翔子には三人の交錯する感情が見えるような気がする。

長年の葛藤の末に墓の下で寄り添うことになった父と母。それともまだ背中を向けあっているのだろうか。

母が大切に育てたあの侘助を墓前に供えようと、翔子は久々に実家に立ち寄った。母が過ごした船底天井の部屋。雪見障子の向こうに小振りの清々しい花姿が見える。

「時の移ろいは残酷ね。この侘助も明日には散るわ。だからこそ凛として潔く精一杯に……、お母さんもそんな風に生きたかったのでしょうか？」

心でそう語りかけながら翔子は庭に下りたち、一輪の侘助を摘んだ。



## 妖怪・ケセラ婆

内藤 真理子

お正月が終わりひっそりしてしまつた故郷の商店街を歩いていると、就職が決まつた時、娘のここのように喜んでくれた近所のおばさんに声をかけられた。

「玉子ちゃん、お正月休みかい、ゆつくりできていいね」  
リストラされて無職です、とは言いにくく、曖昧に笑つて早々に立ち去つた。

故郷には大きな神社があり、年末年始は人でごつた返していたが、三が日を過ぎると、元の寂れた田舎町に戻つてしまつた。

とりあえず神社にお参りをしようと、杉木立の中を歩いてみると、髪が真っ白で背中が丸くなった小さな老婆が現れて「これ、あげるよ」と言つて、玉子の掌に藁のかたまりを握らせた。見ると藁の所々を結んで人形の形に作つてある。藁人形？ 驚いて顔を上げた時には老婆の姿は何処にもなかった。

何者だろう、なぜくれたの、誰かを恨んでいるような顔をしていたのかな。でもせっかく貰つたのだから……。

東京の大手家電メーカーに就職したのは十年前。寝具店を営んでいる両親も商店街の人たちも、町をあげて喜んでくれた。それなのに、リストラされてしまつて……。

藁人形を見ながら該当する人を思い浮かべた。

重箱の隅をつつくような嫌がらせをした課長の顔、職場の仲間の虐めや無視の態度の悪い顔、顔、顔。

あゝ駄目だ！ 一つでは足りない！

その時「あのー、それは藁人形ではありませんか」。

何処からともなく背広姿の顔色の悪い男が現れて声をかけられた。「わあーびつくりした！ そうだと思ひますけど」と言つと「是非、譲つて頂きたい」。

何でも、一番信頼していた部下に、先祖代々受け継いできた会社を乗っ取られたので、その部下を呪いたいそう。うだ。「それならどうぞ」。男はお礼にと言つて、赤い色の可愛い手のついた指さし棒を大事そうに差し出した。

「これのおかげで私の代にずいぶん業績を伸ばしたのですよ、それなのに……」と辛そうだった。「そんな大

切なものをありがとうございます」と言つて、男と別れた。

指さし棒を振りながら歩いていると、知らないおばさんが走つてやつて来て、「あなた、何をしているの、みんな待っていますよ」と私の手を取つて駆けだした。

「人違いじゃないですか、私はぶらぶらしていただけです」。すると、「指さし棒を持った人が児童館に来て子供たちと遊んでくれると聞いていますよ」。おばさんは他人の言うことを何も聞かないで、走り続けて、いつの間にか児童館に来てしまった。

「さあ、さあ」とおばさんに手を取られたまま中に入ると、「親子で新年会」と書かれた横断幕があり、天井は薄紙で作った花や、折り紙で作ったリングのテープできれいに飾り付けされていた。すでに子供たちが、立膝座りをしている。大人たちは、周りに子供用の椅子を置いて座っている。おばさんにせき立てられて、何が何だかわからないけど、取りあえず「こんにちは」と言ってみると、「こんにちは」と大きな声が返つて来た。たぬしに、指さし棒を振りながら『大きなクリの木の下で』を歌つてみると、大人も子供も棒の動きに合わせて体を

動かしリズムをとりながら一緒に歌い出す。面白くなつて指さし棒を振りながら歩くと、子供達はみんな立ち上がつて歩き出し輪になった。大人はニコニコ見ている。歌の合間には、両手を広げて飛行機になり走り廻る子、その場でピョンピョン飛びながらくるくる回りだす子、興奮して大声を出す子達が、口をあけて笑いながらはしゃぎまわっている。一番元気な子の後ろに回り足をドンドンさせて追いかける真似をすると、味噌っ歯の子は顎を振りながら体を回して氣勢を上げる。捕まえると、半分横を向いて嬉しそうに体をくねらせる。手を放し、ドンドン足を鳴らして追いかけると、大勢の子が一緒になつて足をドンドンしながらついてくる。棒を振つて歌い出すと、みんな走りながら、飛びながら歌い出す。その仕草に大人たちも大笑い。子供たちに取り囲まれて……時間があつという間に過ぎ、気がついた時にはお腹の底から笑っていた。何年ぶりだろう……。

「親子で新年会」が終わり外に出て振り向くと、そこはうっそうとした森で児童館は跡かたもなく消えていた。怖くなつて、指さし棒を振り回すと、目の前に藁人形

をくれた白髪のお婆さんが立っている。

「元氣が出たかい」「あなたは誰?」「忘れたのかい、小さい時は何か困ったことがあると、ケセラ婆あゝって呼んでいたじゃないか」「あつ、ケセラセラの婆々!それで藁人形?」「うつうつしている時には何だつてやってみるさ、ケセラセラで、何とかなるものさ。でも、玉子は氣に入らなかつたようだね。児童館は満足したかい」「そうねえ」「じゃあ、こんなのどうだい」と言う

と、ケセラ婆は、又、消えてしまった。

「あれ、玉子じゃないか? こんな所で何をしているの」「マレオ? あなたこそ、こんなところで何をしているの」。小学校の時の同級生のマレオが突然目の前に現れた。「散歩をしながら、小学生の頃、空き家で遊んだことを思い出したら、いつの間にかこんな所に来ていたんだ」「ふゝん」「あつ、あつた!」マレオが指さした方を見ると、玉子も小五の時に遊んだことがある空き家が木立ちの向こうに見えた。

「そういうば、あの時、空き家の持ち主が、生徒が勝手に入って荒しているって学校に文句を言って、大騒動

になったわよね。私もキラキラ光る壁土を下敷きで削って、母親が学校に呼びだされたわ」

「へー、玉子もそんな事したんだ! 俺たちは奥の部屋まで探検して宝探しをしたんだよ」「それで、宝物はあったの?」「まだあるかな、ちよつと、行つてみないかい」二人は、恐る恐る近付いて、閉まっている雨戸をひいて見ると、難なく開いた。雨戸を全部開けて靴のまま畳に上がった。

マレオが私の手を引いて奥の部屋に入つて行つて「これ、これ」と、カセットデッキを見つけてスイッチを入れた。すると、ナットキングコールの黒人特有のビートの効いた「モナリザ」の歌声がふわっと部屋の中に広がった。途端に二人は音に支配され、音に酔いしれ抱き合い、我を忘れて溶け合うようにキスをした。

氣持いい! 幸せ! 玉子はうつとりしながらそつと目を開けると、ケセラ婆が、横を走り抜けたような氣がした。しびれるような頭の片隅で、ああ、この空き家も消えてしまうのだらうな…。

エッ! それじゃマレオも? 「ケセラ婆あゝ」



## 空を見上げて

馬場 真寿美

見上げれば、突き抜けるような青い空。轟音とともに、どこまでも遠く細く、白い飛行機雲が伸びていく。

ああ、あの飛行機に乗れば、きっと故郷に帰ることができるのだ。

空を見上げていた千沙の胸の中に、じーんと焦がれるように熱く切ない思いが湧き上がった。故郷を出て、もうどのくらいになるのだろう。三年？ それとも四年？ 郷愁がつんと鼻をつく。千沙の故郷は、人口二千人足らずの何もない小さな島だ。うーん、千沙は首を振る。

島にいた頃は、「こんな何もないところで、何を楽しめっていうの？」と、毎日両親に当り散らし、ふて腐れて過ごしていたものだ。だけど……、あの頃の自分には何も見えていなかったのだ。

ああ、本当に、以前の私はなんて傲慢で愚かだったの

だろう？

どれほど悔やんでも悔やみきれない。それに、千沙には分かっていった。今さらどう後悔したところで、もう取り返しはつかないのだ、ということ……。

どこまでも続く空を見上げたまま、故郷を思い出すかのように固く瞑った千沙の目尻から、ツーツと熱い涙が一滴こぼれ落ち、耳の中へと滲んで消えていった。

千沙の父親は島で漁師をする傍ら、妻や娘の手を借りて、観光客用の小さな旅館を経営していた。島での生活は便も悪く、決して楽なものではない。それに、まだ中学に通っている妹とは違い、すでに高校を卒業していた千沙は、毎日、朝早くから夜遅くまで、家業の旅館を手伝わなければならなかった。

そして――、それ以上に、まだ若く遊びたい盛りの千沙にとっては、日々変わり映えのしない島の単調な生活こそが、何よりも耐え難いのだった。

都会での暮らしを、いつも千沙は夢みていた。

おしゃれな店が立ち並ぶにぎやかな街。華やかなイルミネーション。流行りのファッションで着飾った少女た

ち。雑誌の上でしか知ることのできないそういったものすべてが、千沙にはたまらなく羨ましかった。

透き通ったどこまでも青い海、眩しく輝く空。そして何よりも、島の人々は誰もが善良で温かった。

なのに、あの頃の自分は、その大切さに気づきさえしなかったのだ。

馬鹿な私――。

家族の誰もが止めるのも聞かずに、島に遊びに来ていたタケルに誘われるままに、千沙は船に乗って上京した。

島を出た千沙が身を寄せたのは、タケルが住んでいた取り壊される寸前の古ぼけたアパートである。キッチンと六畳一間だけのささやかな新居。そこで二人は、ままたのような新婚生活を始めた。

タケルは千沙にとって初めての男で、人気アイドルグループの一人にどことなく面差しが似ている。高校を中退した後、建設作業員として工務店に勤めていた。

東京での生活は、島以上に質素なものだったが、それでも千沙には十分に刺激的だった。タケルの帰りを待ち侘びながら、狭くて古いアパートを隅々まで磨きあげた

り、朝早く起きてタケルの好物を詰め込んだ弁当を作る、そんなことまでがドキドキするほど楽しくて、千沙は毎日幸せを噛みしめていた。

けれども――、そんな日々は長くは続かない。

タケルには同じ年頃の仕事仲間がいて、彼らとつるんでは夜の街で一晚遊び回り、家に帰ってこない日も次第に多くなっていった。給料もほとんど入れてくれない。そのことでちょっとした不満を言おうものなら、タケルは容赦なく千沙に手を上げた。仕方なく、慣れない東京で仕事を探し、千沙がわずかな生活費を稼ぎ出すようになると、今度はその金をせびってくる。タケルの要求に首を横に振ろうものなら、次の朝には起き上がれないほど、蹴られたり殴られたりすることもあった。

あれは――、いつの晩のことだったろうか？

ドヤドヤと仕事仲間を引き連れて、珍しくタケルが早く家に帰ってきた日があった。それまでに、もうどこかでしこたま飲んできたらしく、皆、息が荒く酒臭い。思わず眉を顰めた千沙を、タケルは男たちに顎で指し示した。

「なつ、なかなかいい女だろ？」

それに応えるように、一番年高らしい男がニヤニヤ笑いながら、千沙の全身を睨め回す。

嫌な予感がした。恐怖で胃が縮み上がる。

「千沙、悪いんだけどさ、ちよつとの間、兄貴たちの相手してやってくれよ。オレ兄貴たちにさ、借りがあんだよ」

タケルのその言葉を聞くや、千沙はバネ仕掛けのように戸口に向かって走り出した。が、たちまち何本もの手に乱暴に腕を掴まれ、引き摺り戻される。

「やめて！ 誰か……」

手足をバタつかせ、死にもの狂いで抵抗していた千沙だったが、声を立てられないよう鼻も口も塞がれて、意識も遠のいていき、やがて、暗澹たる諦めと絶望の淵に沈んでいった――。

再び目を覚ましたとき、千沙の目の前には満天の星空が広がっていた。（助かった……のだろうか？）という甘美な思いも一瞬間を過ったが、すぐに千沙は悟った。

自分がどこに横たわっている……のか、いや、どこに埋められているのかを……。

タケルたちは、思いも寄らず死に至らしめる結果になった千沙の遺体の後始末に困り、建設途中の現場に埋めたのかも知れなかった。ここは、どこかの民家の下なのだろうか。ときどき、千沙の頭上から、楽しげな家族の笑い声が聞こえてくることもある。

あの日から、千沙はずっと空を眺めてきた。幾百もの朝と夜の空を……。冷たい地面の下で。

だから、空を見上げて、故郷に向かう飛行機を見つけると、千沙は迷わず伸び上がり、飛行機に呼びかける。

――行かないで。私はここよ、ここにいます。

そして、空に向かってさらに大きく両手を伸ばす。

――さあ、私を乗せて連れて行って。故郷へ……。

その千沙の声を聞き遂げるかのように、小型機が一機、機体をふらつかせながら民家に向かって沈んでいく。千沙の横たわっている暗く冷たい地面へと、まるで誘い込まれるように……。

次の目標は決めている

高橋 孝蔵

忙しくて全く思ったように進んでいないが、次の目標は決めている。

幕末から維新にかけて活躍した外国人についての勉強だ。彼らは明治維新への劇的な政局転換に少なからぬ影響を与え、日本の近代化に多大な貢献をした。

彼らの目を通してみる当時の日本は、今まで教わった歴史と一味違い面白い。その面白さを筆にしたいと思うが、まだ勉強が足りない。彼らの手記、伝記などすでに四十冊ぐらいいは読んだが、更にその倍ぐらいいの本や資料を読みこなし理解しなければ、最初の章さえ書き出せるものではない。

現在忙しいのは、隅田川河畔ボート記念碑建立運動に携わっているからだ。ボートが日本に導入され始めた明治十年ごろから、ハイカラなスポーツとして学生たちは

ボートに熱中した。夏目漱石も正岡子規も漕いだ。河畔の料亭で学生のボート漕ぎを見た福沢諭吉も川岸に飛び出し、学生の仲間に入れてもらったほどだった。

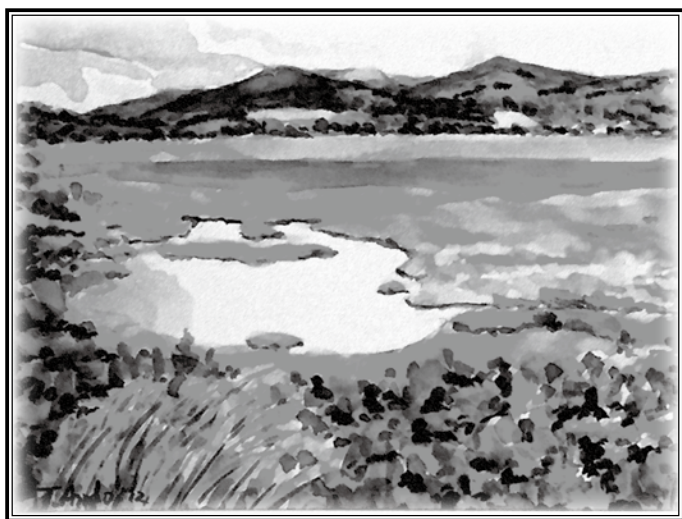
そして隅田川は昭和三十年代まで日本のボートのメッカとなった。

その隅田川にボートの記念碑を建てようということになった。言いだしつべとして、建立の目途がつくまで、お手伝いせねばなるまい。

多分夏ごろからは、外国人勉強に大きく拍車をかけられるはずと計算している。



# 活 動 報 告



水彩 安藤 晃二

## 企業OBペンクラブ本年の歩み

平成二十七年（二〇一五年）

（会員への敬称略）

### 一、役員人事

二〇一四～二〇一五年の任期の二年目に当る二〇一五年は、前年に引き続き、左記の役員が務めた。

|             |       |
|-------------|-------|
| 会長          | 西川 武彦 |
| 副会長（財務担当）   | 大平 忠  |
| 運営委員長       | 大越 浩平 |
| 事務局長        | 志村 良知 |
| 理事（会計担当）    | 清水 勝  |
| 理事（広報・渉外担当） | 安藤 晃二 |
| 理事（副運営委員長）  | 森田 晃司 |
| 監事          | 山縣 正靖 |

### 二、年度方針

①緩やかに代替わりが進むのを認識しながら、団塊世代を含むペンクラブに相応しい多彩な人材の入会を求める

②ウェブサイトの更なる充実と活用により、外部発信を拡充する

③出版活動の活性化

④「800字文学館賞」は、広報の要となる行事として継続実施する

### 三、各月の活動報告

#### 一月例会（二十二日）

・新会員 藤原道夫

・初笑落語会 三遊亭とん馬師匠

演目『替り目』『井戸の茶碗』

住吉踊り かっぱれ

・新年会（二十二日）

会員…四十九名、ゲスト十七名参加。

第六回「800字文学館賞」入賞者表彰

二月例会（十九日）

- ・新会員Ⅱ松田昌康
- ・会員講演Ⅱ羽田壽夫

『黒船絵巻』

- ・二〇一五年版会員名簿確定配付

会員数七十二名

- ・第七回何でも書こう会熱海合宿（三、四日）  
二十四名が一泊の勉強・懇親に参加した。

三月例会（十九日）

- ・ゲスト講演Ⅱシンゴ・ニシカワ氏

元国際教養大学教授

『日本とアメリカの教育事情―アメリカ人の』

私が国際教養大学で九年間教えて見えたこと』

四月例会（十六日）

- ・新会員Ⅱ塚田 實
- ・会員講演Ⅱ新田由紀子

『長唄のおさらい@企業OBペンクラブ』

長唄「岸の柳」「鞍馬山」「さくらさくら」

- ・『真相・戦場にかける橋』 出版

- ・『悠遊』 二十二号配付

五月例会（二十一日）

- ・『悠遊』 二十二号合評会。

- ・『真相・戦場にかける橋』 出版祝賀パーティー

六月例会（十八日）

- ・ゲスト講演Ⅱ武田哲夫氏（元日銀金融研究所理事）  
『日本経済大丈夫？ アベノミクスを巡って』

七月例会（十六日）

- ・新会員Ⅱ内田満夫（関西支部）

- ・ゲスト講演Ⅱ濱野 憲氏（養蜂家）

『都会でのニホンミツバチ養蜂奮闘記』

- ・第七回「800字文学館賞」公募開始

八月(夏休み)

九月例会(十八日)

・ゲスト講演Ⅱ露地野ぼん子氏(女流講師)

演目『伊勢屋の黒助』『応挙の幽霊』

『西行鼓の滝』

・第七回「800字文学館賞」公募締め切り

応募総数百六十編

十月例会(十六日)

・新会員 田宮 實

・会員講演Ⅱ松谷 隆

『クロアチアの思い出』

・ペン俳句会Ⅱ越後湯沢吟行(二十八、二十九日)

十一月例会(二十日)

・ゲスト講演Ⅱ富澤 暉氏(元陸上幕僚長)

『日本の安全保障と憲法』

十二月例会(十八日)

・退会会員 門屋信行、古川幸雄

・会員講演Ⅱ川口ひろ子

『名曲と共に辿るモーツァルトの生涯』

・第七回「800字文学館賞」入選作品発表

ホームページ公開サイトに掲載

二〇一五年は役員の第二年目で、会員数七十二名でスタートした。年度中、団塊世代三名を含む五名の新会員を迎えた。一方、お二人の会員が退会された。

出版企画は、会員の玉山和夫さんがかつて泰緬鉄道建設従事者へのインタビューをまとめ英国で出版した『Building the Burma-Thailand Railway 1942-43』の日本語訳『真相・戦場にかける橋』を会員有志九名の翻訳でTEM出版から出版した。映画『戦場にかける橋』が広めた或る種の誤解を解く為にも多くの方に読んで頂きたい本で、アマゾンで入手できる。



## 分科会活動

「サロン21」は、輪番のプレゼンターに加えて、外部講師を招聘して講演して頂くスタイルが定着した。ホームページ公開サイトへのアクセス数も着実に増えている。「何でも書こう会」は、月二回の会合に時に二十名あまりが作品を携えて参加し、プロマネが時間のやりくりに四苦八苦する盛会が続いている。

「ペンフォト句会」は、お題写真に句を付ける付け句と、写真と句がセットの自由題の二本立て、互選、というスタイルを貫いて益々盛んである。

「掌編小説研究会」は、今年も新会員を加え、十一月には第五十三回を数えた。九十六歳会員がこれまでとがらり文体を変えイメーτζチェンジという噂。

「ペン俳句」は、十二月で二百五十六回目の句会を迎えた。年一回の一泊吟行、今年の越後湯沢は生憎の天気、霧と雨の句が並んだ。

「ペン川柳」は百三十九回を数えた。隔月で動詞と名詞のお題が出て句会に臨むが、あわやというようなお題もそこは手練、上品に処理して大向こうを唸らせている。

企業OBペンクラブの活動を支えるホームページは、目標の月平均六〇〇〇アクセスには届かなかったが、多数のアクセスを頂き、毎月のトップページが楽しみという声も頂いている。より興味深く読んで頂けるホームページを目指して議論を重ね、「800字文学館」「エッセイ・コラム」「会員写真館」に、著者をキーワードにした検索機能を付加する計画である。

文責〓事務局長・志村良知



## ホームページ関連

現在のホームページは五年を越えようとしている。比較的デザインもよいとの評判を得て会員の投稿もさかに行われている。ヒット数もこの二年間は安定して推移している。

「8000字文学館」は毎月の投稿数も多く、ヒット数もおおよそ五百件と、常に上向いている。内容についても多彩であり充実している。

「8000字文学館賞」は今回募集をホームページのみに頼ったが、従来の投稿者にたいするフォローとあいまってなんとか募集の量的な目標は達成できた。

「エッセイ」は「8000字文学館」からの流入、地方会員の投稿などで現状を維持している。特に世の中のホットな話題を扱うものは多くのヒット数を数えている。

「写真館」はまだ一部の人達のご協力に頼っているが徐々に人気が出てきている。

その他のプロジェクトでは先ず「フォト句会」。これは画像と五、七、五句を総合したものでホームページで味

わうのに大変有利な素材なので善戦している。「掌編小説」は量的には多いものだが会員間でよくみられるようになった。

これからのホームページのありかたについてそろそろ会員全体で方向性を議論すべき時期と思う。ホームページを、仲間を中心にして展開していくのか、広く世間一般に発信し新しく多くの会員を集めるツールとして活用するのか、企業OBペンの今後の戦略を鑑みてご指導願いたい。

ホームページの第一弾の役目はいまのところ達成したと思う。今後団塊の世代をはじめ若い人の参入を考えれば、モバイル対応など多くのツールと機能に準じながら徐々にホームページを更新しなければならぬと思う。その時代は来つつあるので今から、勉強や検討をしなければならないと考ええる。

本年もよろしくご指導ください。

(プロマネ 上田信隆)

## ペン俳句のこの一年

## 佳句鑑賞

西川 知世

俳句のノートを繰ると、今年一年のペン俳句のメンバーの健吟ぶりが顕著である。みなさん、熱心に投句を続けてくださり、活発な句会になっていて頼もしい。

しかしながら、私自身を振り返って思えば、一年の過ぎて行くスピードは私の感覚の中で年々スピードを増していく。今や突風のごとき速さである。大切に持っているつもりにかかわらず、手のひらからこぼれていくものの多さに唖然とする。句会を続けていくことの、楽しさと重みを励みとして過ごした一年であった。毎回多くの参加者を得て句会が続いており感謝の念に堪えない。

今年の吟行は十月下旬、一泊で湯沢高原に足を伸ばした。『雪国』の小説を辿るようにトンネルを抜けると冷たく時雨れる湯沢だった。山を這い上る霧に目を奪われ、東京より一足早い雪国の晩秋を堪能した。幹事の安藤晃二さんと、お忙しい中参加してくださったメンバー各氏に感謝する。

この一年のペン俳句の成果をまとめさせていただく。

駒子の霧ひたすら梢這い上る  
樺枯るる一と日の雨と風の中  
逝く秋の雲に触れる越後かな  
黄落やりフトに雨の休息日  
時雨るるやしんと濃き幹の息  
菊伏して黄を地にこぼす雨あがり

### 特別投句

年賀来る生きてる証と友情と  
花菖蒲心静まる代々木の森  
夕やみに迎える妻の手に団扇  
戦友の遺影は若し敗戦忌  
早足で過ぎ行く時や老いの冬

玉山 和夫

火渡りの生木の燦る夏初め

安藤 晃二

摩天樓の谷間にベンチビール飲む

早や灯し木槿の白の動かざり

晚餐の卓上の銀菊香る

山峡に稲田入り組む湯沢かな

俳句は「切れ」が大切、切れによつて生じる一呼吸が俳句の奥行や広がりをつくる。晃二さんは「切れ」を使ひこなされてきた。それにより、俳句にリズムが生まれてゐる。今回の五句はみな「切れ」が効いた句。摩天樓はマンハッタンの景であろうか。ビールが旨そうである。

.....  
日脚伸ぶ余白確かむパスポート

猪股 重子

新茶汲む一氣に和み斎の膳

向日葵や峡の牛舎に牛のみず

夢語る人傍らに居る良夜

掃き寄せて音のふくらむ朴落葉

ご主人の十三回忌に寄せて、珠玉のような小さな句集を手作りで編まれた。俳句を生活の軸に置いて過ごされている。「新茶汲む」の句はその法要の席のご様子である。勤めを果たしたという安堵と、集まった方たちの温かさが表現できていて秀。俳句に託せることは大きい。

.....  
淡雪や鳩が子を追ふ浅草寺

上田 信隆

飛花落花掌にのせ薄き湿りかな

新涼や仮名文字の墨すぐ乾き

夕空に光る帰燕の裏表

背負ふ子の足やはらかき雁の頃

吟行が苦手と言われる。しかしながら句はなかなか臨場感のある句が並び、句会では好成績を続けておられる。繊細な句柄である。「新涼や」の句は、流れるような筆運びの先から伸びのある墨跡が乾いていく。仮名文字の措辞と初秋の空気がよく響き合っている。

春の夕墨絵のごとく富士ありぬ

大泉 子泉

万巻の書に飽き友と暑氣払ひ

最終戦敗れて帰路の月寒し

束の間に交わす挨拶梅雨晴間

西からの勝利の知らせ金木犀

身辺詠が得意。遠嶺にみえる富士を散歩の途中にみつけ、見惚れている姿が彷彿とされる。しばし佇んだことであろう。また、読書家でもある作者が飽きるほどの書の後の仲間との暑氣払い、尽きることのない話はきつと先ほどまで読んでいた本に及んで果てなく楽しいことだろう。

狐嫁す日北天低く冬の虹

志村 良知

暗闇に木犀在るや客送る

卒然と老松枯れし暮の秋

ハヶ峰を紅に染め霜夜明く

新しき街の聖樹の贅極め

一句目、上五は天気雨、狐の嫁入りと鑑賞した。作者の辺りは日が照っている中の雨だが、北の空は雲低く寒空に虹がかかっている。その辺りを狐の行列が通っているのかも知れない。美しい空の句だと思う。一転、五句目は近來のクリスマスシーズンの風景。句柄が自在である。

吐く息の真澄に吸はれ寒の入

首藤 しずを

立春や一鍬入れて立話

妙高に雪解けの音人の影

サックスの音色に昏るる川の秋

群れに遅れ二羽の秋鶉の帰りけり

季感のある句が並ぶ。一年で一番寒さの厳しい時期に入り、身の引き締まる感じが「寒の入」の意。「立春」はまだ寒さがあるが、意識は春へと向いている季語。畑仕事にも弾みがつく。立話の下五はその明るさを表出している。季感を大切にする俳句作りを実践している作者。

漬け樽の白菜透ける薄氷

中村 晃也

燥ぐ子を追ひかけてゐる花吹雪

組板の傷にしみ込むパセリの香

靴脱いで渚の夏を確かめる

風鈴に選ばれ風の立ちにけり

御母上の全句集を編まれた。また、雑誌投稿句が選に入ることもたびたび、頼もしいメンバーである。桜吹雪が子を追いかけているという視線、風鈴が風を立たせるという感覚、少しの逆転の発想が句に洒脱な雰囲気醸し出している。一読、画像が浮かぶのも晃也俳句の特徴。

地にありて空の色なる犬ふぐり

保坂 令華

雑踏の中の孤独やさくら舞ふ

みほとけの吐息となりぬ著莪浄土

初夏の風ピアス外せばあどけなし

倅せはにげやすきかな心太

声に出して読むと調べがなめらかなことが特徴である。一句目、犬ふぐりは空を慕って咲くゆえに、あの凜とした青なのだと納得した。初夏の風の句は、若々しい。体調を崩され、半年句会欠席が続いたが、年末にお元気な顔を拝見できたのは嬉しいことだった。御健吟を祈る。

背に余る鞆慣れ初む桜の実

森田 元斐

燕の子薨寄せ合ふ漁師村

揺れ動く尻尾を残し守宮去く

炎日の天に容赦の無き日なり

鈍色の稲佐の浜辺神渡

一句目、桜が赤い実をつける下、ランドセルがようやく身に馴染んできた子供たちとすれ違う。炎日の天を仰いで、容赦のない日差しを憂う。日々の中に俳句が馴染んでいる。稲佐の浜は、出雲の神様の集まる浜だそう。句材の豊富な故里を持たれていることは羨ましい限り。

## 二〇一五年「ペン川柳」勉強会の成果

川柳勉強会 世話人 平尾富男

月に一回の勉強会も、昨年十二月で第百三十九回を迎えた長期の伝統を誇る分科会です。「ペン川柳」は、創設時の新橋の割烹『森田』に引き続いて、銀座の薩摩料理の飲食店『黒薩摩』をお借りして勉強会を開催してきました。足掛け四年前からは『稲田屋新宿西口店』に場所を移して楽しく勉強しています。

以下に、二〇一五年一月～十二月各月のお題ごとに、世話人が選んだペン川柳メンバー十二名の代表十二句を世話人の講評と併せてご笑覧に供します。



### ● 一月 お題【盗む】

大江戸を盗む次郎吉無一文

(晃二 ていつく)

得点こそ少なかったですが、スケールの大きな優秀川柳です。鼠小僧次郎吉は、捕まったときは手元に金もなく碌な家財道具も持ち合わせなかったから、義賊として伝承されたが、実際は盗んだ金のほとんどを博打と女と酒に浪費したらしい。

### ● 二月 お題【駅】

降りる駅忘れるほどのミニあらわ

(井波 いなみ)

運が良かったのでしょうか、それとも？ みんな見て見ぬ振りをしていたのは事実です。作者は「昨日、まさに乗り越す寸前だった！」と述懐しました。何歳になっても男にとって細やかな楽しみなんです。見られる女性もそれを心得ているんですからお互いに罪はありません。

### ● 三月 お題【走る】

エッチ後にかがやきはなくなるとき走る

(明迷 めいめい)

上五の「エッチ後」に惑わされましたが、深謀遠慮な作者の意図は「越後」。「乗り鉄」なら分かったと作者は謎

掛けしました。「かがやき」とは北陸新幹線の列車名、「とき」は上越新幹線の列車名です。得点は入りませんでした。が今月一番のユニークな句で、特別推薦句としました。

#### ●四月 お題【鯉】

赤ヘルに黒が交じるも鯉沈む

(零門)  
(れいもん)

赤ヘルとは「広島カープ」のこと。大リーグから戻った黒田博樹投手が今年から古巣の広島カープに復帰入団した。黒田への期待が大きかったにも拘わらず、カープは最下位に沈んでいると広島ファンの作者は嘆いている。

#### ●五月 お題【寝る】

添い寝させ何もしないのこの爺い

(不言)  
(ふげん)

添い寝をしたのは若い女性でしょうかね。折角なので付き合ったのに、何もしないで眠ってしまうなんて、と欲求不満で文句を言っています。若い女性でなく、ひょっとしたら奥様のぼやきかも知れません。浮気されてしましますよ！

#### ●六月 お題【キス】

キス攻めで夜も寝かせぬ年増の蚊

(火酒)  
(ウオツカ)

「年増の蚊」としたのが効いています。実は作者自身(「年増の蚊」のことか。一睡もできなかった「蚊刺され男」の哀れさ(悲しい喜び)に半ば同情している趣も伝わってきますね！ 然る川柳子が「それは俺だ」とこっそり自白していました。誰とは言いません。年増の怖さを知っている我が川柳子の面々は「寝られなかった夜」「寝かせなかった夜」！)を経験済みの筈です。桑原桑原！

#### ●七月 お題【読む】

読めぬけど朝のボーズのFT紙

(鬼瓦)  
(おにがわ)

読めるふりして英字新聞「The Financial Times」を目の前に広げ、部下の社員が出勤してくるのを窺っていた現役時代。世界トップクラスの国際経済日刊紙の定期購読は、エグゼクティブを志向するサラリーマンの武器でした。読めなくても(理解出来なくても)いいのです。日経新聞にも目を通しておけば何とかごまかせたのです。



●八月 お題【風】

今日もまた風の吹くまま浮浪雲

(安兵衛)  
やすべえ

ジョージ秋山の漫画で、「ビッグコミックオリジナル」に一九七三年から長期連載されている『はぐれぐも』を詠みました。エリート人生を歩いてきた作者だからこそ、こんな御家人くずれに憧れているのです。

●九月 お題【学ぶ】

男道百年学んで尚暗し

(損得)  
そんとく

弱冠八十歳にして今から二十年後を想定して詠んだ句だそうです。尚、男の道を学ぶ気持ち（だけ）はあるようです。「男道」とは男色のことにはあらずとのこと。

●十月 お題【背中】

猫真似て背中丸めて風を避け

(酔雅)  
すいが

作者は、またも悪さをして奥方に叱られているのです。「風」は奥方のお小言です。我が川柳子は作者に同情、否、我が身のことを溜息まじりに思い出して点を入れました。情けない川柳子たちです！ 今月の最優秀句に選ばれて

しまいました。

●十一月 お題【揉む】

乳揉んで肩は揉まない似非介護

(酔深)  
すいじん

「品がない！」との非難もありました。お題がお題だけに映倫カットに触れそうな句も多い中まだまだ大人しい方だ、とは作者の弁。しかも相手は高齢者。そんな介護人がいたら寝たきり老人も若返るかも。功德！口説く？

●十二月 お題【終わり】

口説くより終り円満プロの芸

(だし)

その道のプロが詠みました。別れを上手に演出できて初めて恋愛は成功のだと豪語します。今の奥さんは「別れに失敗したから」とでも言う積りでしょうか？ 前に別の奥さんがいたかどうかは存じ上げませんが……。

\*\*\*\*\*

メンバーが二〇一五年に詠んだ句から、自薦または世話人推薦の憂愁（！）五句を以下に。（順不同）

【醉雅<sup>すい</sup>】自薦五句

(西川武彦)

「盗む」…人さまのナニを盗んで高くつき  
「キス」…キスしつつ舌先で練る次の策  
「読む」…くされ縁読んで読まれて五十年  
「背中」…猫真似て背中丸めて風を避け  
「終り」…初夢は生涯現役終わりなし

【不言<sup>ふげん</sup>】自薦五句

(岩崎洋一郎)

「揉む」…「揉んでやる」夫の好意に「触らんで」  
「風」…風よ吹けスカート捲りの共犯者  
「寝る」…寝るにはねちよいと早いと一升空け  
「背中」…曲がったね歲月映す妻の背  
「終り」…「もう終わり？」応えず冷えるこの二人

【井波<sup>いなみ</sup>】自薦五句

(稲宮健二)

「盗む」…盗めぬ盗めりやおめえ娘やらあー  
「鯉」…鯉が舞う今宵ときめく緋縮緬  
「背中」…ご近所に背を向けながら元で釣る  
「終り」…COP<sup>コップ</sup>終わり毒まぐやつがでかい面  
「キス」…キスマークモンローならば芸術品

【醉深<sup>すいしん</sup>】自薦五句

(平尾富男)

「盗む」…盗まらずも寸暇溢れる古希の日々  
「走る」…朝走り夜千鳥足いま病院  
「風」…触っても柳に風の太っ腹  
「揉む」…乳揉んで肩は揉まない似非介護  
「終り」…老いらくの恋の終わりの枯れ尾花

【だし】世話人選五句

(大野 量)

「寝る」…歌い女が一人寝るとて古歌の山  
「キス」…先斗町苦い思い出キスの味  
「読む」…買うと読むこの距離の差で落ちこぼれ  
「風」…軽井沢美女のスカート風立ちぬ  
「学ぶ」…顧みて学んだことは嘘ばかり

【零門<sup>れいもん</sup>】自薦五句

(松谷 隆)

「盗む」…盗んでも素知らぬ顔で説教し  
「走る」…昇進も噂走って泡と消え  
「揉む」…揉みすぎは抜けるだけだと頭皮言い  
「駅」…下車駅を一つ繰り上げ足捻挫  
「寝る」…大の字で軒かき寝る妻強し

【損得】<sup>そんとく</sup> 自薦五句

(細谷 博)

「背中」…父親の背を見て育ち少年院  
「風」…老兵は空気読めぬが風は読む  
「寝る」…子守唄子供寝付かず今ラップ  
「揉む」…問題は揉めば揉むほど難題に  
「終り」…これっきりこれで終りともう一杯

【安兵衛】<sup>やすべえ</sup> 自薦五句

(山縣正靖)

「盗む」…まだ青い花を盗むは罪作り  
「鯉」…今時の鯉組板で大暴れ  
「走る」…師も走りこけて転んで齢を知る  
「キス」…お前死ねマフィアブチュッと死のキス  
「終り」…除夜の鐘終り一撞き年が明け

【晃二】<sup>てるつゐ</sup> 自薦五句

(安藤晃二)

「盗む」…大江戸を盗む次郎吉無一文  
「学ぶ」…総入れ歯学ばぬ悔いを今に噛み  
「背中」…決断の背押す友よいま何処  
「終り」…人生は夢で終りの物語  
「風」…運命の風待つサンタマリア号

【火酒】<sup>ウオッカ</sup> 自薦五句

(三春)

「盗む」…大富豪人目盗んで目刺し買う  
「鯉」…手を鳴らしや顔出す亭主池の鯉  
「キス」…キス攻めで夜も寝かせぬ年増の蚊  
「読む」…鯖読んで出鱈目言うけどアジな奴  
「学ぶ」…一聞いて十学びとるいかさま師

【鬼瓦】<sup>おにがわ</sup> 自薦五句

(富田佳瑞)

「揉む」…塩揉みの白菜を噛む茶碗酒  
「読む」…読めぬけど朝のボーズのFT紙  
「風」…休肝日屋台の風に泡と消え  
「寝る」…ビンテージ寝れば果報の高値付き  
「駅」…上野駅恋の終わりは北の旅

【明迷】<sup>めいめい</sup> 自薦五句

(八木信男)

「学ぶ」…太古から師もなく学ぶ床の中  
「背中」…あの背中きつと美人だ振り向くな  
「寝る」…寝るふりを電車で学ぶジャパニーズ  
「キス」…鍋物は間接キスと却下され  
「鯉」…少子化もものかは泳ぐ空の鯉

## ペン・フォト句会

当会は、平成二十二年八月に当ペンクラブとしては二十年振りの新しい勉強会として発足し、本年であしかけ六年、名実共に立派な会に成長した。これはひとえに、八月の夏休みを除いて毎月自由題の二作品を仕上げていく常連メンバーの研鑽の賜物以外のなものでもない。

メンバーのご努力のお蔭で作品のレベルは年毎に向上し、特に写真は非常に上手になった。いつも作品を意識して面白い被写体を探すことが身につく、単なる風景写真ではなく、普通とはチョット違ったアングルから、他人なら気に留めないようなシーンをカメラに収めておく習慣が醸成された。

写真は情報のビット数が圧倒的に多いので、読者の興味を引くアイキャッチャーとしての役割が重要である。

一方、句は作品に奥行きを与えるもので、単なる写真の説明に終わらず、作品に詩情とか滑稽味を付与し、鑑賞

者の共感を得るものでなければならない。

写真と句は老夫婦のように、付かず離れずのいわゆる「間」「余韻」が重要な役割を果たす。

限られた文字数の韻文を駆使するので、語彙の補強の意味からも詩歌や俳句の勉強が大変役に立つが、これは、ペンクラブの会員ならば得意の筈である

また、互選を通じて、他人の作品を的確に批評できる鑑賞眼を養うことは非常に重要で、自分の作品の質の向上に資するところ大である。

メンバーの懇親を深める目的で始めた「世界のグルメレストラン巡り」は、なかなか好評である。毎月担当が変わるので、自分一人では探しえない素敵な食事がありつくことができ、全員楽しみにしている。

今年は、本勉強会のこれまでの成果を取り纏めた作品集を編纂できるよう検討を重ねている。

(プロマネ 中村晃也)

## 英語を読む会 再開

本プロジェクトは長い歴史を持っています。

平成十四年 スタート 英語読解、訳文を学ぶ

平成十五年 時事英語、読解と国際事情の勉強

平成十六年 活動が軌道に乗る

平成十七年・十八年 プロマネ 野瀬、中村(将)

平成十九年・二十年 プロマネ 佐久間

平成二十一年 毎回約十人参加 新聞ニュース、読み物、経済など

平成二十二年 政治、スポーツ、小説、文学、社会時評、医学など

平成二十三年 芸術、歴史、ニュース、経済、文学など

平成二十四年 経済、オペラ、野球、震災、オバマ演説、外交、万葉集など

平成二十五年 米政治、FRB法、中国の環境破壊、ローマクラブレポートなど

平成二十五年五月を持って休会していましたが、本年一月より再開することとなりました。

世界情勢、歴史観、芸術全般、文学など無限の広がりについて、国際的に英語を通じて学び議論する場です。会員諸兄弟、ご参加ください。

(プロマネ 大泉 潤)



## 「800字文学館賞」

第七回「800字文学館賞」の作品を募集したところ、海外を含む全国から一六〇編の作品が寄せられました。

入選したのは次の作品です。（氏名は敬称略とします）

|      |            |       |       |
|------|------------|-------|-------|
| 最優秀賞 | 「オレンジバス」   | （山口県） | 三好 郁子 |
| 優秀賞  | 「踊り場のある階段」 | （東京都） | 田中 園枝 |
| 入選   | 「今時の若者は」   | （新潟県） | 東 やす子 |
| 入選   | 「祖父と私」     | （東京都） | 安藤 優美 |
| 入選   | 「運、不運」     | （福岡県） | 大津 健二 |
| 入選   | 「たおやかに」    | （東京都） | 鈎子ふたみ |
| 入選   | 「あんぱんの神様」  | （東京都） | 佐々木幹雄 |
| 入選   | 「パステルカラー」  | （福岡県） | 篠原 悠介 |
| 入選   | 「ひとり歩き」    | （東京都） | 竹村 沙智 |
| 入選   | 「聖歌」       | （千葉県） | 渡会 克男 |

紙面の都合で最優秀賞作品のみ紹介します。

入選されたすべての作品は、当クラブのHPでご覧い

ただけます。

三好さん、鈎子さんは一月二十二日、クラブの新年会に参加され、会員と談笑されました。

（プロマネ 首藤、内藤、野瀬）

## オレンジバス

三好 郁子

朝七時、雲村始発のこのオレンジバスは、別名病院バスといわれている。四十分離れた町立病院に通う婆さんでいつもいっぱいだ。爺さんはめったに乗ってこない。爺さんは早くに死んでしまうらしい。私は、毎日このバスで整形外科に通う。半年前に右肘を骨折したりハビリだ。

雲村は平家落人伝説のある村で、二十年前までは蜜柑を出荷していた。白い花が山一面に咲き、オレンジ色の甘い蜜柑が輝いていた。日本人があまり蜜柑を食べなくなったのと、若い者が便利さと仕事を求めて山を降りた

のが重なり、今では雲村は二十所帯ばかりになっている。蜜柑の名残りはバスの名前に残っているだけだ。

バスが急カーブを曲がった。婆さん達が全員右側に傾いた。空気が動いた。早朝草刈をしてきたソノさんからは草の青々とした香が立ちのぼる。友さんからは、腰に貼ったシップがツンと匂う。

運転手が窓を開けた。町の金属っぽい臭いが入ってきた。

町立病院前に着いた。

「あら、バス入れてしもうた」

タヨさんが叫んだ。料金箱に百円のお金と一緒に老人バスを入れてしまったのだ。バスは運転手に見せるだけでいいのに。

「百円とバスは同じ手に持たんほうがいい。右手に百円、左手にバス。そうすりゃバスを料金箱に入れることはない。横着せんぞ」

運転手が大声で怒鳴った。婆さん達は、すぐに右手に百円玉、左手にバスを握り直した。

「皆、もう今日はバスは見せんでもいい。老人バスを

持つちよる年だというのは見たらわかる」。運転手は笑った。

婆さん達は笑わなかった。病院に一刻も早く着いて番号札を取りたいのだ。長く待つのは疲れるし、帰りのオレンジバスに間に合わなくなる。遅くなると夕方の仕事に忙しく押し寄せてくる。ひもじいと鶏が鳴く。猫も鳴く。我が家には山羊がいる。山の村は早く暮れる。

「ユキさんよ、今日は何科か」

「産科よ。ひ孫が産まれた」。目を細めた。先頭の婆さんから順に町立病院に吸い込まれていく。

最後に私が早足で行く。



|       | 氏 名          | 出 身 会 社             |
|-------|--------------|---------------------|
| 都甲 昌利 | とこう まさとし     | 日本航空                |
| 富岡喜久雄 | とみおか きくお     | フジタ（藤田組）            |
| 富田 佳瑞 | とみた よしみつ     | 三菱商事                |
| 鳥海 博  | とりうみ ひろし     | 山一証券                |
| 内藤真理子 | ないとう まりこ     |                     |
| 中川路 明 | なかかわじ あきら    | ダイセル化学工業            |
| 中村 晃也 | なかむら あきや     | 三菱化学                |
| 中村 爽  | なかむら そう      | 日本工営                |
| 新山章一郎 | にいやま しょういちろう | 在日米国海軍基地            |
| 西川 武彦 | にしかわ たけひこ    | 日本航空                |
| 西川 知世 | にしかわ ちよ      | 三菱倉庫                |
| 新田由紀子 | にった ゆきこ      | シュプリング・ジャパン         |
| 野上 浩三 | のがみ こうぞう     | 日本生命保険              |
| 野瀬 隆平 | のせ りゅうへい     | 石川島播磨重工業            |
| 橋本 政彦 | はしもと まさひこ    | 日商岩井                |
| 羽田 壽夫 | はねだ ひさお      | 三菱重工業               |
| 馬場真寿美 | ばば ますみ       | ヤマハ                 |
| 浜口須美子 | はまぐち すみこ     | 稲畑産業                |
| 浜田 道雄 | はまだ みちお      | 労働省                 |
| 濱田 優  | はまだ ゆたか      | 三菱化学                |
| 原田 信  | はらだ まこと      | NHK                 |
| 平尾 富男 | ひらお とみお      | キャノン                |
| 廣澤 重穂 | ひろさわ しげほ     | シータス                |
| 福本多佳子 | ふくもと たかこ     | 日本航空、Creative Tours |
| 藤原 道夫 | ふじわら みちお     | 日本赤十字社（現職）          |
| 保坂 令子 | ほさか れいこ      |                     |
| 細谷 博  | ほそや ひろし      | 日立製作所、日立メディコ        |
| 松浦 武弘 | まつうら たけひろ    | 伊藤忠                 |
| 松浦 俊博 | まつうら としひろ    | 東芝                  |
| 松谷 隆  | まつたに たかし     | 富士通                 |
| 松田 昌康 | まつだ まさやす     | 東芝                  |
| 水原亜矢子 | みずはら あやこ     | 東急電鉄                |
| 三 春   | みはる          | 住友商事                |
| 森田 晃司 | もりた こうじ      | 三菱商事                |
| 八木 信男 | やぎ のぶお       | 浪速学院高校（現職）          |
| 矢澤 正二 | やざわ しょうじ     | 信金中央金庫              |
| 山縣 正靖 | やまがた まさやす    | 三菱銀行                |
| 横内 則之 | よこうち のりゆき    | トヨタ自動車、トヨタ紡織        |
| 吉寄 清己 | よしぎき きよみ     | 関西ペイント              |



# 会 員 名 簿 (五十音順)

| 氏 名   |             | 出 身 会 社              |
|-------|-------------|----------------------|
| 阿部 典文 | あべ みちふみ     | 石川島播磨重工業             |
| 新井 良侑 | あらい よしゆき    | ダイセル化学工業             |
| 安藤 晃二 | あんどう てるつぐ   | 三菱商事                 |
| 池田 隆  | いけだ たかし     | 東芝                   |
| 市川 忠夫 | いちかわ ただお    | 東芝                   |
| 稲宮 健一 | いなみや けんいち   | 三菱電機                 |
| 猪股 重子 | いのまた しげこ    |                      |
| 岩崎洋一郎 | いわさき よういちろう | 三菱レイヨン               |
| 上田 信隆 | うえだ のぶたか    | 東芝情報システム             |
| 上原 利夫 | うえはら としお    | 住友商事                 |
| 鵜飼 直哉 | うかい なおや     | 富士通                  |
| 内田 満夫 | うちだ みつお     | 神戸製鋼所                |
| 大泉 潤  | おおいずみ じゅん   | 三菱化学                 |
| 大越 浩平 | おおこし こうへい   | NEC インフロンティア (旧 日通工) |
| 大月 和彦 | おおつき かずひこ   | 労働省                  |
| 大西 宏  | おおにし こう     | 松下電器                 |
| 大平 忠  | おおひら ただし    | 三菱化学                 |
| 大野 晔  | おおの ただし     | 三井物産                 |
| 川口ひろ子 | かわぐち ひろこ    | アトリエ・リヴィエール          |
| 川村 邦生 | かわむら くにお    | 第一勧業銀行               |
| 木村 敏美 | きむら としみ     | 郵政省簡易保険局             |
| 金京 法一 | きんきょう ほういち  | 三菱商事、三菱総研            |
| 倉藤 金助 | くらふじ きんすけ   | 桜井会計事務所              |
| 児玉 寛嗣 | こだま ひろつぐ    | 東芝                   |
| 斉藤 征雄 | さいとう まさお    | 三菱化学                 |
| 清水 勝  | しみず まさる     | 明治安田生命 (安田生命)        |
| 志村 良知 | しむら りょうち    | リコー                  |
| 下山 健夫 | しもやま たけお    | サントリー、B-R31 アイスクリーム  |
| 首藤 静夫 | しゅとう しずお    | 三菱化学                 |
| 杉浦 右藏 | すぎうら ゆうぞう   | NTT、三菱電線工業           |
| 高橋 孝蔵 | たかはし こうぞう   | 丸紅、松竹                |
| 田原 敬  | たはら けい      | 和田製本工業               |
| 玉山 和夫 | たまやま かずお    | 通産省、日英協会             |
| 田 宮 實 | たみや みのる     | 厚生労働省                |
| 塚 田 實 | つかだ みのる     | 日立製作所                |

## 編 集 後 記

▽編集委員は伝統的に「白内障」に罹る程、会員の皆さんからの素晴らしい原稿を読み込みます。表紙画もアート・ディレクター多佳子女史の渾身の一作です。編集も含め会員の皆さんの心の籠った手作り年刊誌は、今年もまた外部の読者からも好評を賜れるものと確信しています。(平尾)

▽数十人もの会員皆さんの原稿を読みながら思ったことは「悠遊」には何と素晴らしい皆さんの情熱と知的エネルギーが凝縮していることか、ということ。二十三号も、これまでの伝統に違わない中味の濃いものになりました。(斉藤)

▽昨年、首藤さんが次号はもっと上手くやるぞと宣言したように、編集作業スケジュールの見直しから始まり、文章校正に優れた斉藤さんの登場、そして皆さんの熱意もった作品群。アートも二十三号に魅力を添えるものに仕上がったと信じています。(福本)

▽二つの特集テーマに硬軟を取り合わせたのが良かったように、伸び伸びした作品が多いのではないかと思います。自由題、創作短編も多く、全体としてバランスの良い仕上がりになりました。(首藤)

企業OBペンクラブ同人誌

### 「悠遊」第二十三号

二〇一六年四月十二日発行

発行者 企業OBペンクラブ会長

大越浩平

印刷所 株式会社 毎栄

東京都千代田区一ツ橋一―一 (〒一〇〇―〇〇三)  
TEL 〇三―三三二―一〇四七九

連絡先 企業OBペンクラブ事務局

志村良知

横浜市港北区大倉山五―一―八〇四 (〒二二―一〇〇三七)  
Eメール: ryushinura@f01.iscom.net  
クラブURL: <http://www.obpen.com>

口座 三菱東京UFJ銀行海老名支店 (409)

企業OBペンクラブ 会計担当 清水 勝  
(普通 1086096)  
(本年6月より口座変更予定です)

## ペン・フォト句（後編）

湖と **静かに語る** 森の精



清水 勝

**すずしろ**の  
風に震える 素肌かな



池田 隆

男厨は 自腹切っても  
**道具立て**



三 春

風渡る 夜の**竹林**の  
おぼろかな



下山 健夫

**左翼**でも日の丸掲げ  
舞い上がる



平尾 富男

この**一団** 北へ帰らず  
ひと稼ぎ



矢澤 正二



安藤 晃二



塚田 實



首藤 静夫



山縣 正靖



松浦 武弘